

大都市近郊における複合文化施設

吉沢, 淳 / YOSHIZAWA, Jun

(発行年 / Year)

2008-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2008-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

P3117.5
M35-2
2007-52

2007年度 修士設計

大都市近郊における複合文化施設

法政大学大学院工学研究科建設工学専攻

06R5355 吉沢 淳

主査—大江新教授

副査—富永讓教授

副査—永瀬克己教授

英文概要

Background and purpose of design

Moving to the center of a city might be too advanced to the downtown of suburbs. Misgivings of this desire are starting points of the master design. The population is overcrowded, the apartment and the housing complex line, the factory of the office building and light industries lines suburbs by the rapid expansion of population etc. today, and it lines even with a shopping center and a large-scale shopping mall. It is nothing that the suburbs municipality holds the population that exceeds 100,000 now at the time of overcrowded of the population in suburbs even if already abnormal. The downtown of suburbs begins to specialize in commerce with an increase in this population. Thinking the loss of the culture from the town by specializing in commerce, and seeming come the function only as "Young person's town" doesn't become possible. The city planning that young and old various man and woman' people visit to break down this situation might be necessary, and it start from forgetting neither suburbs nor the trait in the region.

I wonder whether it is a conception of integration that it is necessary today when thinking that it is transition from the group from which the piece is connected make to individualism and .. piece.. turn the history of the modernization of the human race. In the downtown of suburbs, there is a problem that the number of stores by the advancement of a large-scale store decreases. It aims to make the Machida city where I have been living for 24 years suburbs of the object, and to propose the complex facility where a new synergy effect can be expected by not only combining the old act like mere land by the integration of two or more facilities and the saving of expenditure, etc. but also combining the facilities function and the user in design the master based on this problem.

Design method

When designing, a current history of suburbs in Japan and the history and the current state of the Machida city are examined. Old was a residential quarter though the downtown around Odakyu line Machida-station was prospering as a commercial city now. The history as the commercial city can catch a glimpse of the activity of the residential quarter and the citizens who remain still from of old because it is not long yet. And, I think that it lives in Machida from an early age, and there is something seen because it is me who has experienced Machida long. "It seems to be Machida" that comes into view and is replaced with the program, they are combined, and what one will be needed in the future is researched. Moreover, it refers by reading the drawing and the photograph, and it not only is allowed to coexist but also it proposes the model where a new activity arises as a design though it doesn't know how it functions by the common space's taking up the case with the current complex facility, and being arranged very. It aims planning suburbs Machida's future from the above-mentioned point, and designing a suitable appearance for Machida.

大都市近郊における複合文化施設

英文概要 1

目次 2

修士設計をはじめるにあたって 3
設計の背景
修士設計概要

大都市近郊をデータから読む 5
町田市の産業の沿革・概要
町田市の都市構想

町田市の歴史を地図から読む 13
明治の地図
大正の地図
昭和の地図

事例から考える複合の可能性 23
丸亀美術館
鬼石多目的ホール
北上市文化交流センター
スパイラル
オアシス21
ヒルサイドテラス

敷地分析 30
計画地調査
用途別土地利用図


設計による提案 37
設計コンセプト
平面計画
断面計画
立面計画
模型写真

あとがき 67

謝辞 68

参考文献 69

修士設計をはじめるにあたって



設計の背景・目的

郊外の中心市街地は、都心化が進み過ぎているのではないか。

この思いに対する危惧が修士設計の出発点である。今日、人口の急増などにより、郊外は人口が密集しアパートや集合住宅、オフィスビルや軽工業の工場、ショッピングセンターや大規模ショッピングモールまでが立ち並ぶ状態である。郊外に人口が密集する現在、郊外自治体が10万人を超える人口を抱えることはもはや異常でもなんでもない。この人口の増加と共に、郊外の中心市街地は、商業に特化し始めている。商業に特化することで、街からは文化が失われつつあり、「若者の街」としてだけ機能するようになってしまいそうに思えてならない。この状況を打破すべく、老若男女さまざまな人たちが訪れるような街づくりが必要であり、それは郊外の・その地域の特色を忘れないことから始まるのではないだろうか。

人類の近代化の歴史が集団から個人主義化・個化への変遷であると考え、今日必要とされているのは、個を結ぶ統合の発想ではないだろうか。郊外の中心市街地では、大型店舗の進出による店舗数が減少しているという問題がある。この問題を踏まえ、本修士設計では、私が24年間暮らしてきた町田市を対象の郊外とし、複数施設の一体化による単なる土地や経費の節約という合築行為にとどまらず、施設機能や利用者の複合化により、新しい相乗効果が期待できる複合施設を提案することを目指す。

設計の方法

設計をするにあたって、これまでの日本の郊外の歴史、町田市の沿革・現状を調べる。小田急線町田駅周辺の中心市街地は、現在は商業都市として栄えているが、古くは住宅地であった。商業都市としての歴史はまだ長くないので、まだ古くから残る住宅地や市民の活動を垣間見ることができる。そして、幼い頃から町田に住んでいて、町田を長く経験してきた私だから見えるものがあると思う。そうして見えてきた「町田らしい」をプログラムに置き換えて、それらを複合させていき、今後どのようなものが必要とされるかを研究する。また、今までの複合施設の事例を取り上げて、共有空間がどのように配置されどのように機能しているのかを図面や写真を読むことで参考にし、共存させるだけでなく、新たな活動が生まれるようなモデルを設計として提案する。

以上の点から郊外町田の将来を構想し、町田に相応しい姿を設計することを目標とする。

大都市近郊をデータから読む

町田市の産業の推移から今、町田では何が望まれているのかを探る
また、都市計画の側面から、市の方針を調べる

町田市の産業

概要

町田市の産業を大きく分けると、農業、工業、商業の三つに分類することができる。市の産業の大部分を占めるのは、やはり商業であり、JR や小田急町田駅周辺などの中心市街地には多数の店舗が存在している。また、工業・農業は、主として市郊外に宅地部分と混在して分布しており、大規模なものはあまり見られない。工業においては中小規模事業者の数が多く、農業においては兼業農家がほとんどとなっている。

産業構造

2004 年調査では、市内の全産業の中で、事業所数では「卸売・小売業」が 27.7% で第 1 位となっており、続いて「サービス業（他に分類されないもの）」、「飲食店、宿泊業」、「建設業」、「医療、福祉」、「不動産業」、「製造業」、「教育、学習支援業」の順となっている。また、従業者数も事業者数と同様に「卸売・小売業」が 26.5% で第 1 位、続いて「サービス業（他に分類されないもの）」、「飲食店、宿泊業」、「医療、福祉」、「教育、学習支援業」、「製造業」、「建設業」、「運輸業」の順となっている。2004 年と 2001 年とを比較してみると、総数については事業所数 4.9%、従業者数 5.1% の減少がみられるが、構成順位に関してはあまり変化はみられない。また、従業者規模別でみると、いずれの産業も従業者数 10 人未満の事業所が 6～7 割を占めており、市内産業において小規模事業所が目立っている。

1. 卸売・小売業

事業所数、従業者数ともに町田市のなかで最も多いこの産業は、事業所数では 3,136 事業所、31,138 人の従業者がおり、従業者規模別でみると、従業者 10 人未満の事業所が 7 割以上を占めている。2001 年との比較では、事業所数で 95 事業所、従業者数で 1,080 人の減少となっている。

2. サービス業（他に分類されないもの）

サービス業（他に分類されないもの）には、洗濯・理容・浴場業、娯楽業、広告業などの業種が含まれており、事業所数、従業者数いずれも卸売・小売業に次いで第 2 位に位置している。事業所数 2,213 事業所、従業者数 17,506 人で、2001 年と比較してみると、84 事業所、93 人が減少している。

3. 飲食店、宿泊業

事業所数、従業者数ともに第 3 位に位置しているこの産業は、2001 年と比較して、事業所数では 56 事業所が減少しているが、従業者数では 106 人の増加がみられる。

3. 飲食店、宿泊業

事業所数、従業者数ともに第 3 位に位置しているこの産業は、2001 年と比較して、事業所数では 56 事業所が減少しているが、従業者数では 106 人の増加がみられます。

4. 建設業、製造業

建設業、製造業ともに減少傾向にあり、特に製造業は事業所数、従業者数とも 2001 年比の減少率が大きなものとなっている。

5. その他

全体として減少傾向にあるが、「医療、福祉」と「不動産業」については、事業所数、従業者数ともに増加している。

< 産業別事業所数及び従業者数 >

区分	事業所数				従業者数			
	2001年		2004年		2001年		2004年	
	実数	構成比(%)	実数	構成比(%)	実数(人)	構成比(%)	実数(人)	構成比(%)
総数	11,921	100.0	11,337	100.0	123,633	100.0	117,325	100.0
農業	19	0.2	23	0.2	189	0.2	181	0.2
鉱業	1	0.0	1	0.0	14	0.0	11	0.0
建設業	1,259	10.6	1,186	10.5	9,029	7.3	8,308	7.1
製造業	640	5.4	585	5.2	9,708	7.9	8,848	7.5
電気・ガス・熱供給・水道業	6	0.1	2	0.0	378	0.3	124	0.1
情報通信業	161	1.4	133	1.2	1,835	1.5	1,934	1.6
運輸業	191	1.6	176	1.6	3,643	2.9	4,386	3.7
卸売・小売業	3,231	27.1	3,136	27.7	32,218	26.1	31,138	26.5
金融・保険業	226	1.9	194	1.7	3,864	3.1	3,679	3.1
不動産業	718	6.0	725	6.4	3,197	2.6	3,508	3.0
飲食店、宿泊業	1,570	13.2	1,514	13.4	14,852	12.0	14,958	12.7
医療、福祉	833	7.0	847	7.5	12,000	9.7	12,582	10.7
教育、学習支援業	666	5.6	584	5.2	11,447	9.3	9,848	8.4
複合サービス事業	50	0.4	18	0.2	1,343	1.1	314	0.3
サービス業（他に分類されないもの）	2,297	19.3	2,213	19.5	17,599	14.2	17,506	14.9
公務（他に分類されないもの）	53	0.4	-	-	2,317	1.9	-	-

図 1 - 1

< 産業別の従業者規模別事業所数の割合 >

区分	卸売・小売業		サービス業（他に分類されないもの）		飲食店、宿泊業		建設業		その他	
	実数	構成比(%)	実数	構成比(%)	実数	構成比(%)	実数	構成比(%)	実数	構成比(%)
総数	3,136	100.0	2,213	100.0	1,514	100.0	1,186	100.0	3,288	100.0
1～4人	1,625	51.8	1,388	62.7	740	48.9	637	53.7	1,679	51.1
～9人	734	23.4	457	20.7	314	20.7	306	25.8	712	21.7
～19人	425	13.6	196	8.9	220	14.5	178	15.0	400	12.2
～29人	191	6.1	76	3.4	125	8.3	34	2.9	170	5.2
～49人	76	2.4	45	2.0	96	6.3	18	1.5	151	4.6
～99人	50	1.6	26	1.2	14	0.9	11	0.9	109	3.3
～299人	23	0.7	23	1.0	3	0.2	2	0.2	57	1.7
300人以上	4	0.1	-	-	-	-	-	-	10	0.3
派遣・下請のみ	8	0.3	2	0.1	2	0.1	-	-	-	-

図 1 - 2

町田の商業の沿革

町田では、市内の各地で縄文・弥生時代の遺跡が発見されている。このことは、当時の人々にとって、町田が狩猟や農耕に適した土地だったことを示している。

鎌倉時代には、武蔵の国の国府・府中と、幕府の本拠地である鎌倉とを結ぶ鎌倉街道沿いの宿場町が栄えていた。

江戸時代に入ると、町田地域は27の村々に分かれており、農業が盛んに行われていた。江戸時代の後期の原町田地域では、「二の市」に加えて「六の市」が立つようになり、これが原町田地域の商店街の原点になっている。

明治以降は、生糸の生産地の甲府・八王子と、貿易港の横浜とを結ぶ「絹の道」の中継点としてにぎわっていた。明治14年には横浜線が、昭和2年には小田急線が開通し、地域の発展に大きな影響を及ぼした。

昭和33年(1958年)、町田町、鶴川村、忠生村、堺村の合併により、東京都9番目の市として市制が施行された。以後東京のベッドタウンとして人口が急増し、市街地が開発された。

町田市の商店街が急速に力をつけてきたのは、昭和30年代後半で、1958年の売上高31億6千万円が1964年には131億9千万円と4倍以上に激増した。

町田市及び周辺都市の人口の急増は大型商業資本の関心を呼び、昭和40年代後半になるとその進出が顕著になった。これら大型店の進出は中小小売店にとってはまさに死活問題であった。特にここ数年は、町田市郊外及び周辺都市の大規模小売店等、大型店の進出や24時間営業のコンビニエンスストア、形態をかえたディスカウントストアの進出が目立っている。このことが中小小売店に脅威をもたらしており、商業を取り巻く環境は年々厳しくなっている。

<市内卸売業・小売業の推移>

(1) 総数

	1994年	1997年	1999年	2002年
商店数	2,850	2,911	3,120	2,952
従業者数	23,710	23,890	27,227	28,337
年間販売額(百万円)	656,715	695,890	677,259	689,838

(2) 卸売業

	1994年	1997年	1999年	2002年
商店数	434	399	519	469
従業者数	3,740	3,393	3,761	3,879
年間販売額(百万円)	178,199	172,202	181,359	169,241

(3) 小売業

	1994年	1997年	1999年	2002年
商店数	2,416	2,512	2,601	2,483
従業者数	19,970	20,497	23,466	24,458
年間販売額(百万円)	478,516	523,688	495,901	520,597

(4) 大規模小売店舗数及び店舗内事業所

	1997年	1999年	2002年
大規模小売店舗数	50	62	65
大規模小売店舗内事業所	341	376	431
従業者数	6,313	6,846	8,917
年間販売額(百万円)	226,598	259,207	269,139

図1-3

現状

<卸売業>

2002年商業統計調査によると、卸売業は、事業所数469店で対99年比▲9.6%、50店減少しています。従業者数3,879人で対99年比3.1%、118人増加している。年間販売額は1,692億4,100万円に対99年比▲6.7%、121億1,800万円減少している。

産業小分類別の事業所数では、第一位が機械器具卸売業(155店)、第二位が建築材料、鉱物・金属材料等卸売業(110店)となっている。

<小売業>

小売業は、事業所数2,483店で対99年比▲4.5%、118店減少している。従業者数は24,458人で対99年比4.2%、992人増加している。年間販売額は5,205億9,700万円に対99年比5.0%、246億9,600万円増加している。多摩地区では事業所数、従業者数、年間販売額のすべてにおいて八王子市に次いで第2位を占めている。また、商店数が減少しているにもかかわらず、従業者数及び年間販売額が増えていることから、大型店の増加の影響が考えられる。

産業小分類別の事業所数では、最も多いのが飲食料点小売業、次いで織物・衣服・身の回り品小売業となっている。

近郊都市(八王子・相模原・厚木・大和)と比較してみると、一店舗当たりの年間販売額や売場面積の値が他市よりも高いことから、経営水準及び経営規模において上位にいることがわかる。

<近郊都市との比較>

	人口	商店数	従業者数(人)	年間販売額(百万円)	売場面積(平方メートル)
町田市	390,811	2,483	24,458	520,597	392,840
八王子市	543,210	3,667	32,167	609,551	486,492
相模原市	613,719	4,090	35,110	585,582	560,406
厚木市	220,584	1,841	16,471	292,383	280,744
大和市	216,559	1,701	15,870	225,337	253,130

図1-4

町田の工業の沿革

1958年に市制が施行されて以降、「工場誘致条例」などの制定により、町田市の工場総数は着実に数を増やしていった。しかし、水資源に恵まれていないことなどから、大規模な工場の立地はなく、工業の核となるような中心的企業も存在していない。

これらの状況の解消とメリットを活かしうる秩序ある街づくり及び中小企業の育成を図るため、1999年4月に、優良企業の誘致と中小企業の進出を奨励する措置として「町田市相原・小山土地区画整理事業地内企業誘致条例」を制定した。すでに、いくつかの企業がこの相原・小山地区、いわゆる「町田グランネットタウン」の業務集積ゾーンに進出をはじめており、「まちだテクノパーク」と呼ばれるような企業団地などを形成しつつある。このことが呼び水となって、今後もさらなる優良企業の誘致と市内中小企業の進出が期待されている。

1. 工場数等の推移

バブル期までは穏やかながらも順調に推移していたが、バブル崩壊とともに廃業する企業が多く、それ以降も景気の停滞が続いているため、工場数・従業員数ともに減少傾向にある。

<工場数・従業員数・製造品出荷額等の推移>

	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年
工場数	260	262	246	216	234
従業員数(人)	6,145	6,143	5,945	5,691	5,875
製造品出荷額等(百万円)	86,356	89,667	93,227	78,658	84,162

図1-5

2. 従業員規模別推移

町田市には従業員数200人を超える大規模事業所は僅かで、各年における事業所数の変動もほとんど見られない。それに対して従業員数の小規模な事業所の割合は高く、その変動も大きなものです。近年の事業所数の減少なども、小規模事業所数の変動が大きく影響しています。

<従業員規模別の工場数・従業員数・製造品出荷額等の推移>

区分	1999年		2000年		2001年		2002年		2003年		
	実数	増減比(%)	実数	増減比(%)	実数	増減比(%)	実数	増減比(%)	実数	増減比(%)	
工場数	総数	260	100.0	455	100.0	246	100.0	216	100.0	373	100.0
	1~3	-	-	193	42.4	-	-	-	-	139	37.3
	4~9	134	51.5	137	30.1	117	47.6	102	47.2	121	32.4
	10~19	61	23.5	58	12.7	59	24.0	46	21.3	45	12.1
	20~29	31	11.9	32	7.0	35	14.2	32	14.8	32	8.6
	30~49	8	3.1	10	2.2	8	3.3	12	5.6	8	2.1
	50~99	12	4.6	11	2.4	16	6.5	13	6.0	17	4.6
	100~199	11	4.2	11	2.4	9	3.7	8	3.7	8	2.1
	200~299	2	0.8	2	0.4	1	0.4	2	0.9	2	0.5
300以上	1	0.4	1	0.2	1	0.4	1	0.5	1	0.3	
従業員数	総数(人)	6,145	100.0	6,554	100.0	5,945	100.0	5,691	100.0	6,158	100.0
	1~3	-	-	411	6.3	-	-	-	-	283	4.6
	4~9	806	13.1	811	12.4	666	11.2	593	10.4	684	11.1
	10~19	871	14.2	808	12.3	808	13.6	645	11.3	638	10.4
	20~29	779	12.7	792	12.1	852	14.3	779	13.7	807	13.1
	30~49	325	5.3	400	6.1	x	-	470	8.3	320	5.2
	50~99	803	13.1	740	11.3	1,162	19.5	988	17.4	1,234	20.0
	100~199	1,386	22.6	1,432	21.8	1,223	20.6	1,043	18.3	985	16.0
	200~299	x	-	x	-	x	-	x	-	x	-
300以上	x	-	x	-	x	-	x	-	x	-	
製造品出荷額等	総数(百万円)	86,356	100.0	92,137	100.0	93,228	100.0	78,659	100.0	85,941	100.0
	1~3	-	-	2,471	2.7	-	-	-	-	1,779	2.1
	4~9	7,190	8.3	7,890	8.6	6,170	6.6	5,566	7.1	6,171	7.2
	10~19	1	1.4	10,694	11.6	10,437	11.2	8,017	10.2	7,093	8.3
	20~29	10,867	12.6	11,528	12.5	13,749	14.7	9,038	11.5	11,268	13.1
	30~49	3,133	3.6	5,181	5.6	x	-	7,716	9.8	4,205	4.9
	50~99	19,096	22.1	17,479	19.0	26,206	28.1	21,093	26.8	21,093	24.5
	100~199	25,251	29.2	27,303	29.6	24,373	26.1	18,046	22.9	18,767	21.8
	200~299	x	-	x	-	x	-	x	-	x	-
300以上	x	-	x	-	x	-	x	-	x	-	

図1-6

現状

2003年の町田市の工場数(従業員数4人以上の工場)は多摩地区26市中、八王子、青梅に次いで第3位に位置している。しかし、従業員数10人未満の事業所が全体の69.7%と7割近くを占めていることから分かるように、そのほとんどが中小零細企業となっている。業態についても、部品加工や最終製品の製造組立など、いわゆる「下請け」的な性格が強く、不況のあおりを受けやすい事業所が多数存在する。

工場立地条件としては、(1)東名高速道路が近く、都心にも近い(2)川崎や相模原等の工業集積地に近い(2)相原・小山地区が区画整理により業務用地として展開が可能、等のメリットを備えています。町田市には特に目立った工業というものが無いため、メリットを活かしきれないという現状がある。

また、工場数等の推移については、2002年から2003年にかけて、工場数、従業員数、製造品出荷額等、いずれの項目も増加しているが、長期的な視点でみてみると、やはり減少傾向にあるといえる。

町田の農業の沿革

町田市は戦前戦後を通じ、東京農業の中心地の一つであり、「小山田三つ葉」「禅寺丸柿」の代表的な生産地として知られていた。また、畜産業も盛んな地域であった。

その後もほうれん草などの葉菜類、ナスなどの果菜類、ばれいしょなどのいも類を中心に生産し、都内で有数の産地となっていた。

しかし、1970年(昭和45年)をピークとした激しい都市化の波にさらされ、急激な宅地開発の進展とともに、農地と宅地の混在化、畜産業における環境問題など、農業生産環境の悪化がみられるようになった。

農地は長期的な減少傾向にあり、田畑や山林等が開発により、宅地として都市化が進んできた。農家戸数も長期的に減少している。

<土地利用の推移>(単位:ヘクタール)

	総数	宅地	田	畑	山林	雑種地	その他
1980年	7,154	1,967	260	1,159	1,538	473	1,757
1985年	7,154	2,144	192	1,081	1,378	468	1,891
1990年	7,154	2,361	161	999	1,249	444	1,940
1995年	7,154	2,512	140	881	1,153	437	2,031
2000年	7,162	2,633	121	785	1,067	426	2,130
2003年	7,162	2,706	105	739	1,042	413	2,157

図1-5

<農家戸数の推移>(単位:戸)

	総数	専業農家	第1種兼業農家	第2種兼業農家
1980年	2,247	175	193	1,879
1985年	2,101	169	180	1,752
1990年	1,704	113	145	1,446
1995年	1,349	77	171	1,101
2000年	1,159	112	92	955

図1-6

現状

町田市の総世帯数に対する農家戸数の割合は約0.8%で、123戸に1戸の割合になっている。また、兼業農家が90.3%の割合を占めており、農業従事者の約70%は60歳以上である。

農業産出額は野菜が最も多く、9億7千万円で全体の62.5%、次いで乳用牛が1億8千万円で11.7%を占めている。

農産物の出荷先は、JAアグリハウス、生協、市場となっている。その他、地産地消・安心安全を目指す直売所の数も増えており、販売を通じて市民との交流が行われている。

また、農地は農産物の生産基盤であるだけでなく、都市における貴重な緑地空間である。農地の持つ多面的機能に着目し、保全をはかっていく必要がある。

<主な農産物生産状況>

作物	作付面積 (ha)	収穫量 (t)
水稻	28	116
陸稲	12	20
小麦	8	26
ほうれん草	60	629
ばれいしょ	31	602
さといも	28	334
こまつな	24	424
だいこん	23	894
くり	75	76
うめ	30	47
かき	6	49
ぶどう	1	5
日本なし	0	4

家畜 飼養頭数(頭・羽)

乳用牛	210
肉用牛	50
豚	800
鶏	30800

資料：多摩の農業統計 平成14年現在
(0は単位に満たないもの)

<農業産出額順位>

1位	ほうれんそう
2位	こまつな
3位	生乳
4位	鶏卵
5位	トマト

資料：多摩の農業統計 平成14年現在

「環境文化」を育てる都市

町田が有する北部の丘陵をはじめとする樹林地・農地や河川などの自然的な資源、歴史的な資源などを守り、活かして、環境施策の推進とともに市民をはじめとした多くの人々の関わりによって、新たな「環境文化」を育てる都市としていく。環境文化空間の基軸の形成（広域的な尾根緑地のネットワークの連携強化、河川環境軸の形成、歴史環境軸の形成）／多様な環境資源を保全・活用した環境文化育成拠点の整備／鶴見川源流丘陵地域での総合的な環境文化空間「町田の杜」の創出／環境文化を育む魅力ある住宅地／子供達を育む場の整備

「環境文化」を育てる都市のイメージ

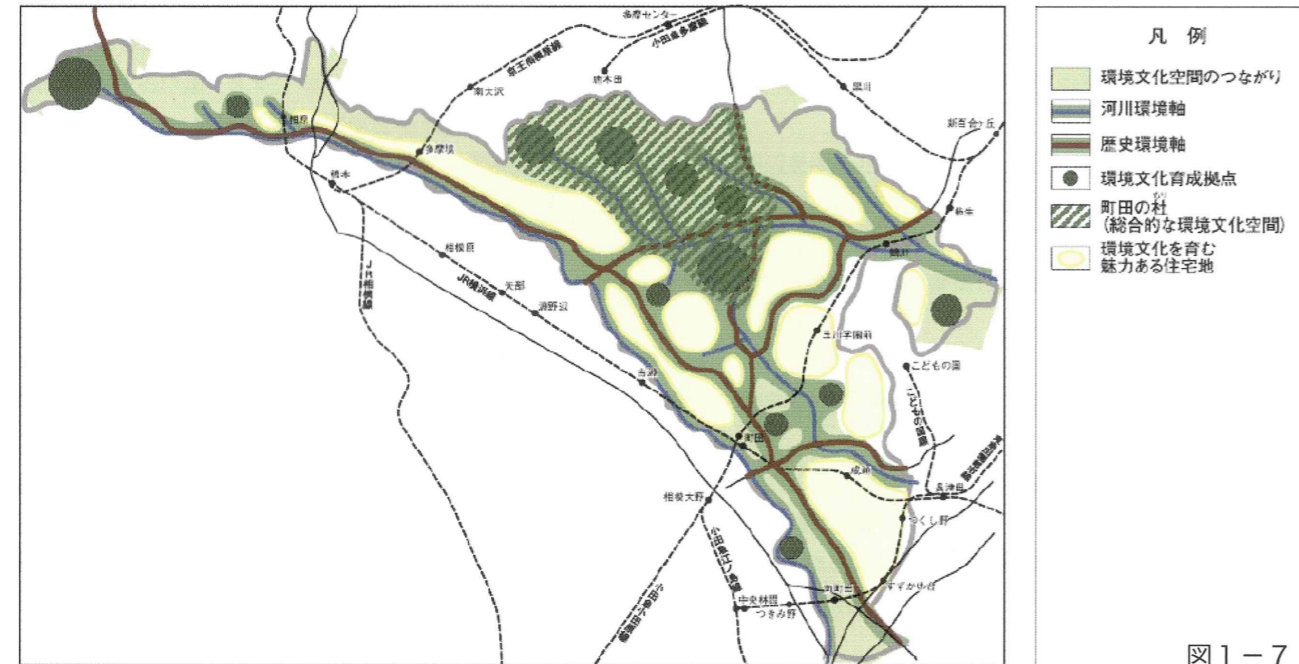


図1-7

「活力」を維持する都市

すべての人が一人で自由に移動できることを基本に、広域的に多くの人々が町田を訪れ、多様な人や組織の活動が連携し、新たな交流が生まれ、活力ある地域社会が維持継承されていく都市としていきます。また町田が有する資源や特性を活かした産業機能を育て、市民が新たな文化を生み出していくといった持続的な「活力」を維持していく都市としていく。自由な活動・移動を支える都市活動連携軸の充実／分散的な都市活動拠点の育成（交通体系と連携した拠点の育成、中心市街地の第三期のまちづくりの展開、個性的な郊外新拠点の育成）／新たな就業機能創出の場の整備

「活力」を維持する都市のイメージ



図1-8

「生活」の舞台となる都市

自由な活動・移動を支える都市活動連携軸の充実／分散的な都市活動拠点の育成（交通体系と連携した拠点の育成、中心市街地の第三期のまちづくりの展開、個性的な郊外新拠点の育成）／新たな就業機能創出の場の整備
調和のとれた土地利用の誘導／安全で安心できる身近な生活空間の醸成／誰もが移動しやすい交通環境の整備／生活を支えるライフライン網の整備／高度情報・通信社会の生活を支える社会基盤整備

「生活」の舞台となる都市のイメージ

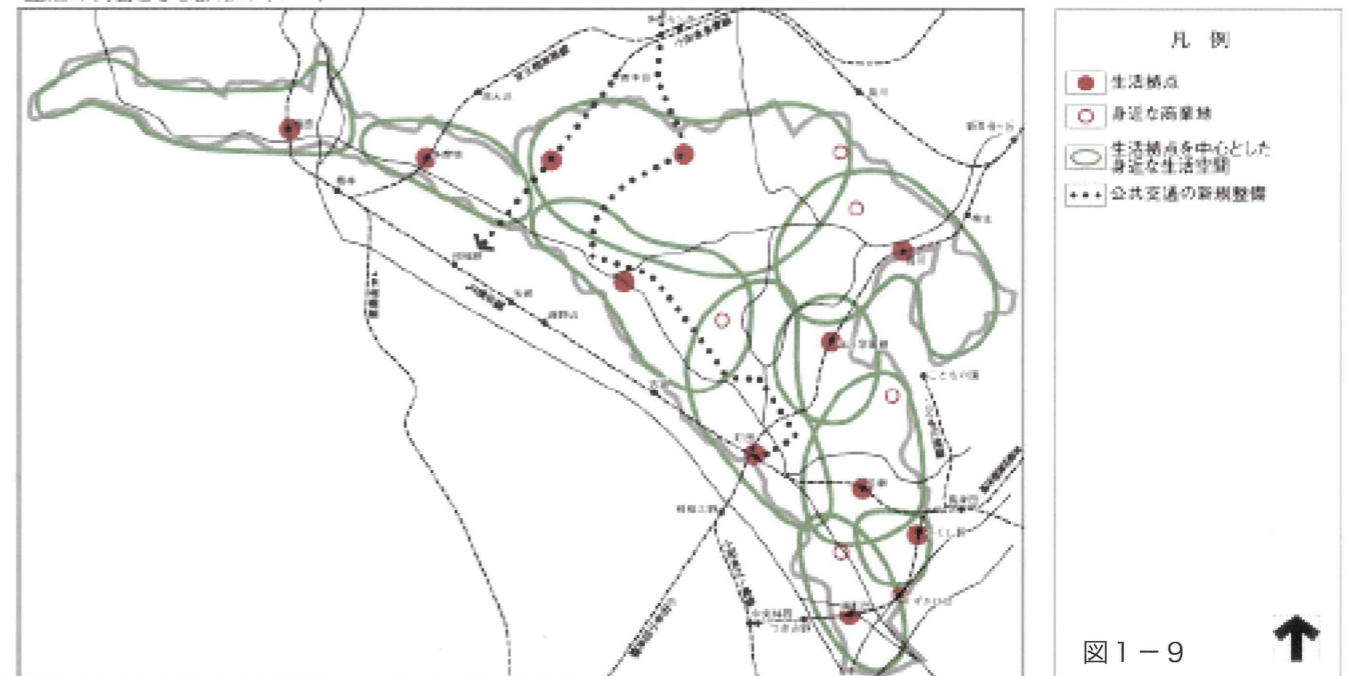


図1-9

将来の都市構造 「多摩丘陵の自然地形の上に展開する開放型の多核共生ネットワーク構造」

今後の都市づくりの構想をふまえ、3つの目標に沿った姿が織りなす町田の将来の都市の骨格的な空間構造のありよう。
●環境文化空間のつながりの形成町田の環境文化空間のつながり／環境文化育成の核となる拠点—環境文化育成拠点●多様な活動の拠点育成・整備広域的な交通・都市活動の拠点—都市核／地域資源を活かした新たな広域ゲート拠点—副次核／身近な交通・活動の拠点—生活核●活動や地域をつなぐ「軸」の形成主要な都市活動のつながり—都市活動連携軸／水を中心とする自然環境のつながり—河川環境軸／生活履歴とかかわる歴史・自然環境のつながり—歴史環境軸

将来の都市構造のイメージ



図1-10

土地利用の方針

(1) 基本的な方針

- ・日常生活の利便性に配慮して交通基盤の整備に対応した都市的土地利用の配置
- ・自然的地形を根底にして河川沿いや丘陵斜面などを中心に自然的土地利用の計画的な保全と配置

(2) 土地利用の配置方針

- 住宅系土地利用・形成経緯などを考慮して多様な地区の特性に応じて、緑との調和を図りつつ、都市の基盤に応じた適正な密度の利用による良好な住宅地の環境の保全・形成良好な住環境を保全する戸建て住宅主体の住宅地(低密度住宅地)／良好な住環境を形成・誘導する戸建て住宅主体の住宅地(低密度住宅地)／良好な環境を維持・確保する中高層住宅地(中高密度住宅地)／良好な環境を形成する一般住宅地(中密度住宅地)
- 商業・業務系土地利用—市民の日常生活の利便性に配慮し、各鉄道駅周辺を中心として配置—都市核・副次核・生活核などの拠点地区は、地区の広域的条件や都市基盤整備の状況に応じた合理的、適切な密度の利用を実現 商業業務地／生活利便性を支える商業地
- 工業(産業)系土地利用—産業構造の変化等を見据え、市内の産業機能の定着のために、産業振興施策との連携により、周辺環境との調和に配慮しながらその維持に努める
- ・環境と調和した新たな産業地整備 産業市街地／住宅・産業共存地
- 沿道市街地—交通量の状況や後背市街地への環境に配慮しながら沿道商業施設、サービス工業施設などが立地し良好なまち並みを有する市街地の形成の誘導
- 計画的な土地利用を誘導する市街地—広域的な交通基盤整備と一体となって住宅機能や商業、業務などの都市機能の計画的導入が進められている地区での計画的な土地利用の誘導による良好な市街地空間の形成
- 生態系に配慮して形成する計画的複合市街地—広域的な交通基盤整備と一体となって住宅機能や商業、業務などの都市機能の計画的導入が新たに進められる地区での低密度な土地利用と、既存生態系や自然環境の保全に配慮した新たな魅力を有するゆとりある市街地の形成
- 自然的土地利用—丘陵緑地、谷戸の農地などの自然的土地利用の保全 河川／樹林地・農地を中心とする地区
- 大規模な公園・施設—大規模な公園・地域制緑地／大学・研究所等／供給処理施設

土地利用の方針図

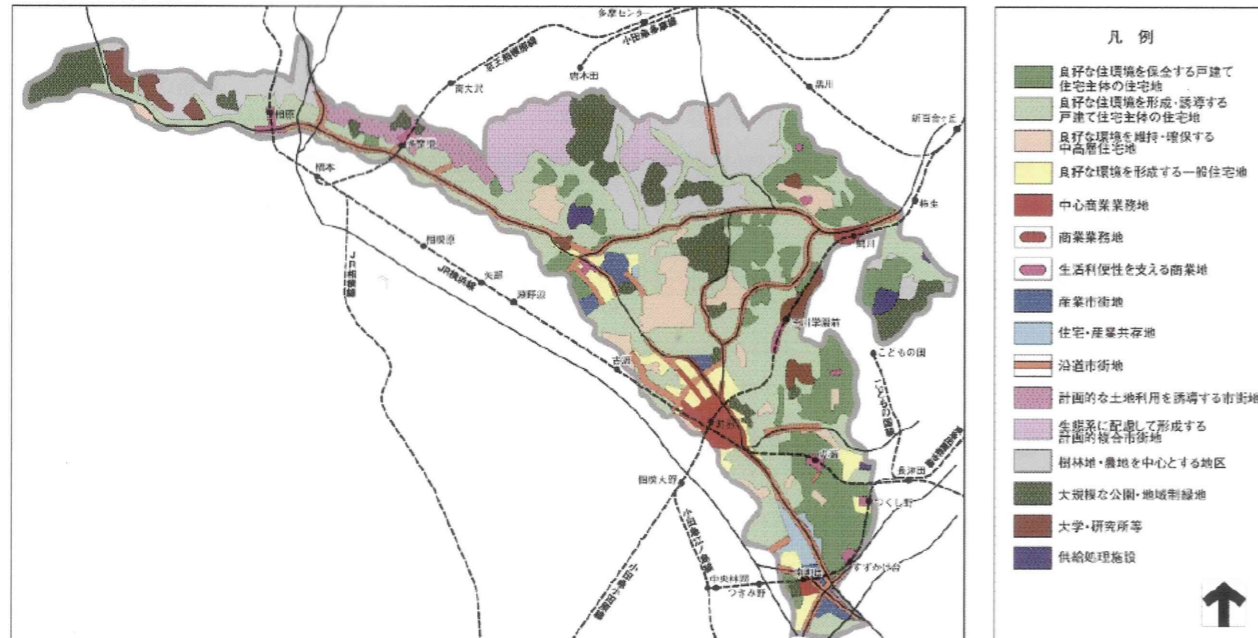


図1-11

交通体系の方針

(1) 基本的な方針

- ・高齢社会の進展や環境・エネルギー問題に配慮し自動車交通需要の抑制に貢献する交通政策を推進
- ・多様な公共交通を基軸にしためりはりのある交通体系の確立
- ・国、東京都をはじめとして相模原市、川崎市、横浜市などの隣接市町及び関係機関との連携による実現
- ・新たな鉄道網の整備や多様な公共交通手段の普及と連携して、公共交通利用のしやすさを向上
- ・幹線道路のネットワーク化と、すべての人が安心して通行できる「人にやさしい道づくり」を目指して、生活道路や橋りょう等の整備推進

(2) 公共交通の整備方針

- 総合的な交通需要マネジメント施策への取り組み—ソフト的な取り組みと一体となった総合的な交通需要を制御する施策の検討
- 軌道系交通網の強化—多摩都市モノレールの乗り入れ・導入空間の確保や、小田急多摩線の横浜線方面への延伸など
- 新規公共交通手段導入の検討—多様な公共交通システムや公共交通サービス導入
- 駅周辺の交通基盤整備—駅前交通広場の整備や、駐車場、自転車駐車場、歩道の整備や各鉄道駅のバリアフリー化
- バスなど多様な公共交通環境の充実—バスネットワークの充実、定時運行の確保のためにバスルートとなる幹線道路網の整備の促進—町田駅周辺、鶴川駅周辺のバスターミナルとしての機能強化—バスレーンやバスベイ(バス専用の停車空間)の設置、バス停周辺の魅力づくり

(3) 道路整備の方針

- 都市の骨格となる幹線道路網の形成と整備—広域的な自動車交通を担う、東名高速自動車道、さがみ縦貫道などの自動車専用道路や、国道16号線、国道246号線などの広域幹線道路と連携した幹線道路網の形成—幹線道路網を構築する都市計画道路の整備—自然環境との調和に配慮し、良好な沿道空間の確保や公害防止—主要な道路を中心に右折レーンの設置や交差点改良などの道路構造の適正化
- 中心市街地での円滑な交通環境の確保の対応—中心市街地周辺の道路網の整備、交通広場の整備、周辺地域での自動車駐車場の整備、交通情報の提供システムの検討、総合的な交通施策の取り組み—バス交通網の拠点としての機能を強化するために新規バスターミナルの整備の検討
- 住宅地の安全な交通の確保—都市計画道路を補完する準幹線道路の整備、日常生活を営む上で重要な生活道路の確保
- 安全で快適な歩行者空間の整備—幹線道路をはじめとして歩道と車道との分離の推進、歩道の段差解消—各駅周辺の快適な歩行者空間確保のための施策

交通体系の方針図

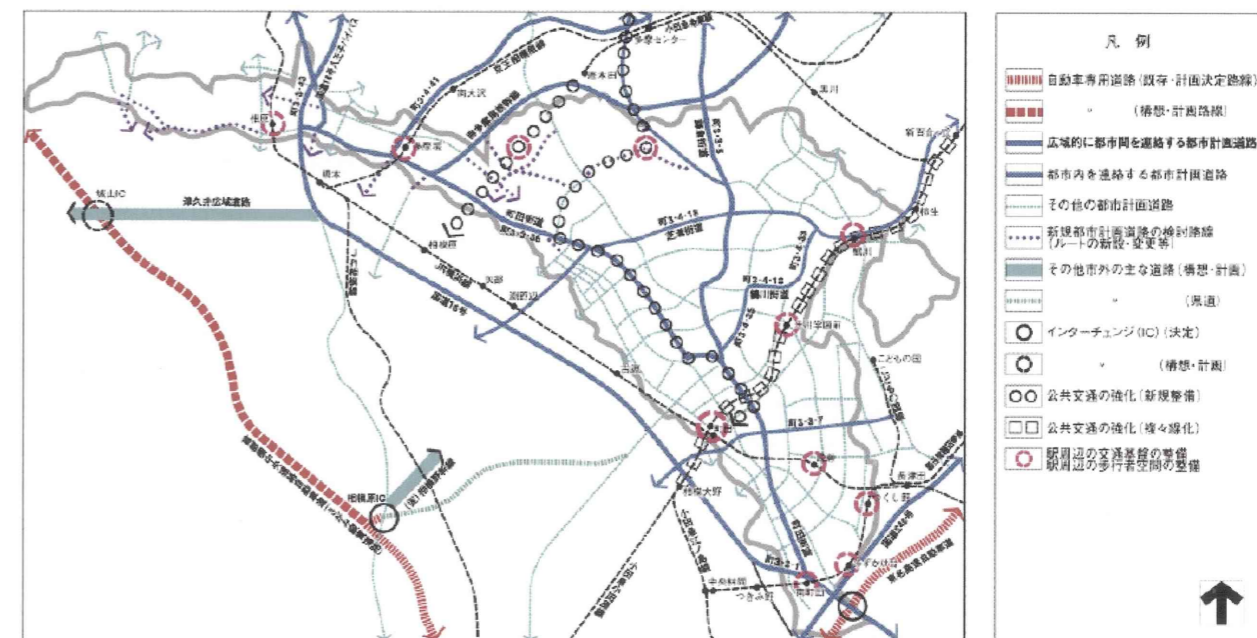


図1-12

都市施設の整備方針

(1) 基本的な方針

・今後の施設需要を適切に見据えながら、環境負荷を小さくし安全で快適な都市生活を支えるために、自然環境と調和する下水道の整備、河川の整備、ごみ処理施設の整備を進める

(2) 下水道施設整備の方針

- 下水道処理区域の拡大ー市街化区域全域の水洗化普及(21世紀初頭目標)、雨水管渠の整備、事業認可区域の計画的な拡大など
- 環境と調和する下水道関連施設の整備ー高度処理施設の整備、下水処理水の雑用水としての有効利用、下水汚泥の多角的な資源化、下水処理場上部の緑化と多目的利用など

(3) 河川整備の方針

●総合治水対策と一体となった河川整備ー鶴見川、恩田川、真光寺川、境川での1時間50ミリの降雨に対処できる河川の整備ー公共施設及び大規模民間施設：雨水流出抑制施設の設置、調整池の増設と流域の貯留浸透施設の充実や遊水機能の保全等による雨水流出抑制

●潤いのある水辺空間の整備ー防災・学習・レクリエーションなど多方面からの利用が可能なるおいのある水辺空間の整備ー旧河川敷の公園整備、湧水・源流の保全など

(4) その他の都市施設整備の方針

- ごみ処理施設ー「リサイクル文化都市」を実現する資源循環型の都市づくりを目指しつつ、脱焼却・脱埋め立てのごみ処理、安全性に配慮した環境保全型の高次な処理能力を有する次世代型処理施設の整備など
- 上水道施設ー水資源循環型・節水型の都市づくりを目指しつつ、ライフラインとなる主要な給水管・老朽化した給水管の耐震化、耐震性の貯水施設の充実 など
- エネルギー関連施設ー未利用エネルギーや、太陽光や風力などの自然エネルギーを有効利用する施設の整備
- コミュニティ関連施設ー文化、スポーツ・レクリエーション、福祉、教育などの多様なコミュニティ関連施設の充実
- 情報関連施設ー通信網確保のための導入空間となる道路や下水道の整備や共同溝の整備、公共施設における地域の情報拠点化の推進など

福祉のまちづくり方針

(1) 基本的な方針

・高齢者や障害者をはじめ、誰もが暮らしやすい都市としていくために、「車いすで生活できる都市」を目指すことを基本に、「福祉のまちづくり総合推進条例」に基づいた、都市空間や施設のバリアフリー化による「福祉のまちづくり」の推進

・「移動に困難を持つ人」の移動のし易さを十分に確保

(2) 個別施策の推進

●バリアフリー都市空間の整備
歩車道の分離／道路上の障害物の除去／視覚障害者用ブロックや見やすいサインの設置／公共施設でのエレベーターやスロープの設置 など

●福祉介護の場となる良質な住宅の整備
在宅介護の場となる住宅の段差の解消や手すり設置への支援／公的住宅の建て替えにおける高齢者、障害者向け住宅の整備 など

●誰でも利用しやすい施設整備
「福祉のまちづくり総合推進条例」に基づいた公共施設などの整備

●移動しやすい交通環境の確保
ミニバスサービスや低床バスなどの公共交通サービスの導入／駅周辺の歩きやすい環境の用意 など

●拠点福祉施設等の整備
高齢者介護施設や障害者自立生活支援事業施設、子ども家庭支援センターなどの拠点的な福祉施設等と既存公共施設の統廃合などとの連携 など

良好な自然環境保全・確保の方針（公園・緑地の整備方針）

(1) 基本的な方針

・適切な水循環が確保され、多様な生物が棲み、既存の生態系が維持されるような良好な自然のシステムの存在を根底にした都市空間の形成ー「緑の基本計画」に基づいた、貴重な自然生態系の保全と回復、多様な役割を担う緑地を活かした公園や地域制の緑地としての整備

(2) 公園・緑地の整備方針

・広域的な公園・緑地のネットワーク形成、自然環境の保全、災害防止、レクリエーション需要への対応、景観形成などの観点から、その中心となる都市公園や地域制緑地の整備ー総合的な緑化による緑豊かな空間の形成

●「町田の杜もり」の核となる広域的な公園・緑地の整備ー「町田の杜」を形成する上で核となる大規模で広域的な都市公園の整備や地域制緑地の指定 など

●多様な公園・緑地・オープンスペースの整備ー都市計画公園や都市計画緑地、風致地区、緑地保全の森制度の活用 など

●利用しやすい公園・緑地の整備ー地域資源を活用し周辺環境と調和した施設デザインー市民参加や協力を得ながらの整備や管理

●拠点的な緑をつなぐ歩行者ネットワークの形成ー尾根の路、尾根緑道等を軸に、河川沿いや並木などをつなぐ歩行者ネットワークの形成 など

●農地の保全と活用ー農業振興策との連携による農地の保全 など

●総合的な都市緑化の推進ー市民の参加による総合的な都市緑化 など

(3) 良好な自然環境保全・回復の方針ー水系や生態系の維持上、重要な緑地の保護、保全による、良好な自然環境を有する都市空間の形成

●水系と生態系の維持・継承ー源流域を中心とした樹林地や谷戸の保全 など

●市民参加による良好な河川環境の維持(河川環境軸の形成)ー河川の水質保全、河川沿いの樹林地や農地の保全、公園や遊歩道整備などとの一体的な整備 など

●自然的な水循環の維持ー浸透性舗装、雨水利用促進を図る施設整備 など

●開発行為の誘導による自然環境の確保ー既存の水系や生態系に配慮した開発や緑地保全のあり方についての検討 など

防災まちづくりの方針

(1) 基本的な方針

・災害時に市街地や集落の孤立を回避するような基幹的ライフライン、交通網の確保

・非常時に一定期間の自立的生活が可能であること

・自立的復旧を支える地域コミュニティの形成

・「地域防災計画」と連携しながら安全な都市の形成

(2) 個別施策の推進

●機能の分散化とライフラインの確保ー行政・情報などの中枢機能の複数化・分散化／ミニ共同溝などの整備／耐震性飲料用貯水槽などの設置など

●市街地の防災性の向上
広幅員道路整備や沿道緑化、公園・緑地等整備による市街地の防災性の向上／中心市街地の防災性の向上 など

●災害時の安全性の確保

狭あい道路の拡幅や行き止まり道路の解消／啓開道路に指定される幹線道路や橋梁の整備／沿道の不燃化 など

●防災関連施設の整備ー成瀬地区の消防署出張所設置／小・中学校の救急救護活動拠点等の整備 など

●浸水対策の推進ー河川整備による流量確保／自然的土地利用の保全による保水機能の維持 など

●防災を支える地域コミュニティの維持やネットワークづくりー自主防災組織の育成／自主的な防災体制の確立など

●拠点地区での安全対策の推進ー地震や火災に強い建物づくり／落下物となる看板等の規制／情報拠点づくり など

町田市の歴史を地図から読む

明治の町田

境川は国境の川

境川①が西から南に蛇が動くように曲がりながら流れている。

あまり幅の広くない平地の中を少しでも低い所へ流れている様子が見える。この川は今でこそ川底を深くしたり、護岸堤防を造って川が氾濫しないようにしたが、明治時代の初期には森野村の南で川幅は、2～5メートル、深さは1.8～2.4メートルくらいのものであった。――の国界が記入されていて、武蔵国と相模国の境だった。いまは、境川は東京都と神奈川県の間になっている。

農村の町、原町田村

北西の方向から南東の方向に目立って幅の広い道が通っている②。これが明治時代の町田街道である。八王子と横浜を結ぶ重要な道で、原町田村が、町田街道に沿って家が集まっている様子が見える。こういう村の形を街村という。ここには宿屋・生糸や綿の仲売の店・米屋・魚屋・小間物屋などが軒を並べ、村といっても小さな町を形作っていた。ここに町屋が発達したのは道路が重要な役割を果たし、付近の村々からの道がすべて原町田村へ合流していることがわかる。

つまり原町田は交通の上で大切な位置にあったといえる。

町田っ原は畑

町田街道が北西方向から原町田村を通過するまでの道の北側を町田っ原と呼んでいた。大部分の白いところは畑で、四角い点線は畑ではない。その中の所々にUの記号があるが、これは雑木林で昔はこの土地がすべて森だったことを物語る。

また原町田村の北側にYYの記号があり、現在の原町田2・3・4・5丁目は桑畑だったことがわかる。

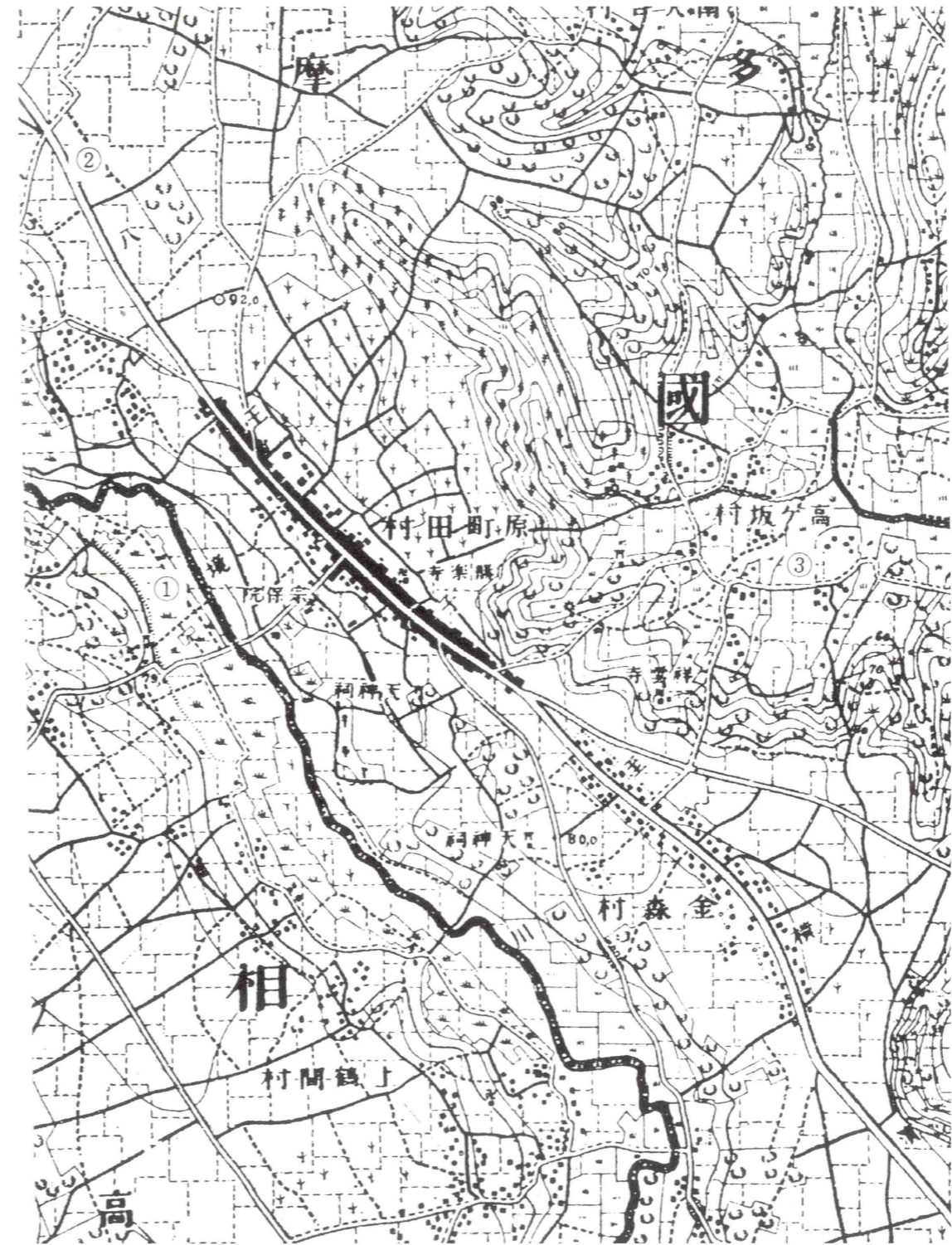


図2-1 明治14年測量 1:15000

養蚕業と横浜鉄道

日本の農家では昔から米・麦・野菜などを栽培する自給自足の生活が普通だった。しかし明治時代に日本の資本主義が発達し始めると、水田の少ない地方の農家では、こぞって畑に桑を栽培し、蚕を飼って生糸の原料となるまゆを取る養蚕業を兼業にして、現金の収入を考えるようになった。町田村でも当然その考えは伝わってきて、町田っ原といわれた原町田村の大地のほとんどが桑畑になった。農家が養蚕業に励んだ様子が地形図の上からも理解できる。

横浜鉄道線が開通

横浜鉄道線、つまり現在の国鉄横浜線の開通は明治41年9月23日なので、この地形図はいかにも開通を見通して発行されたように思われます。もちろんこの鉄道は明治39年6月から、神奈川・八王子・田奈村の工事に始まり、明治41年9月に竣工したので、地形図の測量年度には線路の基礎はおよそ考えられる。

横浜鉄道線は八王子と東神奈川間42.5kmの私鉄鉄道で、別名八浜線とも言われた。横浜鉄道線は、桑畑のひろがる大地を削ってる。それは次に会う町田街道との関係だろうと私は思う。町田街道は横浜と八王子を結ぶ軍用道路としての役割もあったのではないだろうか。当時の人々は煙を出す蒸気機関車が町の付近を通ることについて、火の粉を撒き散らして走るから危険だといって、鉄道を町から遠ざける考えもあった。この鉄道で原町田の人々は横浜方面へ出る方が八王子へ行くよりも多く、貨物は横浜方面から肥料・砂糖・食塩が、原町田からは薪炭・生糸・農産物が出荷された。原町田は農村の中心地だったのある。

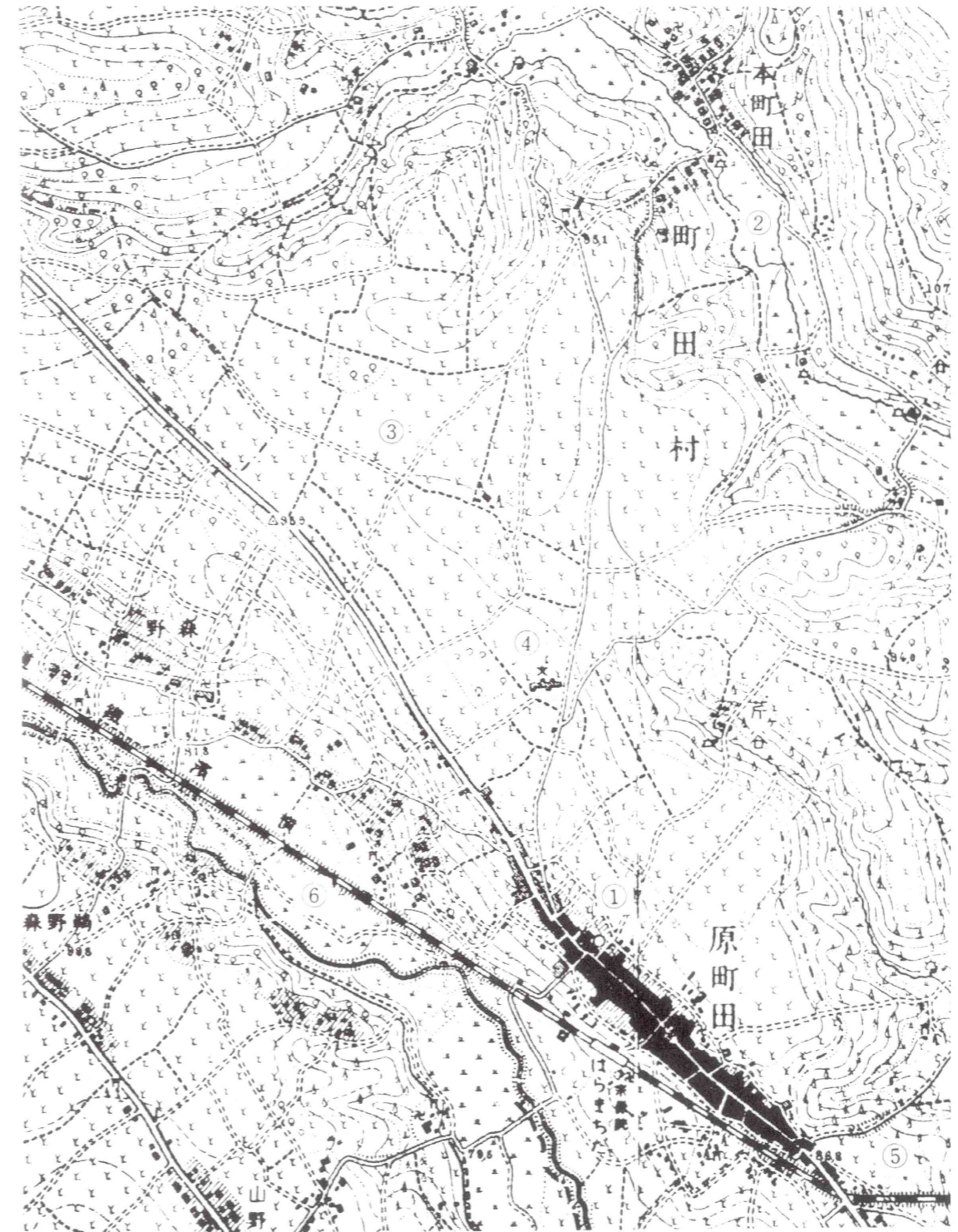


図2-2 明治39年測量 1:15000

町田の地形

大正2年10月1日、町田村は町田町になった。大正9年の町田村は世帯数1007戸・人口4890人で、まだ人口の少ない町だった。現在のような開発は行われていなく、本当の町田の地形が見て取れる。

町田っ原はカマボコ型

この地図の北側の等高線が複雑に書かれている箇所は多摩丘陵の一部で、高いところでは120m近くの山となっている。その麓に、丘陵に降った雨が土地を削って小さな谷となり、それがまとまって一本の川となったのが、本町田の付近を流れる恩田川①である。恩田川の流域は水田地帯となっているから、水田の記号があるところを目で追ってみると恩田川の川筋がどこから集まってくるかがわかる。

町田っ原は、もともと現在の相模原から藤沢方面にまで続く相模原台地の北のはしの一部だった。そこへ西のほうから境川が流れ込み、荒れた川なので、相模原台地を寝食してそこに谷を造った。相模原の③の付近では約15メートル近くの谷となっている。それに比べると森野の方はずいぶん傾斜になっている。それは、現在もバスで通って見てわかる。

以上のように町田っ原は、二つの川に挟まれた細長く変形したカマボコ型の地形であり、町田っ原に畑を持つ農家の人々は水不足に伴う日照りで、畑作物が枯れるという心配事のたえない生活が長く続いた。

谷戸が多い

町田を歩くと谷戸のついた地名が多いことに気づく。例えば、成瀬の奈良谷戸・鶴川の能ヶ谷・真光寺の入谷戸・下小山田の堂ヶ谷・上小山田の田中谷戸・相原の権現谷戸など様々である。では、町田の谷戸とはどういう場所なのか説明する。多摩丘陵に降った雨が、丘陵を浸食して浅い谷を造り、谷底は周りの土地より低地で谷の上の方や谷の壁から地下水が湧き出て、谷の下の方が湿田になる。道は地盤の弱い谷の中央は決して通らないで、壁に沿ってつけられ、住居は道よりさらに高く、日当たりのよい南斜面に造られた。現在の谷戸は道路も完備したので、その面影はない。

町田に坂道が多いのは、地形がカマボコ型をしていることと、谷戸が多いからである。今は、自動車で通過するが、昔の人々は大変苦労したと考えられる。

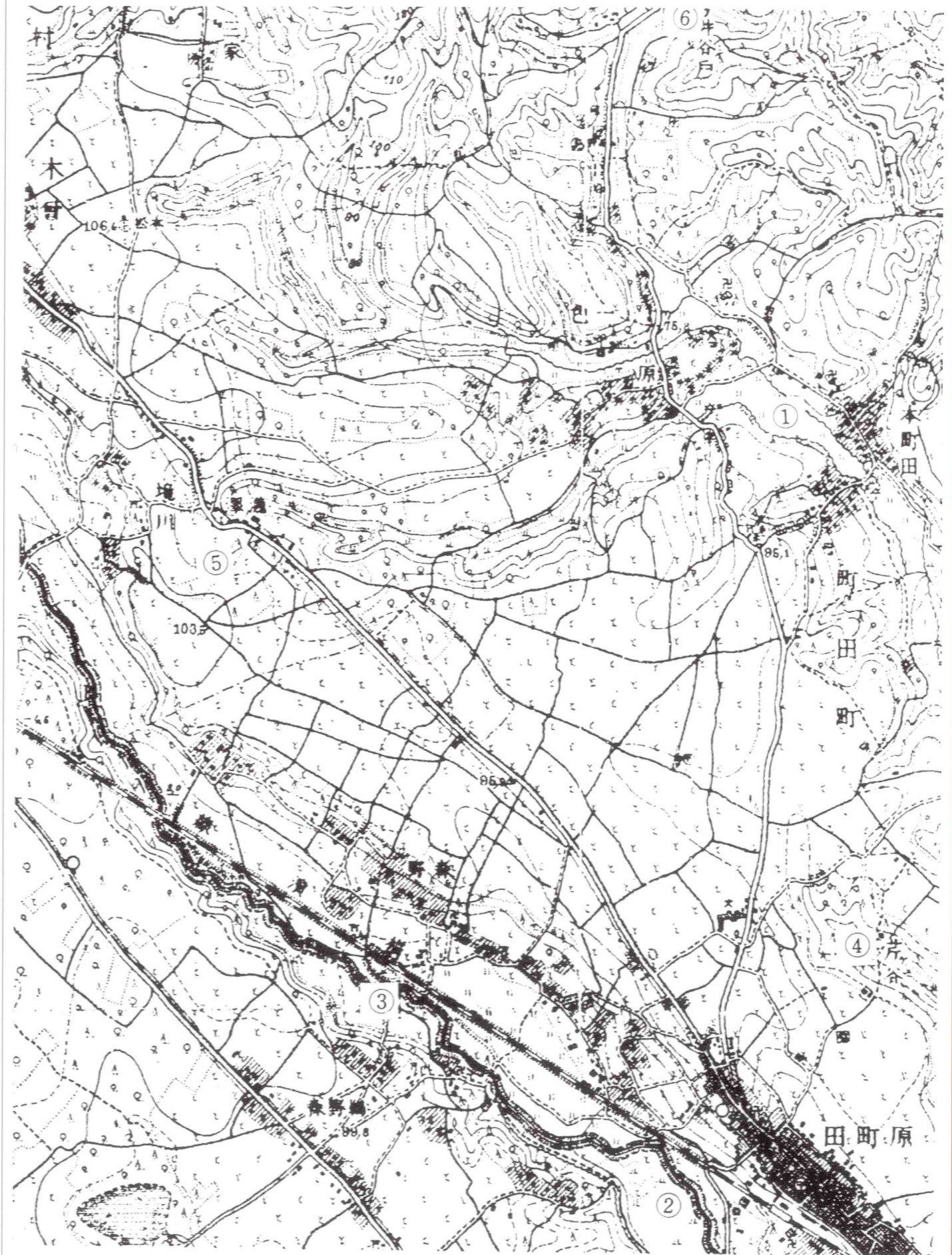


図2-3 大正10年測量 1:15000

小田急線が通る

原町田から鶴川村へ

この頃、町田の人々は東京へどのようにして出ていたのだろうか。はらまちだ駅で横浜線①に乗って東神奈川へ行き、東海道線を利用する方法か、または歩いて鶴川村へ出て、今の世田谷通りを北上して、多摩川を渡って東京へ出る三つの方法しかなかったようである。

小田急線は谷戸を走る

この頃の地形図は大正10年式の記号で、国鉄も私鉄も同じ鉄道記号である。大正14年に起工し新宿から小田原の間の約5キロメートルを全線一挙に複線で完成したのである。鉄道を鶴川方面から見ていくと、路線の両側の等高線が密集して路線に迫っていることがわかるでしょう。そして実際に小田急に乗ってここを通るとき谷底を走っているのがわかるでしょう。これが北側の谷戸である。⑥が境塚トンネルでこの上に玉川大学の農学部がある。そこに104.3メートルの記号があるが、ここには二等三角点の標石が埋められているが、この付近ではこの付近では一番高い展望のきく山頂である。またこの数字に重なって県境の記号があり、東京都と神奈川県の間がここを通過していたことから境塚山といわれていました。このトンネルの両側に切り通しがあり、路線を平らに走らせるためだということはいうまでもないが、ここが谷戸の頂上になっている。トンネルの南側にも路線に沿って水田がある。ここは恩田川に流れこむ小さな谷戸の一つで、小田急線が多摩丘陵を横切るのに谷戸を利用していることがわかる。そこには古くから歩く道もあった。

南大谷まで谷の中をほぼ一直線に南下してきて、大谷原で急に路線が西の方の大地を切り通してカーブしている。小田急線の当初の計画では国鉄しんはらまちだ駅近くを通す予定だったが、商店街の反対と土地買収が困難となり、カマボコ型の大地を約2キロメートルほど切り通して、原町田のはづれにしんはらまちだ駅が設けられた。

駅は場末にできたが、町田の人々が東京へ出るのには大変便利になった。



図2-4 昭和5年測量 1:15000

碁盤目状の町並み

原町田のこい黒い部分は商店街の密集した有様を示している。それは横浜線の沿線近くまで幅が広がり、さらに商店街は、小田急線のしんはらまちだ駅の西へ200メートルほど進出した。そして商店街の北側では芹が谷までの大地には住宅地が、また小田急線の西側にも住宅地が、さらに工場が戦時中に設けられた。

この地形図で最も目をひくのは何だろうか。第三図と比較してみると、一面にあった桑畑であったカマボコ型地形の町田っ原に整然とした碁盤目状の道ができたことがわかる。当初から住宅地の分譲用に造られたものではなく、耕地整理をしたあとの農道である。耕地整理を始めたのは昭和11年の12月からである。町田第一耕地整理組合がつくれ、事業は東京府・農業土木技術員のもとで実施された。なぜ耕地整理を必要としたのだろうか。

第三図は大正10年の測量で、この頃は生糸がアメリカ市場で大変よく売れて、日本の養蚕業の全盛期であった。しかし昭和4年10月アメリカが経済恐慌となり、それがもとで日本の生糸の値段が大暴落したのである。そして日本の養蚕農家はまゆが売れないという大打撃を受けたのである。町田の養蚕農家への影響ももちろんあった。農家の生活が困難になり、農家の子供は工場等へ出稼ぎに行って家庭の経済を助けていたから、農地の耕作は自然に放棄して草をはやし、手のつけられない状況になった。そこで時の町田町長大塚佐平氏の名で、昭和11年組合員380名が耕地整理組合を結成して以来、15年目の昭和26年に耕地整理が完成した。

整備された耕地は、②付近（現旭町1丁目）の一つの区画を見ると北東から南西の方向が長く北西から南東の方向が短い面積約79.5アールの短径で完成した。そして各耕地の間にある点線の道路は約5.5メートルの幅である。この耕地整理の形は昭和16年にほぼ終わり、農家の人々は戦争中の人手不足の中で食料増産に励み、そして戦後の混乱を経て昭和26年に耕地整理組合はすべての事業を完成し解散した。この時の耕地整理が、後の町田市都市計画の第一歩を印したと言えるだろう。



図2-5 昭和32年測量 1:15000

小型団地の進出

町田は京浜のベッドタウン

町田が市になったのは昭和33年2月1日である。町田町・鶴川村、忠生村・境村が合併し、世帯数12506戸・人口60190人だった。第六図からは空中写真を利用して、より正確な測量が始まり、記号は昭和40年式の一層あっさりしたものに改まった。印刷も三色刷りになり、昭和30年式の二色に等高線と国道、そして切り通しと盛土の部分が茶色になった。

昭和30年代の日本の経済は、大都市の会社や工場が飛躍的に発展成長をしたために、農村の人々が続々と都会に働きに出、大都市は人口急増となり、農村人口は激減した。東京都では区部の人口が急激に膨張し始めた昭和32年6月に首都圏整備法が施行されて、町田市もその適応を受けることとなった。

町田からは小田急線を利用すれば約40分で副都心新宿へ、横浜線では約30分で京浜工業地帯の中心横浜へいける交通便利な場所で、また住宅地としても自然の環境が良く、快適に生活できるなどの条件から、今までの近郊農村地帯の町から団地都市に変わるようになった。つまりは、はっきり住宅都市になったのである。

農地と山林が住宅地に

第六図を第五図を比較してみると、かつて整然と耕地整理をした町田っ原の農地の中に、小さな黒い粒が記入されている。これが家である。この家がこのように大体並んでいるということを示しているのだから、その数は必ずしも等しくはありませんから注意する必要があります。原町田・森野・中町・旭町などには丁目が記入されるようになった。丁目がつけられるということは、その地域の人口が増え、当然家の数も増えるために細かく町を区分しないと不便だからである。この図の中で昭和32～33年の早い時期に造られた都営の団地は森野5丁目①にある。ここは元の桑畑のあとである。中町4丁目②は耕地整理のすんだ畑でもとの農地が住宅となった。そのため現在では現在では道路として狭いのはやむをえない。それで車の一方通行がやたらと多いのである。森野4丁目③のそれは昭和24～25年に森が丘の団地④は東京都住宅供給公社が昭和39年に完成した。

一方山林の開発も盛んに行われた。玉園台⑤はその良い例である。今も所々に背の高い、太い赤松が残っているが、ほとんどは切り倒されてしまった。ここは多摩丘陵の小さな屋根の一部が通っていたが、それが道路に変わり、山の斜面に家が建てられた。町田の緑が少なくなるきざしが昭和30年代の後半から始まったのである。

これらのこれらの小型団地は小田急線しんはらまちだ駅からは、約1キロメートル前後の距離にあるが、人口が増えても近くに病院や商店が少なく、また駅までのバスの本数も少なく、どこの団地でもずいぶん不便が続き、不満だらけの生活だった。

道路の変化

旧来の町田街道は狭く、自動車の渋滞が激しくなった。そこでもとの農道と耕地をつぶして道幅5間の道路をつくって町の外側を通行できるバイパスが完成した。これが旭町3丁目⑦から弓型につけられた町田市第一中学・町田市役所前を通り、東南の原町田2丁目を経て旧町田街道へ結ばれる道路である。市民球場のできたのもその頃のことである。

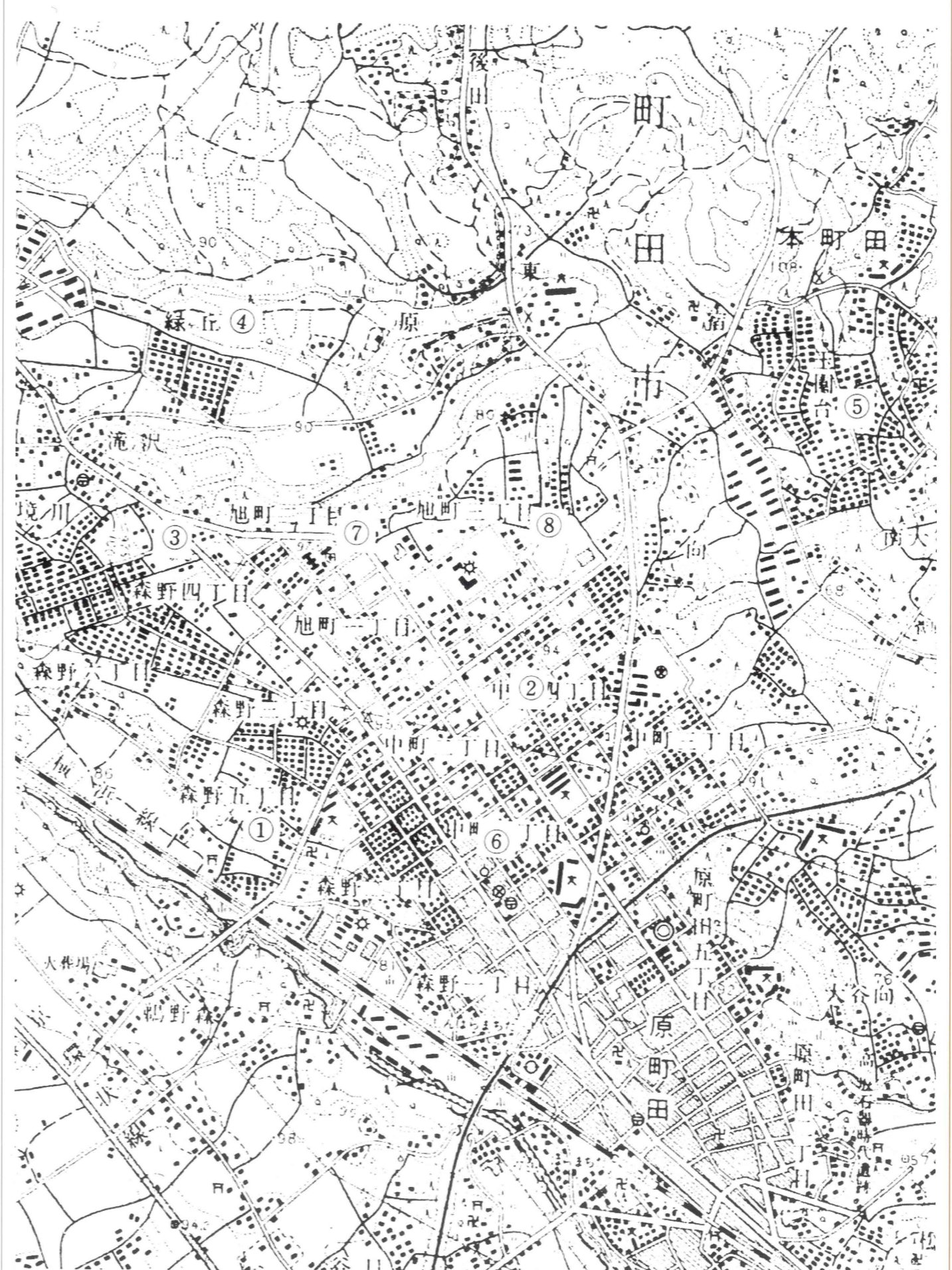


図2-6 昭和42年測量 1:15000

成瀬台の開発

空地地帯は造成中の土地

ぽっかりとあいた無人の空地地帯がある。荒地の記号①がところどころにあり、ここがのちの成瀬台の住宅地となった場所である。

第7図は昭和47年の地形図で、成瀬台の造成は昭和45年に始まった。それは、この土地を持っていた地主の集まり—成瀬土地区画整理組合の手で行われた。

ここはもともとどんな土地だったのだろうか。十分ではないが、第4図の右下（東南の隅）の部分が参考になる。

もとの地形の推理

第七図・恩田川②が西から東へ流れている。この付近の恩田川沿岸は町田の中で幅の広い沖積平地で、古くからの水田地帯だった。川の護岸工事も十分に行われコンクリートブロックで覆われていることがわかる。恩田川の北を、川に平行して通る道が、原町田一丁目で町田街道から分かれた成瀬街道である。ほぼ中央に成瀬の文字があり、この東側に奈良谷戸があり、その寺の記号が東雲寺であり、西の中村にはもとの南第三小学校がある。奈良谷戸は地名でもわかる通り、北へ向かう細い道は、かつて谷戸の壁に沿ってつくられた道である。この谷戸は北の方が高くなっている。

一方、もとの南第二小学校の東側には恩田川低地に接続する水田地帯があり、これは北の観音堂⑤、さらに北の三ツ又の西側に地図にも残る水田地帯からの続きの水田と考えられている。三ツ又であるから、この東側にも谷があって、そこにも水田地帯があったことが推測できる。

このように奈良谷戸と中村の谷戸があることは、その挟まれた空白地帯はもともと山であったことが考えられる。空白地帯の最南端を東西に通る送電線の南側に丘陵の一部が残っていることがわかる。では、どの位の高さの山だったのだろうか。多摩丘陵が西が高く、東に行くにしたがって低くなっている。第4図で見る80～85メートルの高さの尾根が北から南へ通っていたように考えられる。

送電線の鉄塔が証人

ここに山の高さを表す証人がいる。空白地帯の東側を南北に貫く送電線がある。そこに三つの印⑥があり、これは鉄塔をコンクリートでかためた記号である。なぜここに鉄塔を表しているかという、鉄塔をはずしてまで丘陵の造成をしなかったからである。鉄塔の脚が崩れないためにかためてあり、つまり鉄塔の立っている所がもとの山の表面の一部である。今も成瀬台3丁目にそれが残っていて、付近の家よりもかなり高いところに鉄塔の脚部分がある。成瀬台は標高70メートルの大地で、丘陵を削り取り、残土を谷戸の窪地へ埋めて、平坦な土地を造ったといえるだろう。

この図はちょうど造成中のものでブルザードが唸りをあげている時のものであり、この丘陵にはナチヤクヌギなどの雑木が一面に覆い、質の良い炭を焼く小屋が点在していたといわれている。

ついでにこの空白地帯の北側に半円型の放射状に近い道路がある。これは横浜市緑区の奈良北団地である。



図2-7 昭和47年測量 1:15000

開発はさらに進む

大型団地の進出

原町田二万五千分の一地形図の最新版は、昭和52年1月発行のものである。第8図はそれへ、北側に隣接する「武蔵府中」の同年版を張り合わせている。

東京や横浜・川崎など大都会の人口増加はますます激しく、前にのべたように町田は住宅地の供給地としてそれに応じなければならなかった。昭和40年頃から10年間の間に、境川住宅・木曾住宅・町田山崎団地や薬師台団地など、東京都住宅供給公社や日本住宅公団が、首都圏はもとより、全国でも大きいほうに属する大型団地を、時代の要請で完成させた。

これらの団地は小田急線まちだ駅から直線で、直線で3キロメートル前後の距離となっている。第6図では団地建設前の様子がわかるので参考にすると良い。特に図の北西を通る送電線の位置が町田山崎団地の位置と一致する。

町田山崎団地は風致地区七国山①の南西斜面を削り取り、町田木曾住宅はかつての木曾団地が恩田川の浸食からまぬがれた、半島状の台地面を利用して造られた。境川住宅は境川に南面する緩やかな斜面の桑畑と低地の水田地帯が造成されて建設されたものである。藤の台団地はまったくの丘陵を利用し、それはおよそ100メートルの標高をさしている。

団地を見てみると黒色の太めの線や折れた線が並んでいる。しかしその長さは同じではなく、これが中高層の各棟である。

これもすべての棟は描かれていない。なので、大体こうなっているという目安である。

さらに、団地の中には不規則な形をした道路が通っている。これも主な道路が記載されているだけで、細かい道は省略されている。

古い村は必ず寺や神社を中心に家が集まるのが普通だが、団地ではそれがなく、郵便局が目をつく。そして、郵便局がある場所が割合に低いところで、その付近には病院や商店が集まり、バス停もある。また給水棟②もあり、学校は団地の周りにある。さらに共通していることに、所々に多角形の空地③がある。これは突然の豪雨で洪水などが起きないための貯水池で、実際の地形図には水色で印刷されているのですぐにわかる。これのあるところは当然低い所で、もとの谷戸を利用している。

多摩丘陵に学校が

鶴見川が西から流れている。これに平行して走る道が芝溝街道で、東京の芝と神奈川県の上溝を結んでいる。しかし、この街道の名前を知る人も今では少なくなっているようだ。

この北側の山に町田市が最も大切にしている多摩丘陵の緑地帯がある。そのため住宅地などの造成は厳しく制限されている。緑濃い静かな自然環境を学校と病院が建てられた。

昭和55年には、町田市の人口は29万人を超え、30万人が目前の都市に発展した。



図2-8 昭和52年測量 1:15000

未来に残すもの

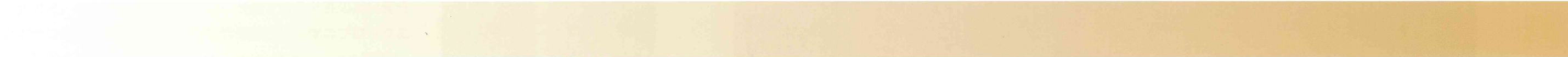
過去から現在へ、現在から未来へ
時間は中断なく続いていく
積み重ねられた時間を私たちは歴史と呼ぶ

私たちが歴史と呼ぶ時代は、その時代の人々には、
現在であったように、私たちが生きている現在も
必ず過去になり歴史になる。歴史は決して特別の
出来事だけをいうのではなく、世界や日本から、
私たちひとりひとりまでの日々の積み重ねのすべ
てが歴史なのである。

この章は、その中から「町田」という地域の歴史をたどっ
てみた。私たちは決して一人では人間として生きられない。
その時、その時を生きていた人々の残したものを養分とし
て、現在の私たちがあるのである。

この章を通して、先人が残してくれたものを見つめなおし、
私たちが未来に残すべきものを創り出す手がかりにしたい。

事例から考える複合の可能性



事例研究 1

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 図書館

建築と美術と都市空間が一体となって作り出す景観が新しい丸亀駅前を特徴付けるものとなり、さらに意匠統一によって整えられた環境が市の将来を示すものとなることを、美術館の設計に意図した、設計は猪熊氏と谷口氏との対話を基にして進められ、そして丸亀市の全面的な協力によって支えられた。

美術と建築との共同設計ともいえるこの方針は、展示作品と展示空間との関係に始まり、設置を予定された立体造形作品と建築の公共空間との関係、家具・備品類の選択からサインデザインにまで及んだ。

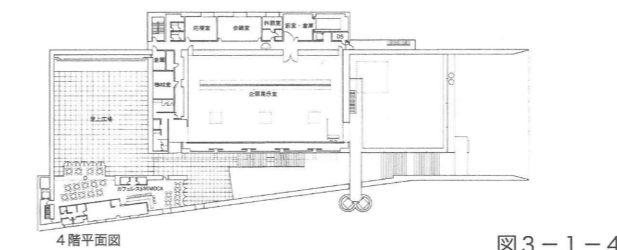
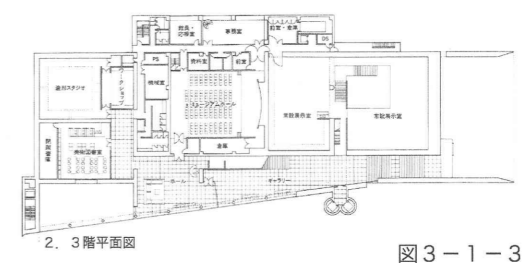
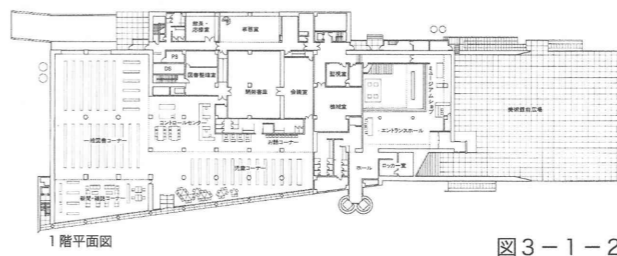
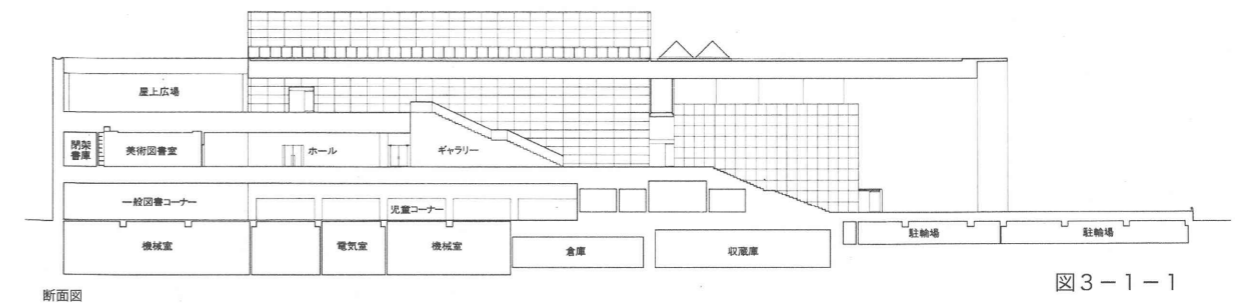
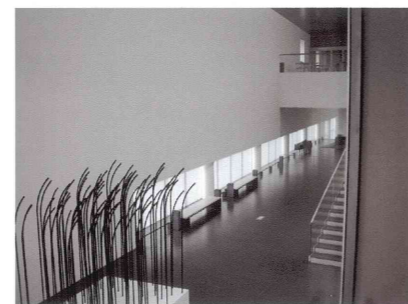
建築は、美術館と併設された市の図書館などの全施設が入り前面に向かって開く外殻と、美術館の展示部門が入る内側の直方体とから構成されている。そのほか、ミュージアムホール、美術図書館、造形スタジオ、レストランなど美術館に付随する公共性の高い部分をこのふたつの間に位置し、また事務管理部門は北側のブロックに集約して配置されている。美術館の正面には、猪熊氏による壁画と、壁画と一体になった展示室への入り口、そして市民の利用度の高い付帯施設

へ人々を導く大階段とがある。壁画は幅21m、高さ12であり、美術館の内容を象徴的に表すことと、美術館がある駅前広場を構成する要素としてふさわしいものとするのが意図されている。制作に当たっては、描かれた原画が原寸大に伸ばされ、さらに猪熊氏自身によって手が加えられつくられた。

空間の構成は、可能な限りスケール、プロポーション、光、質感など、いわば建築の根源的要素の操作のみによるものになっている。展示空間は、常設展示においては猪熊氏の作品との関係、企画展示室においては多様な現代芸術の作品との関係を考慮して、空間のスケールや光を調整し、背景としてふさわしい材料や色彩を選択している。

大階段を含む公共建築は、都市が建築に介入する部分である。したがって美術館に面する広場の壁画と門構えの構成、立ち上がる2本のエレベータシャフト、空中を飛ぶガラスのブリッジ、上昇するにつれて変化する階段、時間の変化を透過さすスカイライト、切り取った空に向け開く屋上広場など、これらのすべての要素は建築のスケールを超えた都市のスケールのものとなっている。

設計 建築 谷口建築設計事務所
構造 木村俊彦構造設計研究所
設備 環境エンジニアリング
施工 鹿島建設四国支店
敷地面積 5974.53㎡
建築面積 3564.80㎡
延床面積 11413.95㎡
階数 地下1階 地上4階 塔屋1階
構造 鉄骨鉄筋コンクリート造



事例研究 2

鬼石多目的ホール

人口7000人ほどの町に建つ体育館と200人程度の多目的ホールの複合施設である。敷地は町の中心で旧中学校の跡地である。2003年のコンペティションから始まった計画であった。

建物は完全な分棟で、スポーツ主体のホール一棟と、文化多目的主体のホール2棟、そして管理棟3つからなる。ワークショップを進めるうちに、簡単に管理できることと死角のない建物であることが重要になった。天井高の必要な体育館と多目的ホールを判地下とし、付随する観覧スペース、エントランス、ホワイエを地上レベルに設けている。メインのプログラムを半地下としたことで、建物の高さを低くでき、地上レベルの遮蔽物をほとんどなくすることができた。地上部分のすべての外壁は曲面と平面ガラスである。

両ホールの大スパン部は川口衛氏による地元産のスギと鉄のハイブリット梁構造で、実験を積み重ねることにより幅60cm、スパン20mの集成材梁が実現された。

3棟はそれぞれ独立しているが、近くに寄り集まるように配置し、ひとつのまとまった施設として使われることも意図している。さらにそのことが自然に感じられるように各棟がいくつかのルールを共有しあっている。柱やガラス目地を同じグリッド上に配置し、それぞれが向かい合う壁も平行にしている。開口部も互いに向かい合う位置に設け、棟から棟へ気軽に移動できるようになっている。一方、周囲に対してガラス壁は不定形なカーブを描き、建物と敷地がハードに分節されないようになっている。大きな開口部をたくさん設けたことで、人々は中と外を自由に行き来することができる。

どこからでも敷地全体が見渡せる透明さと、多様な動線、不定形な曲線ボリュームの分棟配置により、建物を含めて敷地全体でひとつの「広場」と呼べるような場が生まれることを期待しているようだ。

オープン後に敷地と建物がすべて開放され、ホールの利用者だけでなく、散歩途中の人や下校する子供たちが、春の風の中遊んだり休憩したりしている。

設計 建築 妹島和世建築設計事務所
 構造 川口衛構造設計事務所
 設備 システムデザイン研究所
 施工 大林組
 敷地面積 8849.95㎡
 建築面積 2020.12㎡
 延床面積 2276.49㎡
 階数 地下1階 地上1階
 構造 木造 鉄骨造 鉄骨鉄筋コンクリート造

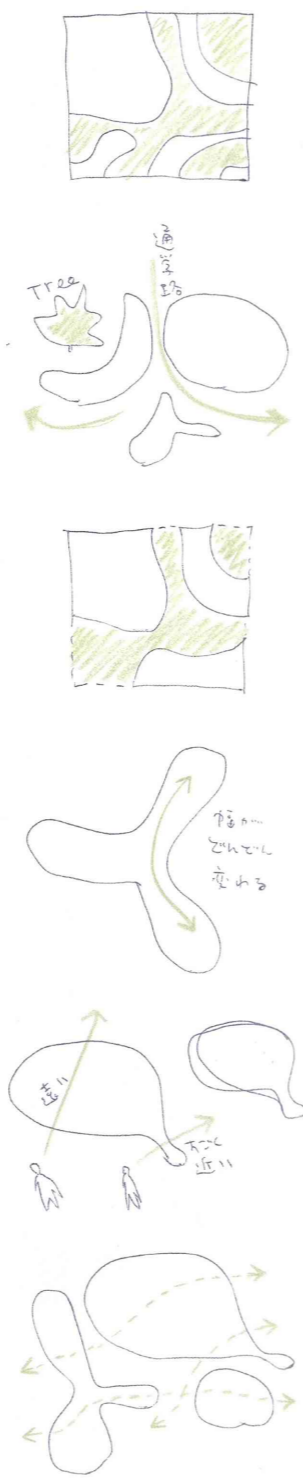


図3-2-1 コンセプト図

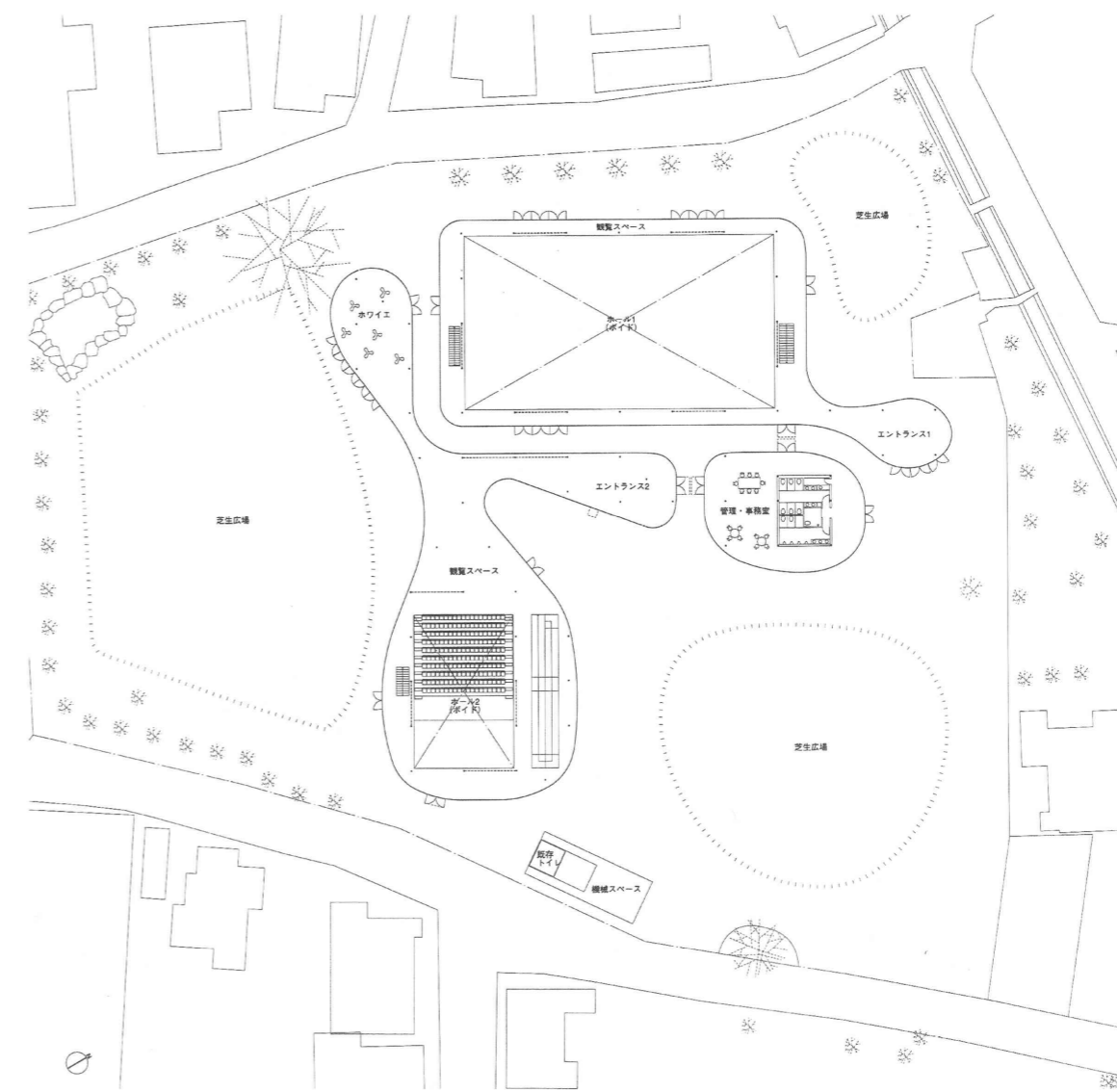


図3-2-2 平面図

事例研究3

北上市文化交流センター

アートファクトリー（市民芸術工場）の計画

市民の日常的芸術文化活動が行われる場として計画されたアートファクトリー（市民芸術工場）は、大小22の練習室群（機能空間）とテラスや植栽等（自由空間）から構成される。機能空間と自由空間の組合せを等価に散在・配置することで、活動が連鎖的に発生・活性化するようなオープンエンドな空間計画を試みている。テラスには多様な活動形態に対応できるよう可動型家具を配し、階段や柱、フローリングエリア、レベル、植栽などのさまざまな建築的要素により、ムラのある多孔性空間を創り出し、人びとの滞留志向を促す場所を仕組んでいる。更に各個室をガラスで構成することにより、休息したり散歩したり散歩したりする傍らで、練習などが行われているという状況をつくりだし、文化活動を日常生活の一部として成り立たせている。この関係性は自由空間と機能空間の境界を次第に緩くし、人びとの自由な交流を促すと共に新たな文化活動の発生を誘発する。

また、練習室群のほとんどを楽屋転用させることにより、楽屋・施設の利用率をあげる文化会館の課題への策としている。

「北上市文化交流センターさくらホール」は、オープンしてから3年近くが経とうとしている。インドア化した自由空間ははいつも予想外の光景が展開しているようだ。練習室から飛び出し、フリースペースでダンスをする女性、あちこちでピクニックをしている子供たち、なぜかクラシック音楽練習室でキックボクシングをする人びと・・・このような場のあり方は、従来の文化施設の枠組から大きく外れているが、それは突然降って湧いた単なる思い付きではないだろう。クラシック、邦舞、バレエやロック、ポップス、ストリートダンスなどの唐突な共存により、彼ら自身がつまらぬ枠付け意識から抜け出して、もっと自由に、もっと自然体になって、活動を楽しめるようになるということだ。このようにしてアートファクトリーは人びとの意識を開放し、多様な生き方、価値観を認め合い、選択・交換できる場となりながら、ジャンルやサークルを越えた、しなやかで軽いコミュニティを生み出していくのかもしれない。

設計 建築 久米設計・高橋設計特定共同企業体
 構造 設備 久米設計
 ランドスケープ オンサイト計画設計
 施工 鹿島建設
 敷地面積 32191.55㎡
 建築面積 9834.11㎡
 延床面積 15093.16㎡
 階数 地下1階 地上3階 塔屋1階
 構造 鉄骨鉄筋コンクリート造
 一部鉄骨造 鉄筋コンクリート造

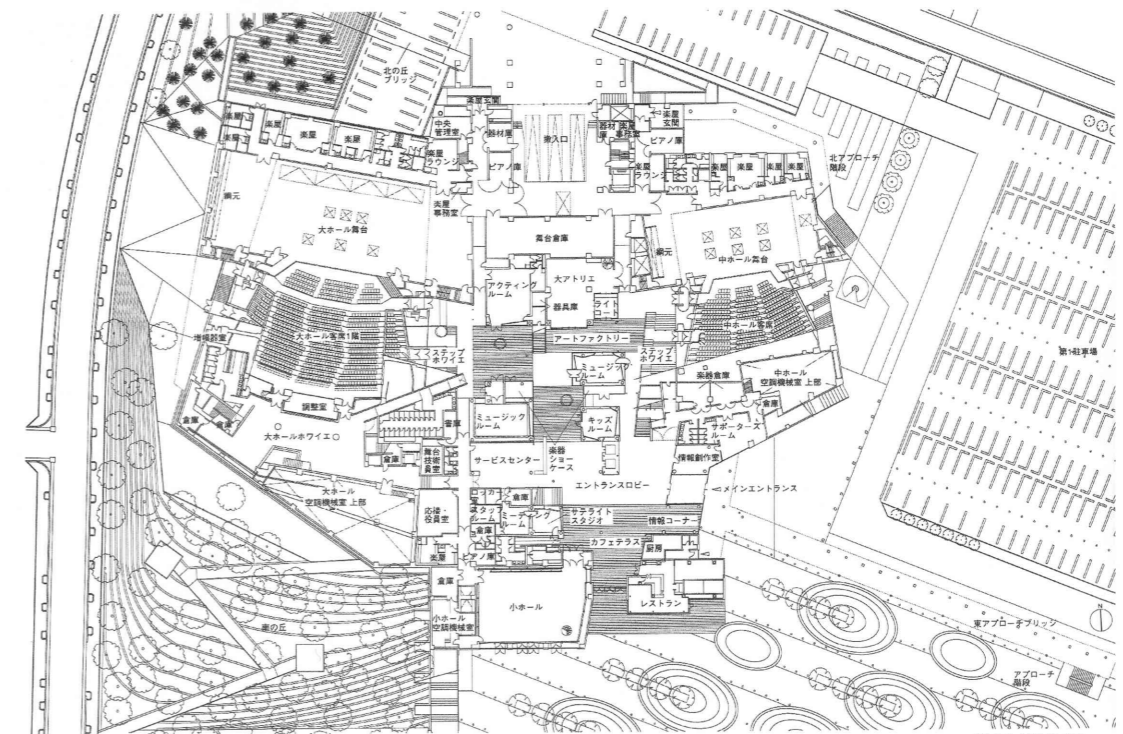
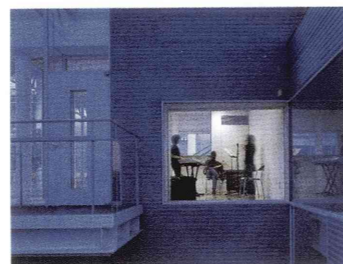
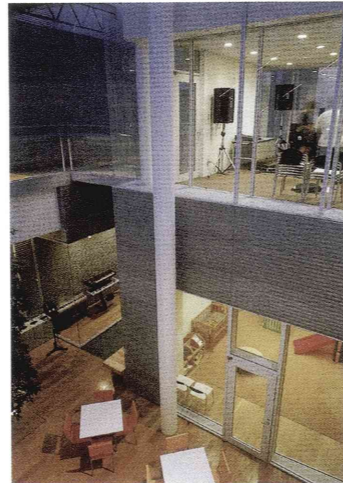


図3-3-1 平面図

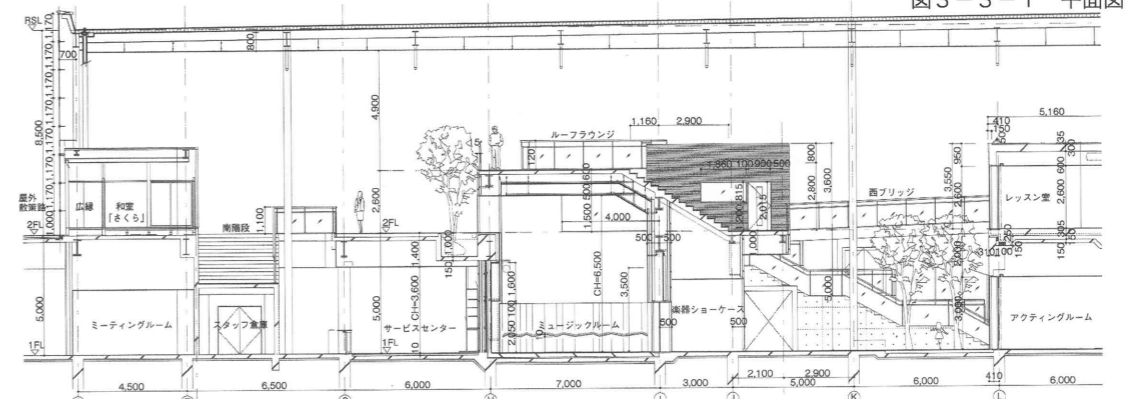


図3-3-2 断面図

事例研究 4

スパイラル

空間構成の骨組みは、この建物の主たる用途である展示空間（ギャラリー）と演示空間（多目的空間）の一体的利用が可能ないように、その間に回遊性を持たせたことであった。演示空間は機能上どうしても閉鎖的な箱となる。これを3階に上げ、1、2階は大きな一体の吹き抜けとして扱い、その中に展示空間を軸として、それとの相互作用が期待できるカフェとショップを配置している。

敷地は青山通りに対して間口が30mしかないにもかかわらず、60mの奥行きを持つ。商業ビルにとっては不利になるこの奥深さを逆手にとって、大きなスカイライトを持つ4層吹き抜けの半円型アトリウムを1階の最後部に設けている。ここには建物の名称となったスパイラル状のスロープがあり、玄関から入った人は自然にここまで導かれてから2階へ到達することとなる。また地下駐車場への車路を利用して青山通りに面したファサードに沿うように1階から3階を結ぶ大階段を設けて3階ホールへの主動線としている。

このふたつの垂直性の強い空間によって、1階から3階までの回遊性が確保されている。またギャラリーやカフェ、ショップなど機能上完全な物理的区画を必要としない空間については、レベル差や柱列あるいは仕上げ材料を変化させるなど示唆的な区画方法を用いて、異なる各アクティビティの間に新しい関係が生まれるような構成とした。多義的な輪郭を持った「部分」は、使い方によって他の「部分」と重なり合い、新たな「全体」として見えてくる。

内部におけるこのような「部分」と「全体」の関係はエレベーションの構成にも用いられている。現代建築のポキャブラリーは、その出発点となった純粋な幾何学形態に一度解体され、造形的主題や周辺のコンテキストあるいは内部機能の要求によって再構成される。正方形、グリッド、立方形、円柱、円錐、球、ピアノ型などの「部分」が、分割され、切り取られ、歪められ、閉じ込められ、そして相互に貫入しながら「全体」を形づくっている。

エントランスに立つと、緑色に沈むカフェを通して自然光に照らし出されたアトリウムの白い壁を背景に、蛍光色に輝くジュディ・ファフのインスタレーションが目に入ってくる。これに導かれて右手のステップを上がると、ギャラリーの吹き抜けに出る。アトリウムに連続するこの空間の中に、独立した型でカフェと2階のショップが突き出ている。2階に人の動きが、カフェからはざわめきが伝わってくる。

設計 建築 横文彦+横総合計画事務所
 構造 木村俊彦構造設計事務所
 設備 総合設備計画
 敷地面積 1736.5㎡
 建築面積 1462.4㎡
 延床面積 10561.3㎡
 階数 地下3階 地上10階
 構造 鉄骨鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造

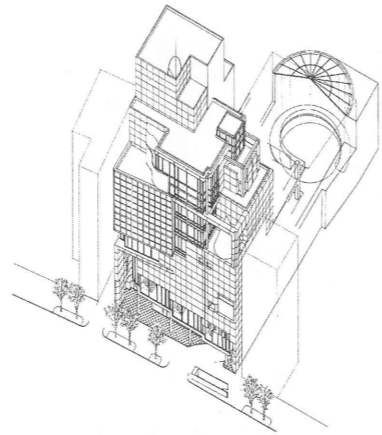


図3-4-1 アクソメ1

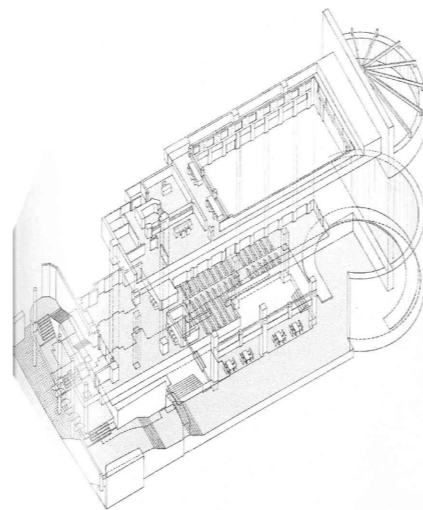


図3-4-2 アクソメ2

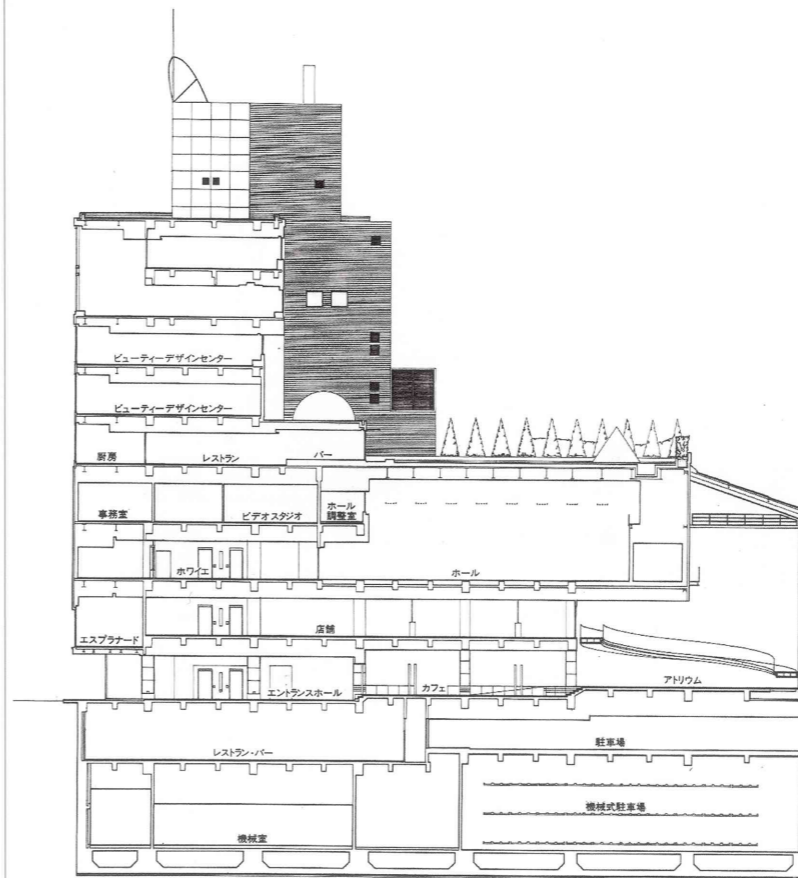
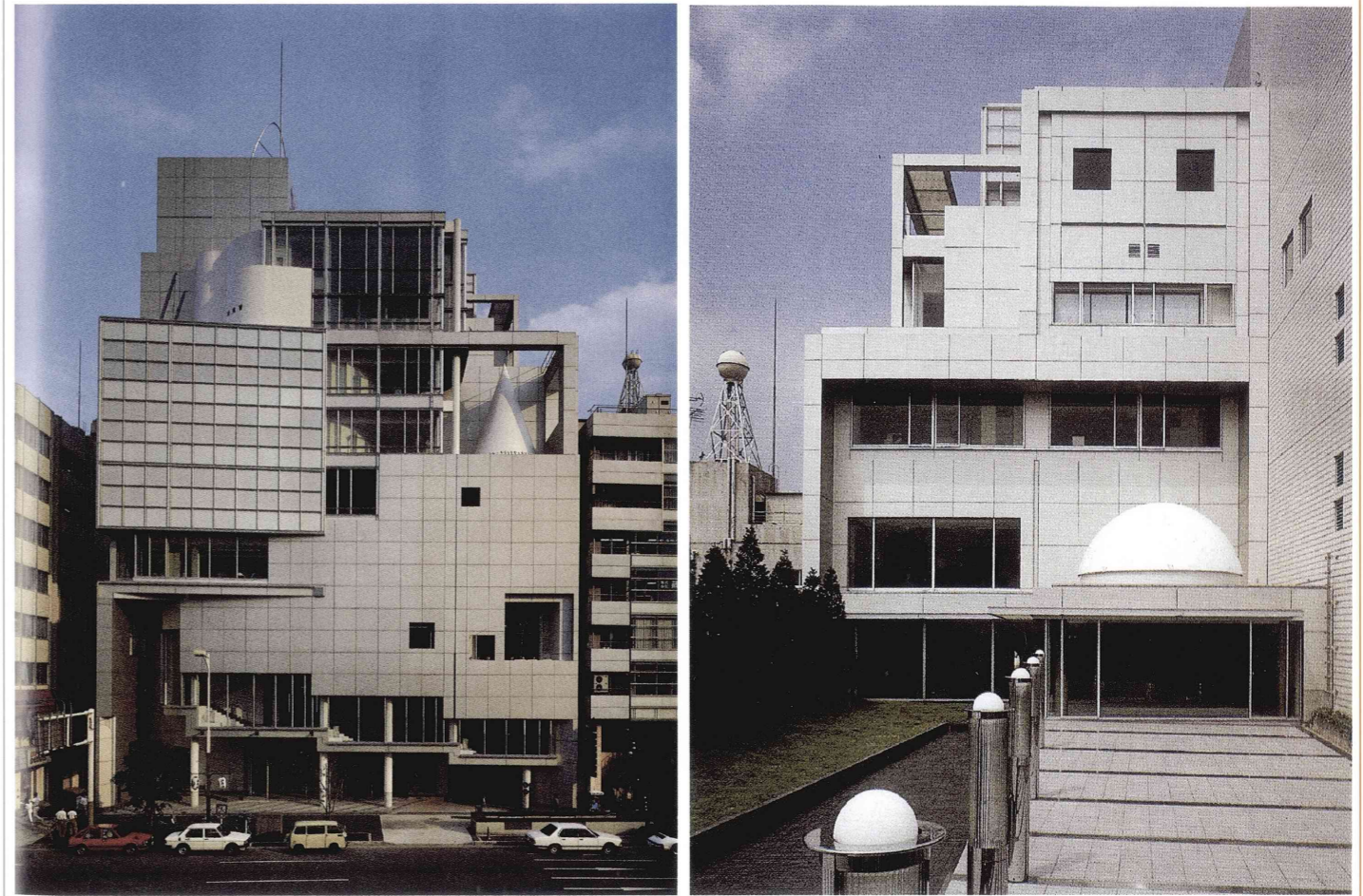
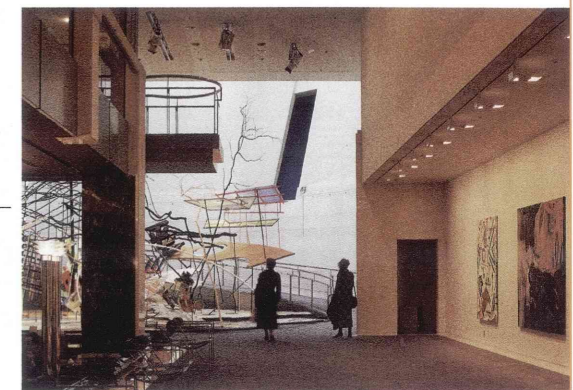


図3-4-3 断面図



事例研究5

オアシス21

都市施設としての提案

名古屋市の久屋大通りの中央東側に位置する。バスターミナルや店舗を併せ持つ都市型公園施設である。都市の公園には、環境と触れ合うこと、環境から学ぶこと、環境に負担をかけないこと、環境を利用すること、環境から癒されること一を誘発する「環境と向き合う場」が求められる。そこで、水や光といった環境といった環境との積極的な交流を促す機能を付加することで、公園から都市に波及する「環境の環」を考えてつくられた。

敷地中央に配した大屋根は、宇宙に浮遊する生命の水：<水の宇宙船>というものをイメージした。光をやわらかく透過するガラスで構成され、中央には水がペールのようにたたえられている。水面は移り変わる多彩な空の表情を映し、水越しに透かして重なって見える街や空は、都市と環境の融合した心象風景となる。<水の宇宙船>外周部のガラス床は空中歩廊となっており、敷地内の植栽や、水面下の地下広場、隣接する久屋大通公園の豊かな緑が展望できる。都市に残された貴重な自然を空中から再発見する場となっている。公園全体を傾斜させることで都市に挿入された絵画のような表情をもたせている。地表は複数のレイヤーで構成され、季節ごとに異なった緑のハーモニーを奏でる。この都市に挿入された四季の表情は、季節感を失いつつある都市で生活する人びとの体内時計の調整機能を果たし、自然の恵みを体感する貴重な場所となる。

栄地区は地下街が発達し地上より快適な歩行者空間が整備されている。その結果、人の動線は地下に集中し地上に点在するパブリックスペースが有効利用され難くなっていた。そこでこの施設の整備が「都市のツボをおし、人の流れのバランスを整える」ような魅力的な建築を意図している。地下広場は、愛知芸術文化センターNHK名古屋放送センタービル、地下街および地下鉄と計5ヵ所で接続される。地下広場が単に通過動線ではなく、大勢の人が集う都市の広場として開放することで地下に新たな都市景観をつくらうと考えられている。地下広場は大きな吹き抜けと上空の大屋根<水の宇宙船>による半屋外の広場とし、自然採光や自然換気を積極的に取り入れている。

商業施設は流行に左右されるため、多様と比べてデザインの寿命が短い。オアシス21では、いわゆる既存施設等のイメージコピーではなく、名古屋発のオリジナルデザインを解とすることで長寿命デザインに挑んでいる。素朴でありながら無限の広がりを感じさせる名古屋伝統工芸の「有松絞り」に着目し、その均質なパターンに現代的なアレンジを加え、建築が絞りの浴衣を羽織るようなイメージでニュートラルな空間に視覚的な広がりを与えているように思う。

設計 建築 構造 設備 大林組
 施工 大林組
 敷地面積 20390.67㎡
 建築面積 10090.47㎡
 延床面積 25185.71㎡
 階数 地下2階 地上1階
 構造 鉄骨造 鉄筋コンクリート造

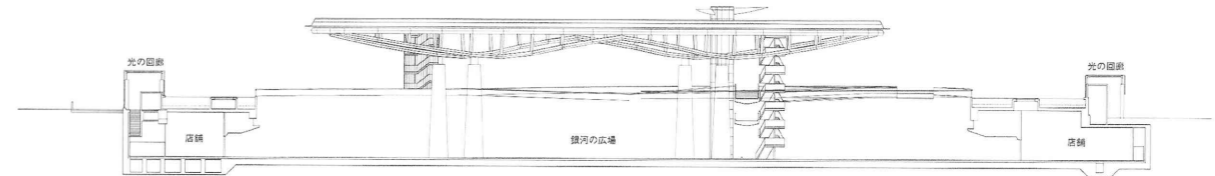
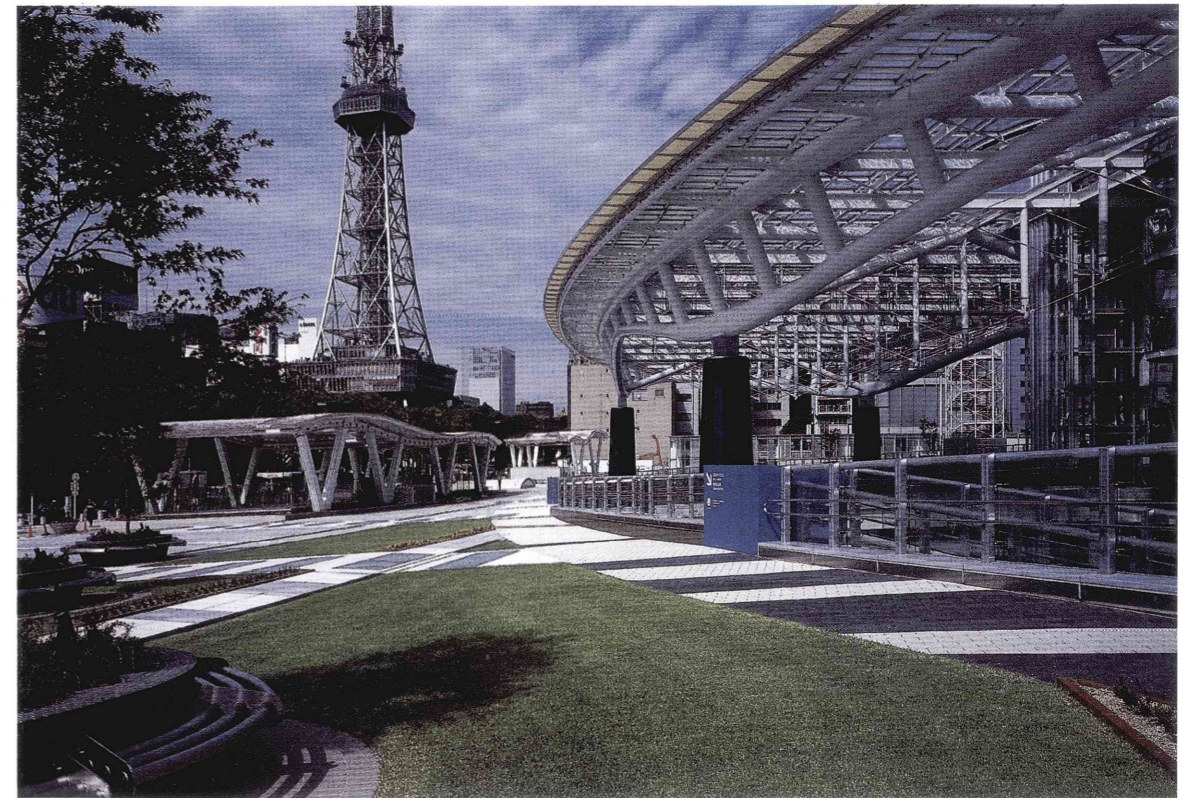
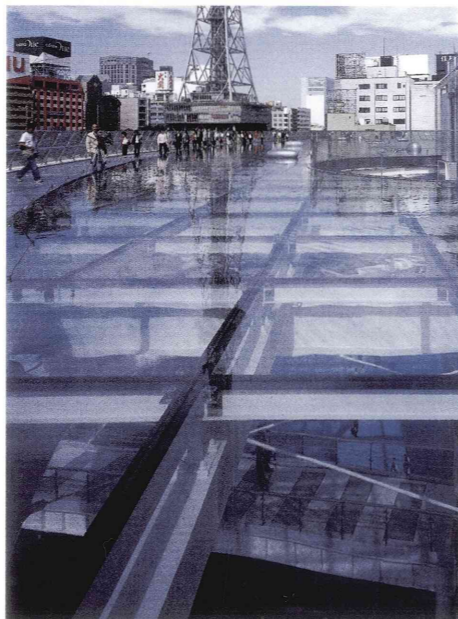


図3-5-1 断面図

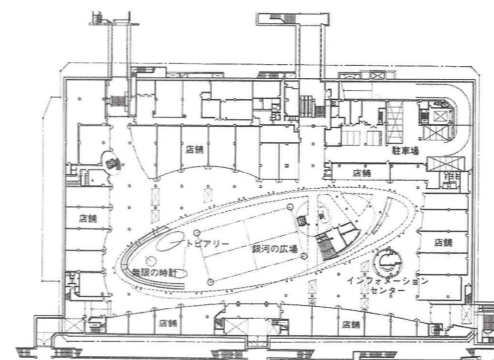


図3-5-2 地下1階平面図

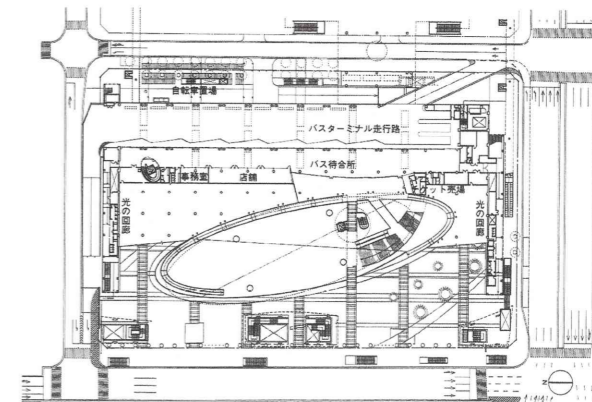


図3-5-3 地上1階平面図

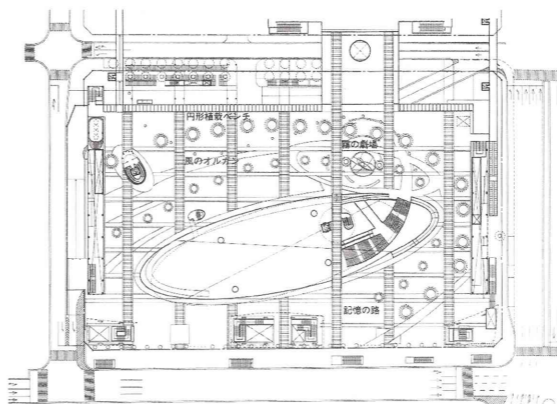


図3-5-4 地上2階平面図

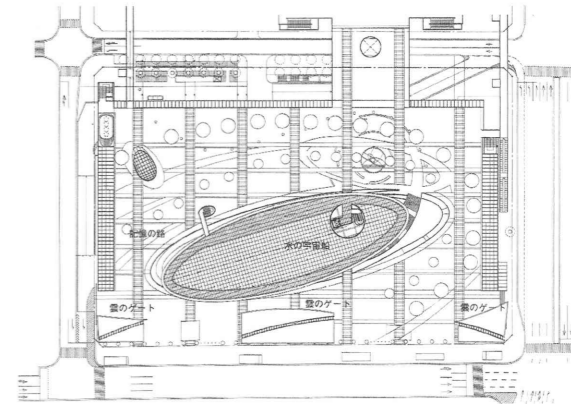


図3-5-5 屋根伏図

事例研究 6

ヒルサイドテラス第6期

今までのヒルサイドテラスの敷地は、旧山手通り南側にあるが、第6期計画は、道路を挟んだ北に位置する。それまでが第一種住居専用地域であったことから、建物の高さがほぼ10mでスカイラインがつくられてきたが、第6期も庇線を10mにすることで、軒線を維持している。建物も3棟の群とすることによって、従来のヒルサイドテラスとしてのスケール感を保持している。道路側F棟・G棟の2棟は、それまでと同様地階・地上レベルに店舗があり、その上部が住居となっている。奥にある1棟は個人住居である。

プランニングは、高低差のある地盤レベルを利用しつつ、変化のあるパブリックスペースと、形の異なる店舗が集合している。中央の広場を介して奥に公共性の高い、また自然光を多く取り込んだ展示を主体としたホールと喫茶コーナーを設け、さらに奥にはギャラリーがある。ギャラリーと展示ホールは一体的に利用できるように、モザイク壁画の直立する、内部化された白い池庭を取り囲みながら、回遊性のある平面構成をとっている。

また、平面計画の上では、いくつもの軸線を介在させることで、多様な視線の展開を試みている。丸柱の列柱もそのひとつである。透明性および床レベルの変化により、奥への誘導を高めることを意図している。

第6期ではじめて街並みとしてのファサードが南を向いている。表層のあり方は今までよりも構成的であり、庇線を強調することにより、従来の建物群との一体感を強めている。F棟のファサードは、あえてシンメトリーに徹することで、建物のスケールに対する安全性を強め、G棟はデンマーク大使館がそうであったように、道路線を意識的になぞらえることで動きを感じさせている。

庇による陰影、鉄骨フレームによる重層性、アルミコルゲート板、アルミパンチングパネルと庇に保護された塗装面との材料の対比、さらに50角コロナ状タイルとの対比、それらはその時代に対応した表現を意図したものである。

配置計画は、対面する第3期計画にあっては、ポジティブな古い塚を中心に隣棟間隔をもたせたのに対して、第6期はネガティブな広場により、親近感をもつ距離をおいて群を構成している。ヒルサイドテラスにおいてそれぞれの時代の表情をもつ街並みの形成が試みられ、この第6期計画によって、25年という長い年月をかけて、施主と建築家とでひとりの街の姿をつくってきたのである。

設計	建築	横総合計画事務所
	構造	青木繁
	設備	総合設備計画
施工		竹中工務店
敷地面積	F棟	1978.94㎡
	G棟	993.52㎡
	N邸	331.72㎡
建築面積	F棟	1361.92㎡
	G棟	665.26㎡
	N邸	496.63㎡
延床面積	F棟	5140.32㎡
	G棟	2726.87㎡
	N邸	496.63㎡
階数	F棟	地下1階 地上6階
	F棟	地下2階 地上4階
	F棟	地下1階 地上2階
構造		鉄筋コンクリート造

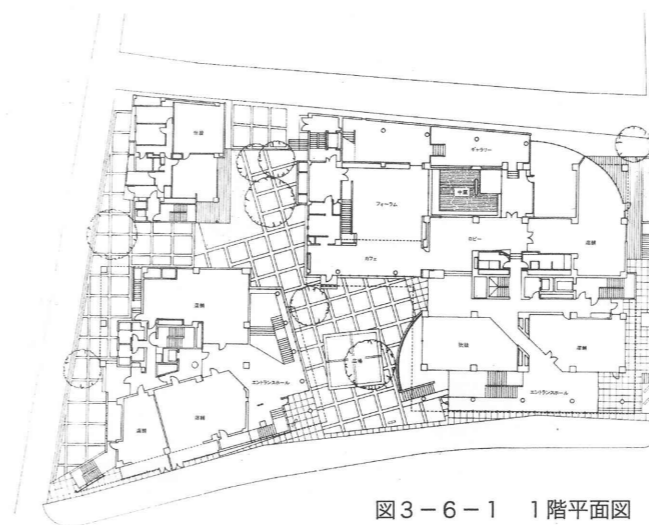


図3-6-1 1階平面図

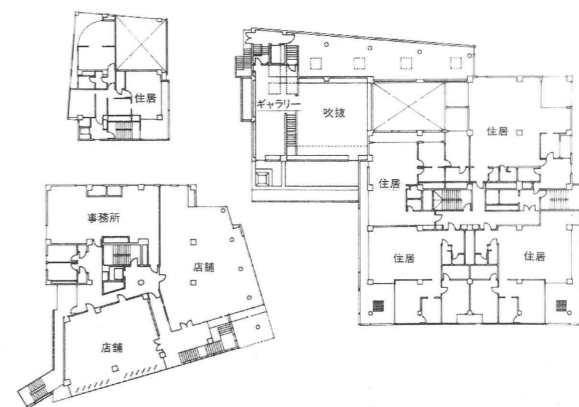


図3-6-2 2階平面図

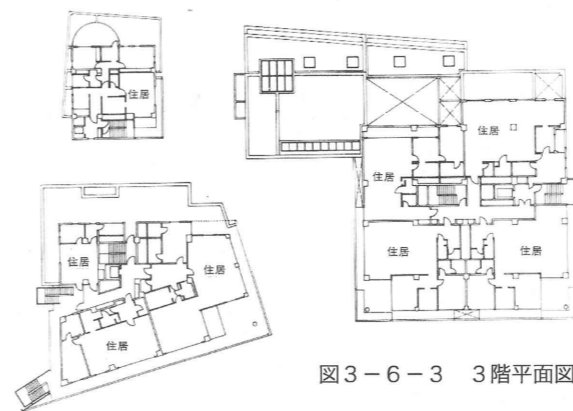


図3-6-3 3階平面図

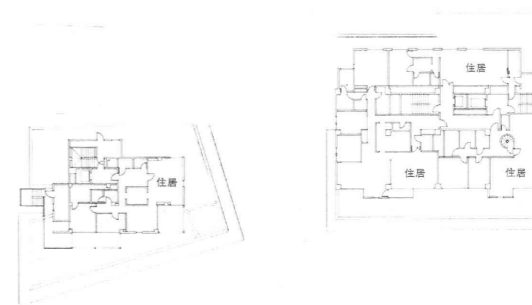


図3-6-4 4階平面図

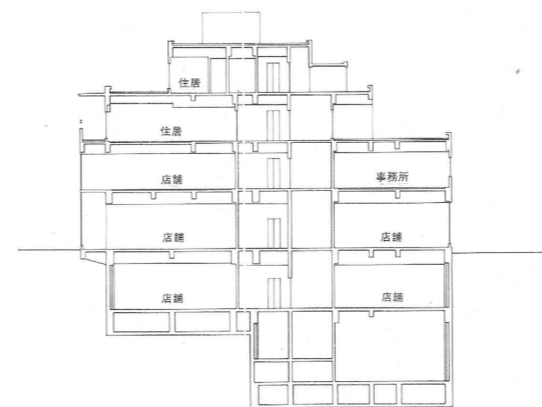


図3-6-5 断面図1

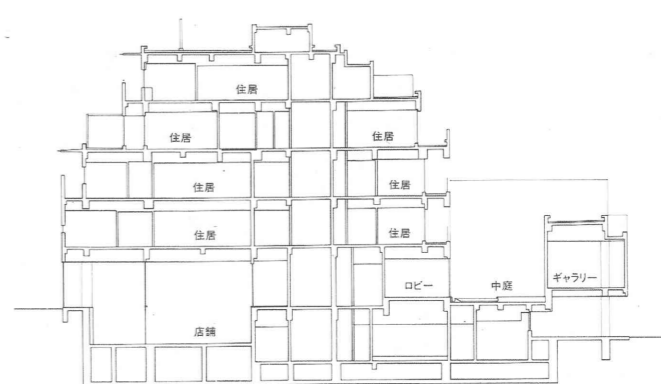
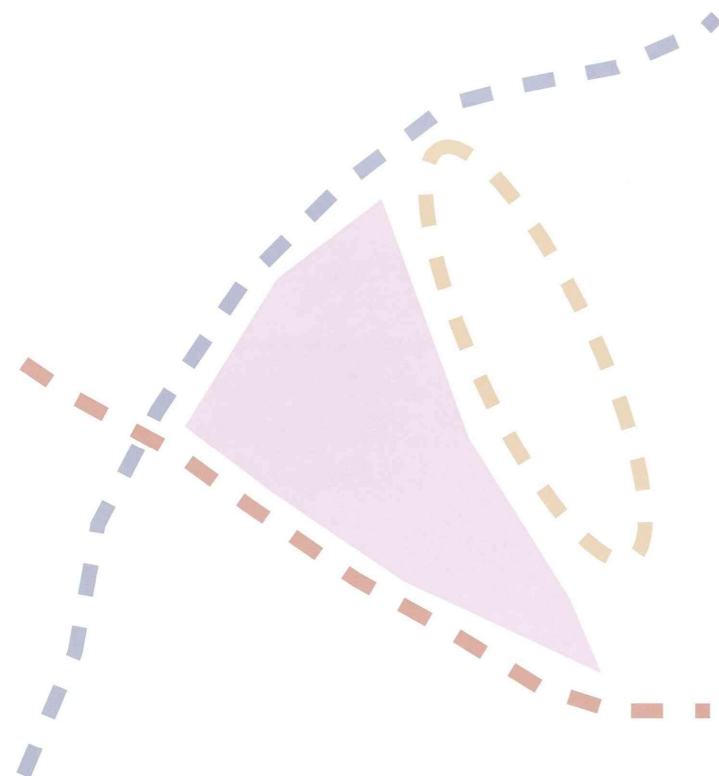


図3-6-6 断面図2

敷地分析



□敷地は三角商業ゾーン

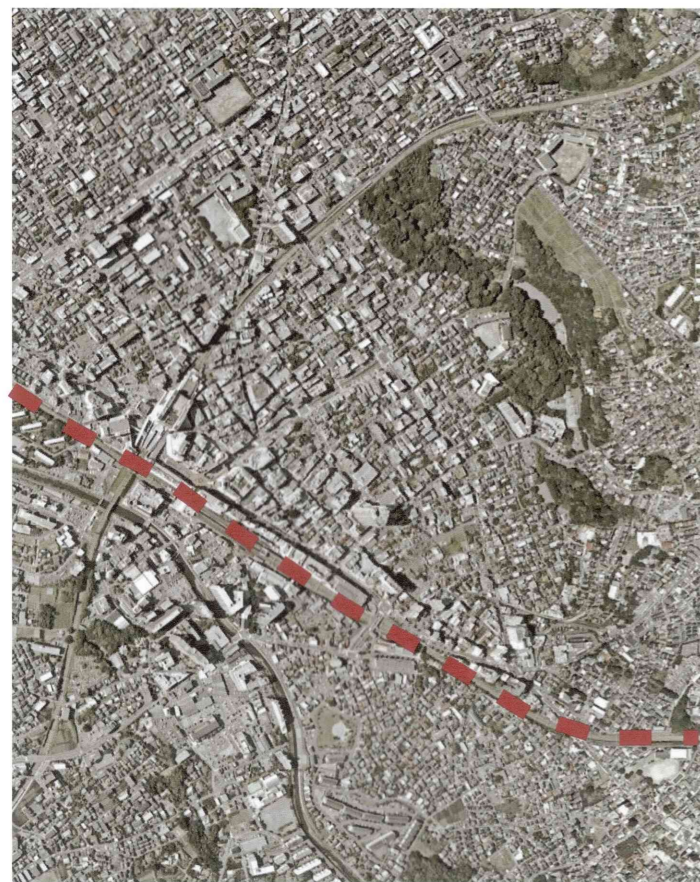


中心市街地は横浜線・小田急線・芹が谷公園に囲まれることで三角の形で栄えている。囲まれていることでコンパクトな面積で都市が発展してきた。しかし、現在、三角ゾーンは商業に特化するあまり、飽和状態になりつつある。

町田市及び周辺都市の人口の急増は大型商業資本の関心を呼び、昭和40年代後半になるとその進出が顕著になった。これら大型店の進出は中小小売店にとってはまさに死活問題であった。特にここ数年は、町田市郊外及び周辺都市の大規模小売店等、大型店の進出や24時間営業のコンビニエンスストア、形態をかえたディスカウントストアの進出が目立っている。このことが中小小売店に脅威をもたらしており、商業を取り巻く環境は年々厳しくなっている。

建物のボリュームは、大型ディスカウントストアの進出などにより、横浜線・小田急線沿いで大きくなっており、芹沢公園（国際版画美術館）に近づくにつれて小さくなっている。古くからある住宅や店舗は、旧町田街道沿いにあり、横浜線・小田急線町田駅からは少し距離が離れていることもあり、シャッターを降ろしている店も少なくない。ひとつの店が潰れると、悪循環で周りの店も続けて潰れることもあるようだ。

本修士設計では、この三角ゾーンのほぼ中央の横浜線から芹が谷公園を繋ぐ大通り沿いの土地を敷地とする。



①横浜線 明治41年開通



②小田急線 昭和4年開通



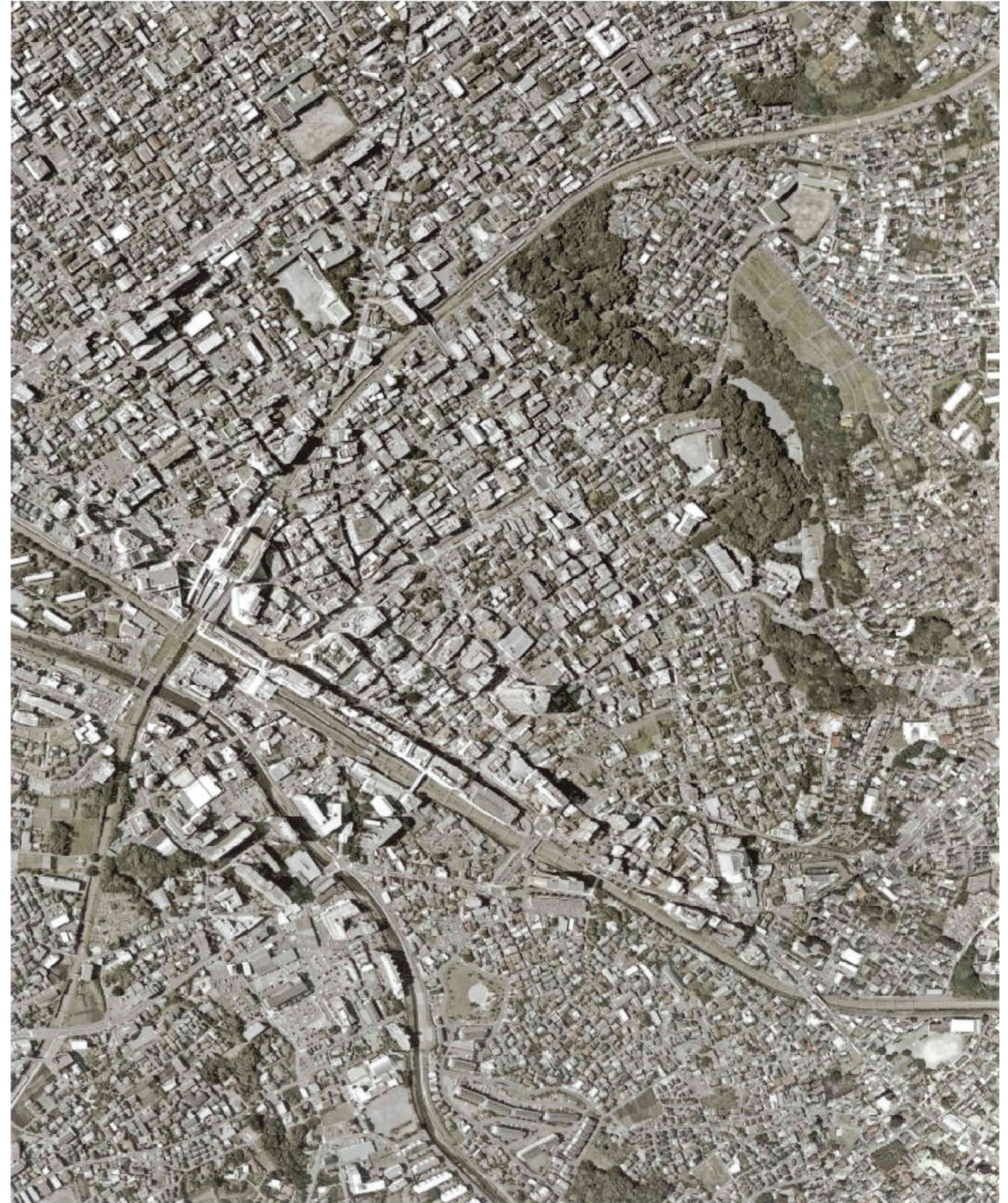
③芹が谷公園（国際版画美術館）

□航空写真から見るスケールの変化

- ・昭和57年（左下図）を見ると駅周辺を除いては、まだ大部分が住居である。明治、昭和初期まで農村であった場所の特徴が出ている小さな街区に、また郊外らしい小さな住居が建ち並んでいる
- ・平成17年（右下図）を昭和57年と比較してみると建物のスケールが倍以上になっている。ほとんど住居は見られず、大きな建物の用途を見てみると、1つの建築に1つのブランドが入っているだけのことが多い。つまりは大型ディスカウント店の進出であり、1街区・1建築・1ブランドという図式が見て取れる。
- ・街区が小さいことから、文化施設は旧町田街道沿いの広い土地に立っていることが多く、私はここに疑問を感じる。「一番賑わっている場所に複合文化施設を設計する」ことが狙いであり、この街には必要だと思う。



S57.1 撮影



H17.6 撮影

町田駅周辺の大学プロット図

東京都区部の南西 30 ~ 40km 圏に位置し、東京都区部郊外のベッドタウンとして発展。町田駅周辺地区は国道 246 号沿線を代表する繁華街で、商業都市の一面も持つ。百貨店や専門店等が多く林立する一大商業ゾーンとして著しく発展し、神奈川県北部も含んだ商業の中心地である。飲食産業はここ数年で立川市と共に急成長している。市内や近辺には私立大学が多いため、町田駅前繁華街は学生を含む若者の街としても発展している。「西の渋谷」とも呼ばれ、若者向けの店（衣類店・ゲームセンター・漫画専門書店・メイド喫茶など）が多く、特にメイド喫茶等については、近隣一帯で唯一出店されている。東部の横浜市境付近には幼稚園から大学まで一貫教育の玉川学園が存在し、それを中心に住宅地が広がる学園都市として有名である。



□市民の活動

代表例「フェスタまちだ」:本年で21回を迎える町田最大のイベント

「エイサー」を中心に23団体が町田の中心市街地でおおいに踊り、踊り手と見物人が一体となって楽しめる祭になっている。また、原町田は、古来より商都として発展してきた。そこには、多くの人々が集い、れあいのなかで作り上げられてきた街である。

この祭でまた新たな出会いと発見をとおして、更なる魅力を創造していくことが狙いである。



銀行の前を利用して大道芸を行っている。それを街の人々が壁となり空間ができています。



エイサーを踊る町田エイサー会の人々。何気ない階段が賑やかな舞台を演出している。



駐車場を利用した「プロレス大会」普段は人が通過する街の隙間の様な空間が活気に満ちている。



道という道が「町田大道芸祭」でうめつくされる。市民意識の高さがあることで実現する催し物。

□現状

町田では、従業員が増える一方で、店舗数は減少している。

大型商業施設の町田店が続々と進出してきており、小規模な店舗は退いていっている。

「西の渋谷」と呼ばれている町田も変革の 때가迫られている。町田らしいをもう一度取り戻すべき。



町田駅周辺の商業地域では、空き地はなく、飽和状態になりつつある。また、雑居ビルが多く、町田を訪れる人たちの大半が建物の1~2Fまでしか使わず、平面的な人の動きしか見られない。それぞれの建物の関係が乏しいため、相乗効果は皆無ある。「雑居」ではなく「共存」が必要。



何でもある街。ごちゃごちゃとした街で、食品を扱っている店舗の上にテレクラがある。悪く言えば、それに慣れてしまっていて無関心。よく言えば、いろいろなものがあることを受け入れられる意識を持っている。変化に対応してきた町田の市民。



行事のポスター



まちづくり公社にて撮影

計画地調査

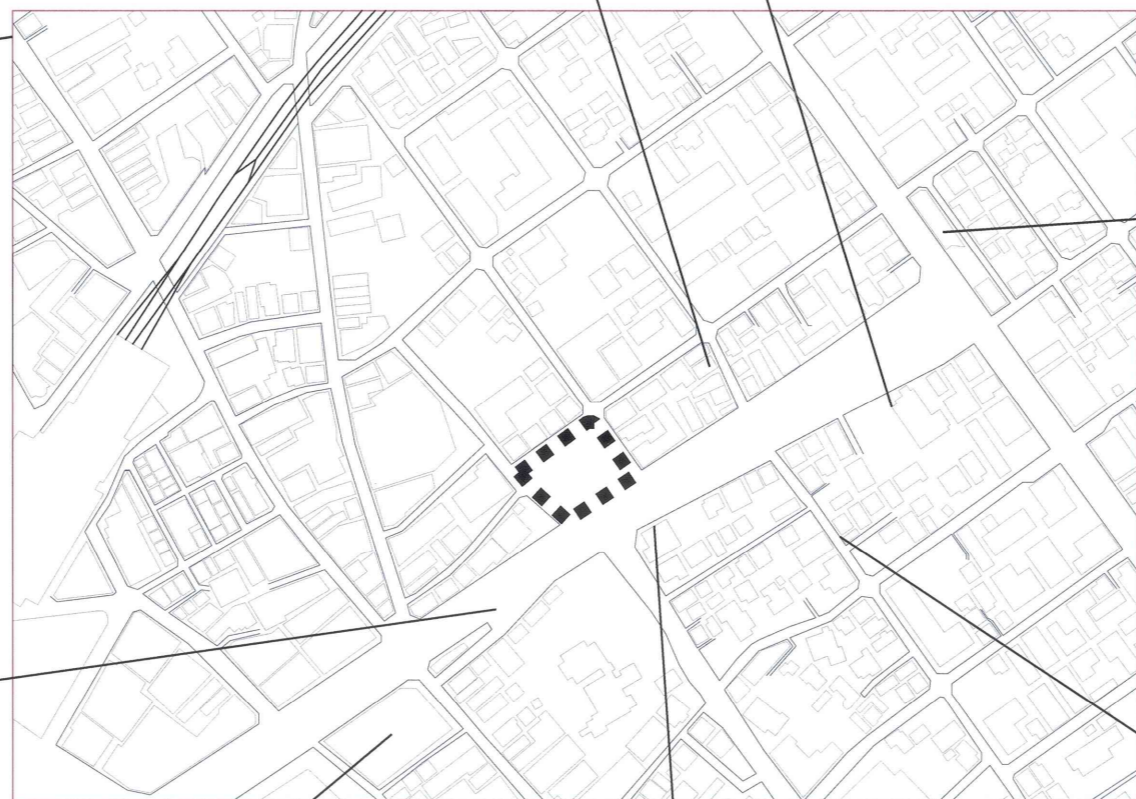
敷地面積 1757.2㎡
 建蔽率 80% 容積率 500%
 商業地域



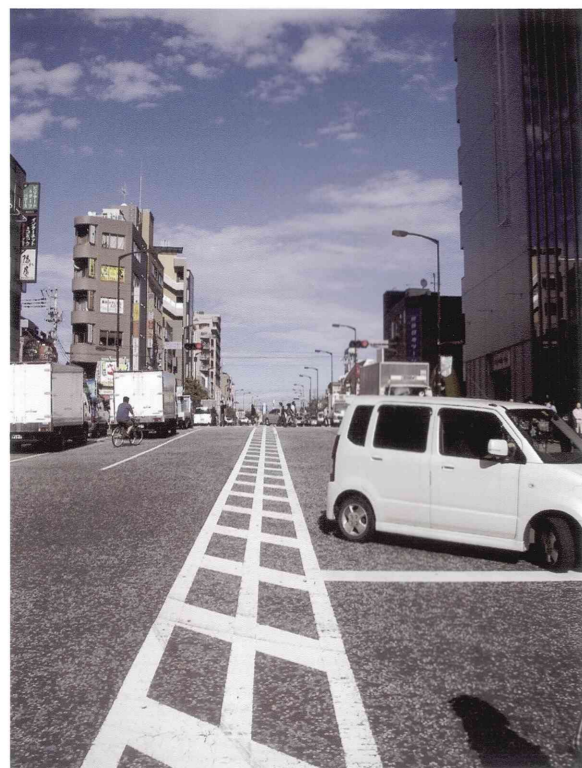
計画地の近くには昔ながらの八百屋がある。この大通りに大きな商業ビルが建つと困るという。また、立ち退いてほしいという話も出るようだ。



計画地の大通りを挟んだ反対側には立体駐車場がある。このほかにもこの通りには駐車場が目立つ。今から町田の顔となるような場所に文化施設があってほしい。



町田街道沿いには大きな建物がずらりと並ぶ。そのほとんどが住商併用の建物で街の景観を奪うような建物が多い。車通りが多く、街歩きには適していない場所である。



横浜線町田駅と町田街道を繋ぐ大通り 本提案の敷地はこの通りのほぼ中央に位置する



109町田店 町田が「西の渋谷」と呼ばれる由縁のひとつ



店舗のほとんどが大通りに対しての提案しかしていない。人を繋ぐためには裏にも目を向けなくてはいけない。



衰退していった店舗があり、人通りもほぼ無いに等しい。このような空いた場所には居酒屋やスナック・パブなどが進出してくる。


用途別土地利用図



- 教育文化
- 官公庁
- 厚生医療
- 供給処理
- 事務所
- 専用商業
- 住商併用
- 宿泊・遊興
- スポーツ・興業
- 独立住宅
- 集合住宅
- 専用工場
- 住居併用工場
- 倉庫・運輸

1:2000

設計による提案



CONCEPT MODEL



設計コンセプト

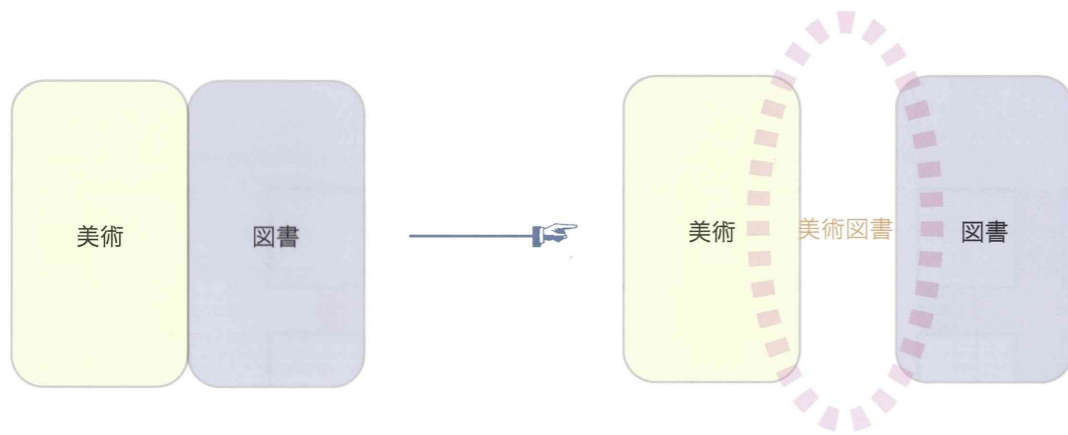
商業地域の中心地に文化を感じることのできる施設を設計する

- 一 都市や街で一番栄えている場所に文化施設を設計することは大いに意義があることではないだろうか。特に、町田市周辺には10を超える私立大学が点在しており、学生が利用することが多い。その学生たち・町田市民・町田を訪れた人々が文化を感じ、それが他の文化施設への橋渡しとなれば良いと思う。文化の潤滑油になるような施設を設計したい。



複合の方法

- 一 複合施設を設計するときに機能同士は本当に隣り合っているのだろうか。そこを安易に考えてはいけない。住居では、個人のそれぞれの部屋があり、リビングやダイニング、トイレなどを共用している。複合施設内にも機能同士が互いに共用できる空間はあるはずで、それは機能と機能の間のクッションのような役割ができるのではないだろうか。例えば、図書館と美術館を同じフロアに配置するときに「美術図書」がクッションの役割ができるであろう。このような「目的空間」を設計していく。



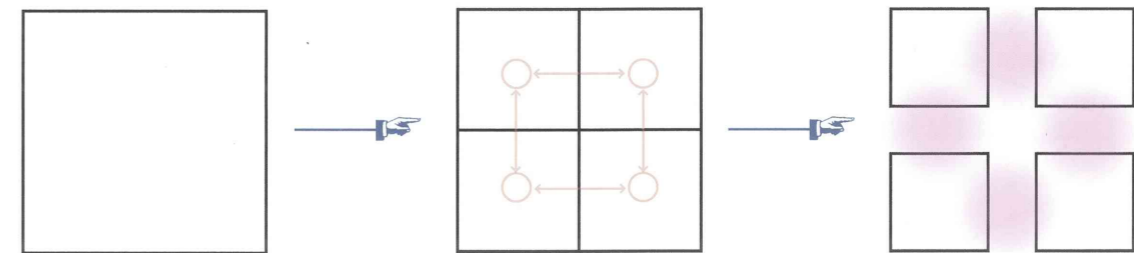
プログラム選定

- 一 都市にある機能を立体化し、1つの施設とする。
 - ①SHOP系 商業地域に選定されていることから、街の賑わいをそのまま引き込む役割
 - ②WORK系 大都市近郊のお父さん達は都心に働きに出てしまう。住んでいる都市に働く場があってほしい。家族と過ごす時間が多くなる。
 - ③ART系 町田には芹が谷公園という大きな美術の公園がある。公園内には国立版画美術館がある。しかし、駅からは徒歩20分くらいかかってしまう。そこで版画美術館と駅とを繋ぐ小さなギャラリーを組み込む。
 - ④STUDY系 町田周辺には大学が数多くある、家に帰る前に少し勉強をして帰るのも良いと思う。保育室も入れることで主婦の人が安心して学ぶこともできる。
 - ⑤EVENT系 「フェスタまちだ」を中心に市民活動が活発である。催し事の際に使用できる場所を提供する。

- ①店舗・カフェ ②NPOワークスペース・個人ワークスペース ③企画展示・常設展示・アトリエ
- ④保育室・小さな図書館・習い事教室 ⑤ステージ・小ホール

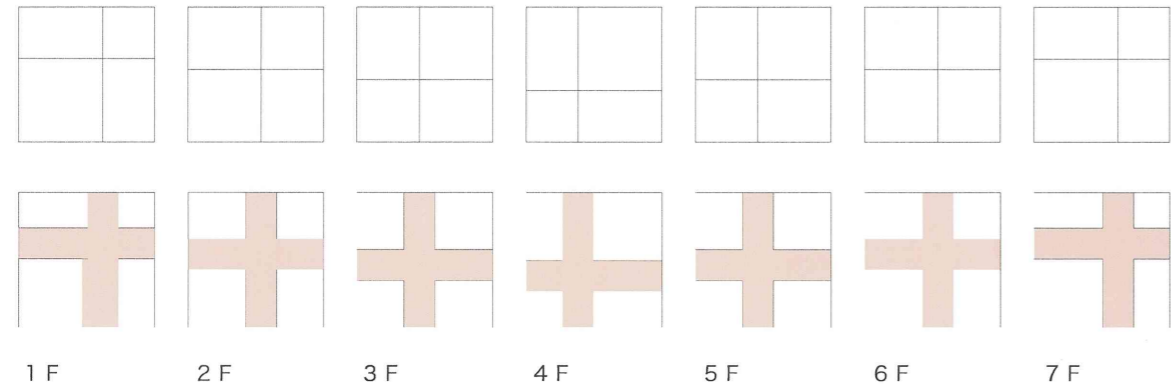
平面の分割方法

- 一 平面的には四角形を4分割する。2分割でも3分割でもなく4分割にしたのは、1つの機能が2つの機能と隣り合うような分割の仕方である。町田の中心市街地はもともと畑や農村であったため街区が狭く、1フロアにいくつもの機能を入れるのは通常難しいが、機能同士の相乗効果を期待したためこのような方式を採用した。小さなものが集まったときに大きな力を発揮することは多々あり、雑居ビルの多い町田では、助け合いの精神が必要ではないだろうか。



スラブの面積を変化させる

—1つの機能の床面積を変化させることで、使い方が変わってくる。図書館を例にあげて見ると、「レセプション」→「雑誌・新着図書コーナー」→「開架図書」→「開架図書+閲覧コーナー」の様に使用面積が小さくて済むものから大きくないと使いづらい所がある。空間、機能の質を読み取りながら設計を進めていく。4分割したうちの一つを大きくすると、それに伴って他の3つも変化していくが、その時に共用の空間の大きさは変化させず、常に機能と機能の間は8mの間隔をあける。



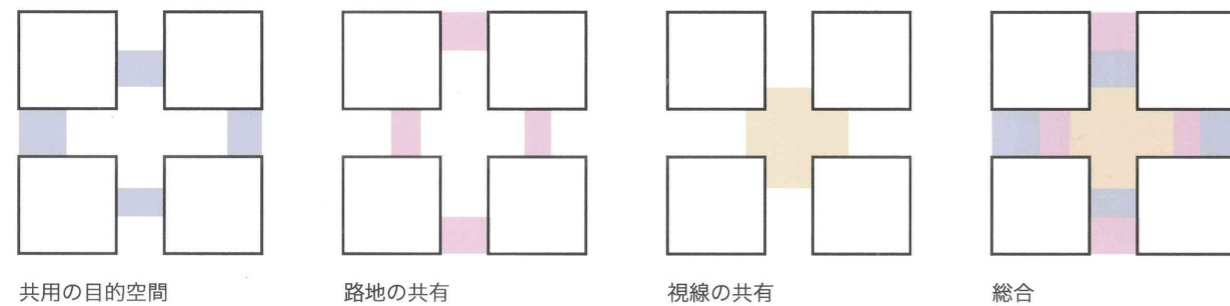
共有と共用

—機能と機能の空間を「共用の目的空間」「路地の共有」「視線の共有」の3つに分けていく。

「共用の目的空間」：前述したが、例を挙げると図書館とギャラリーの間には美術図書を配することで機能と機能のクッションのような役割となる。

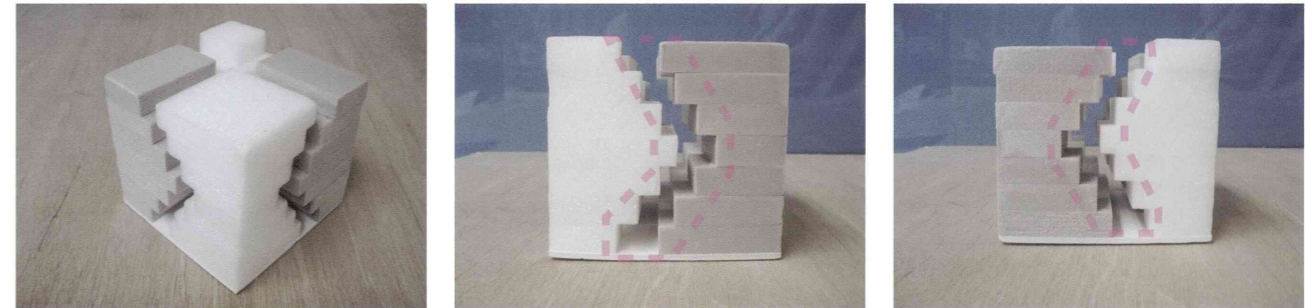
「路地の共有」：路地を共有することで、普段交わらないような人達の動線が交差していく。現在の日本においては「人が選ぶ時代」であって、あまり動線を決めすぎず、人が選んで歩き回れるような街の路地を建築の中に取り込む。

「視線の共有」：「共用の目的空間」「路地空間」以外は吹き抜けとすることで、各フロアの視線の抜けはもちろん他のフロアでの動きも見て取ることができる。



ポイドがうねる

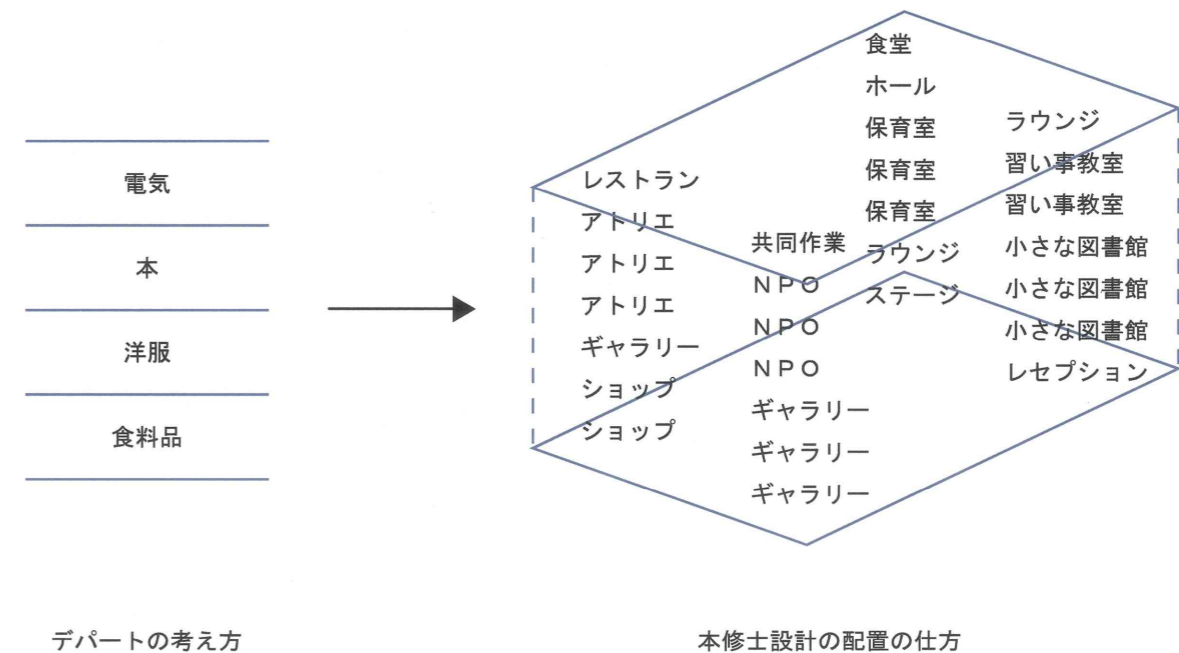
—左の2つの操作をすることでポイドが踊りだす。最上階から1階まで抜けているところは少ないが、くの字型のポイドが2重に交差することで多様なポイド空間ができてくる。



CONCEPT MODEL PHOTO

垂直方向に機能を配置していく

—デパートのような1F「食料品」2F「洋服売り場」3F「電気・本屋」というようなものではなく、垂直方向に昨日を配置していく。各階で新しい活動が生まれてほしい。





1F PLAN 1:200



各階のポイント



1Fの中心はヒロバになっている



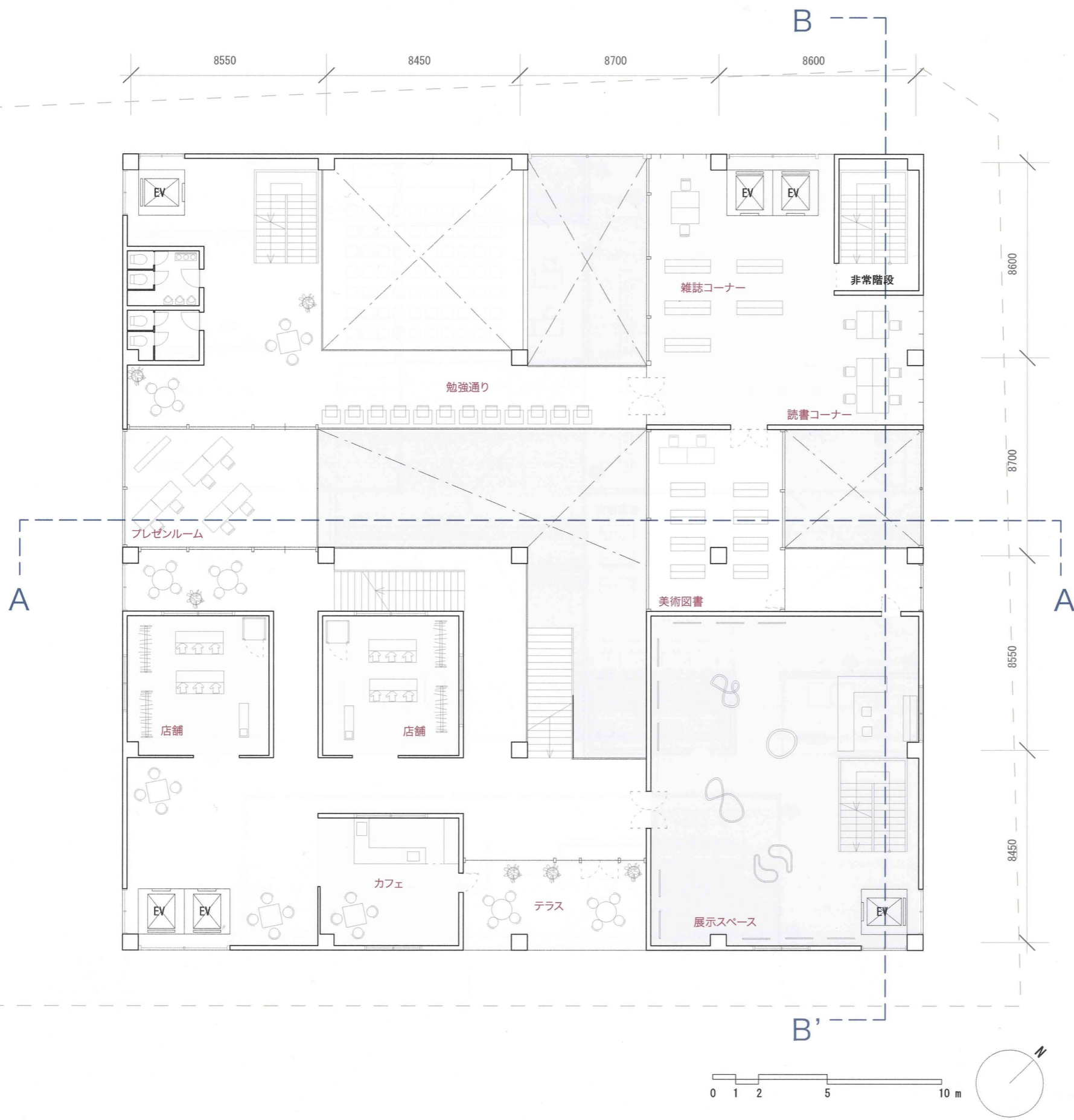
箱型の企画展示



街の賑やかさを引き込むショップ



ヒロバから見える内に開いたステージ



各階のポイント

ステージ吹き抜け	勉強通り	図書
プレゼン		美術図書
ショップ	テラス	ギャラリー



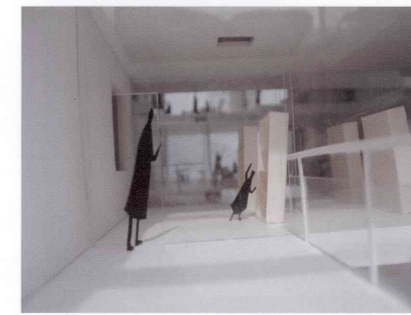
ギャラリーから美術図書が見える



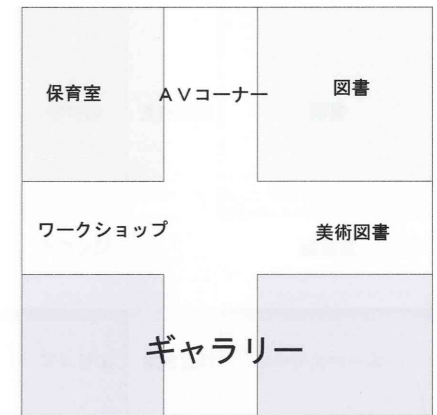
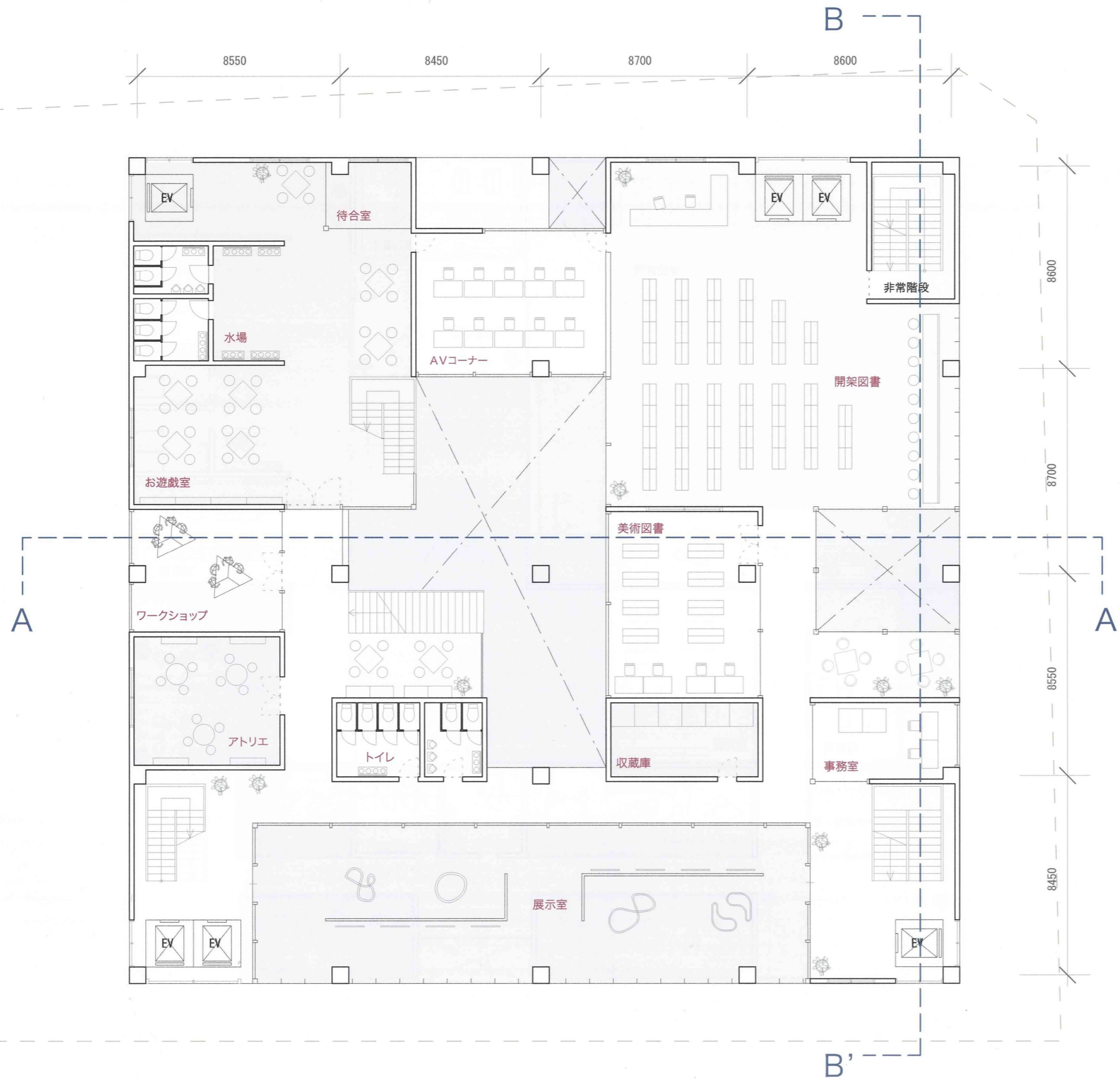
ショップとギャラリーの間にカフェテラス



ブリッジのような勉強通り



ギャラリーと図書の間的美術図書



横断するギャラリー



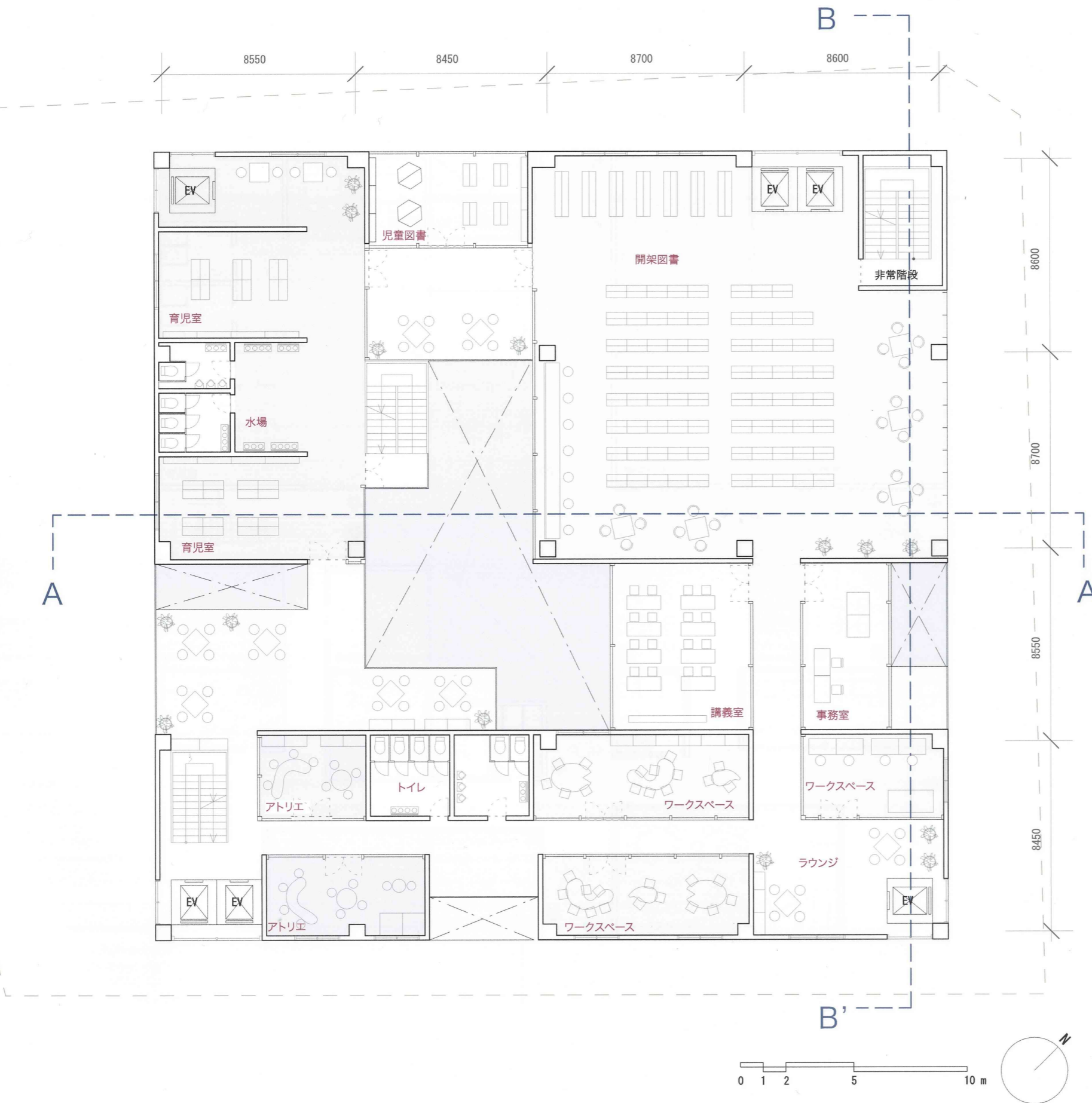
3階からは開架図書がはじまる



AVコーナーから奥行きのある風景



保育室がはじまる

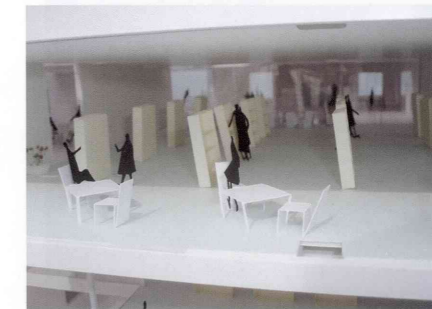


各階のポイント

保育室	児童図書	図書
ラウンジ	講義室	
アトリエ	吹き抜け	ワークスペース



ラウンジの奥に見える講義室



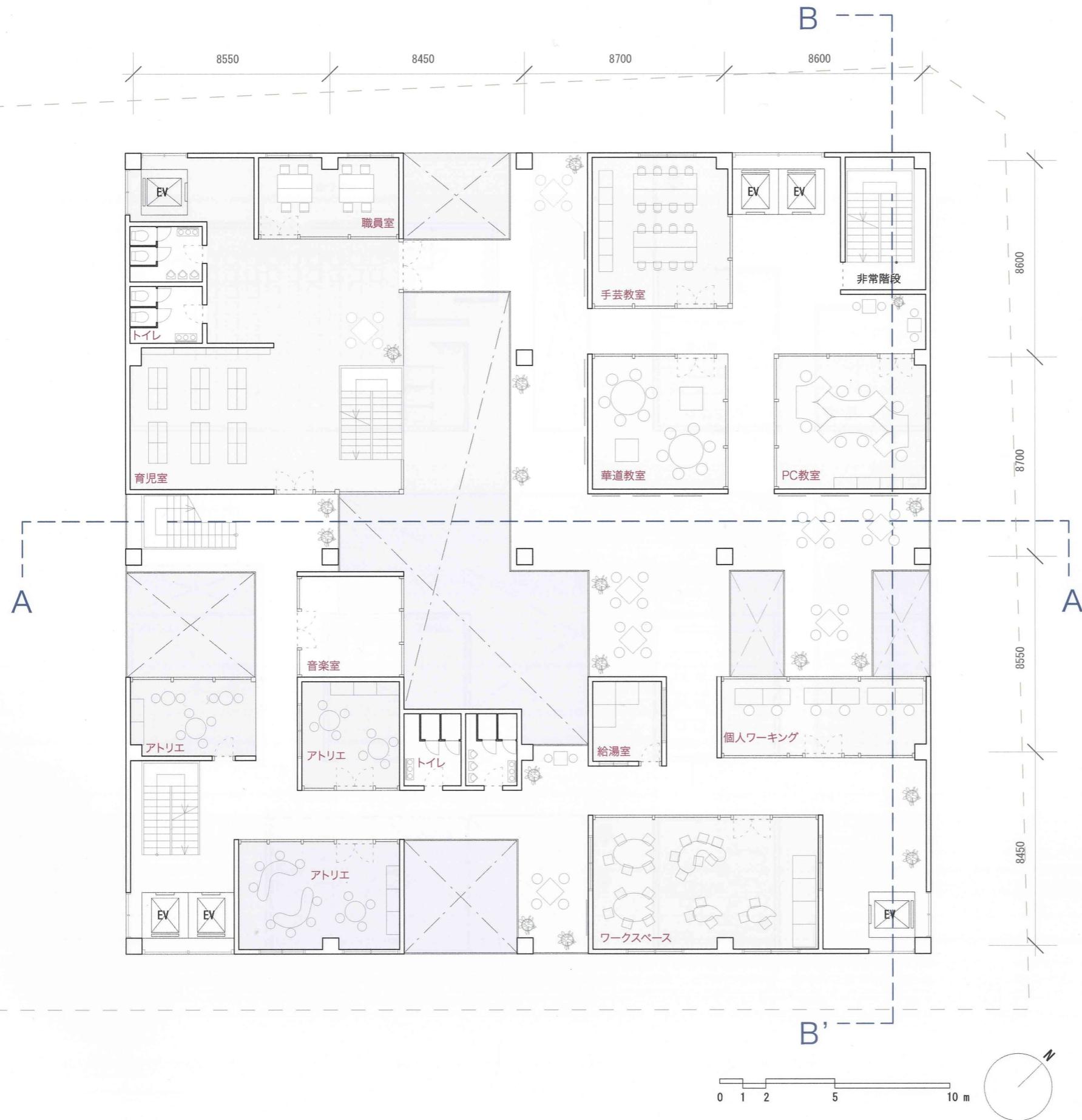
一番広い開架図書



図書と保育室の間の児童図書



広い保育室



各階のポイント

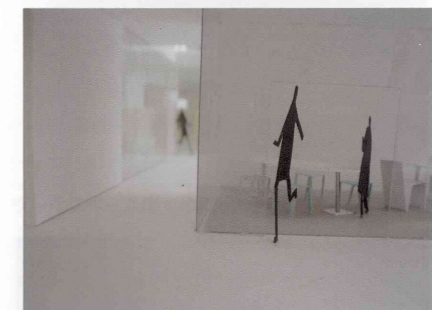
保育室	ブリッジ	習い事
音楽室		行き止まり展示
アトリエ	吹き抜け	ワークスペース



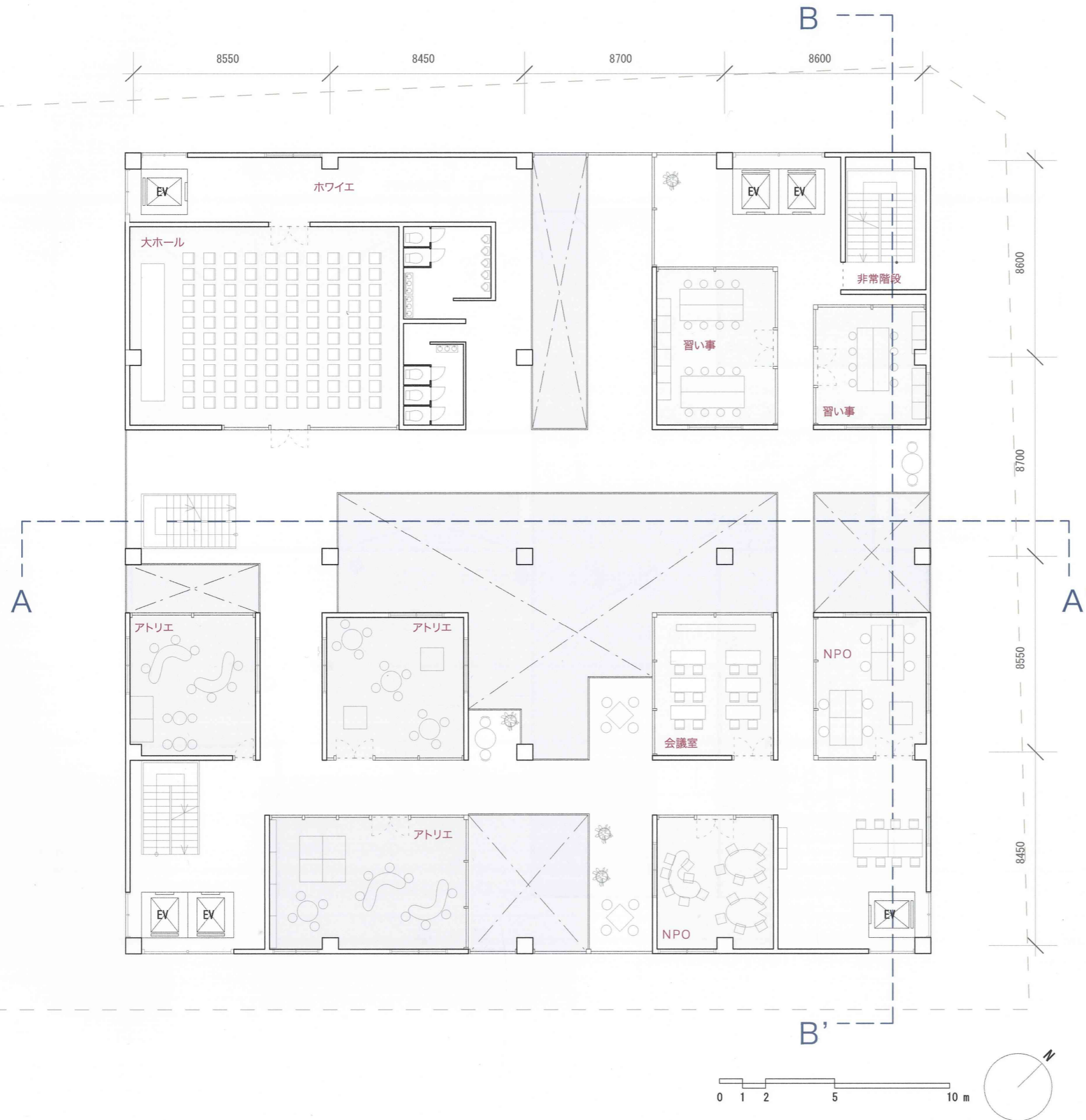
開港によってアトリエとワークスペースを繋ぐ



行き止まりを転じ空間とする



路地による繋がり



各階のポイント

小ホール	吹き抜け	習い事
ラウンジ		ブリッジ
アトリエ	吹き抜け	NPO



アトリエ同士の関係



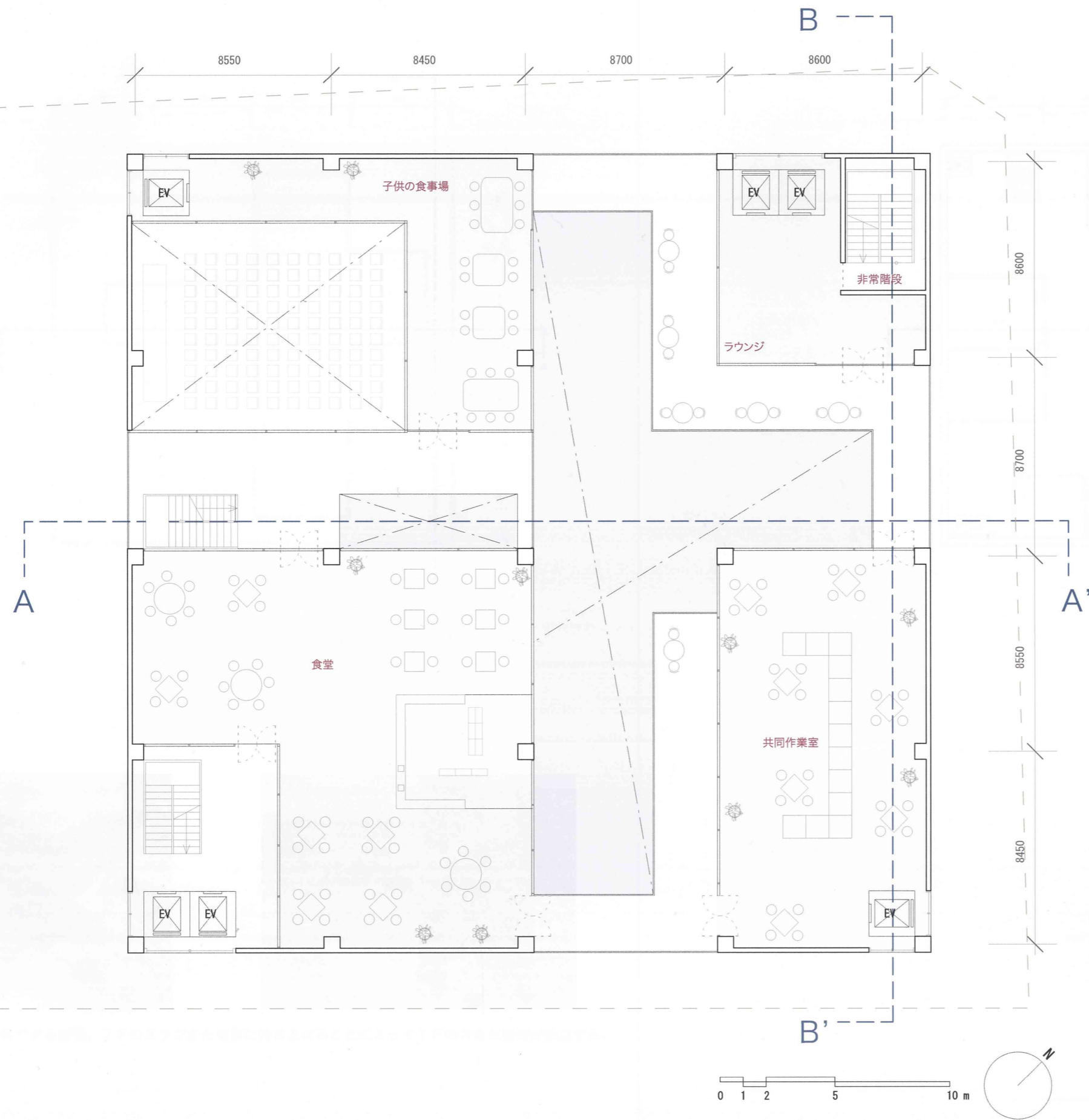
吹き抜けが広がってくる



ワークスペース同士の関係



内に開いた小ホール



各階のポイント

子供の食堂	吹き抜け	ラウンジ
吹き抜け		吹き抜け
食堂	吹き抜け	共同作業



下の階との関係がはっきりする



建物全体の共同作業場

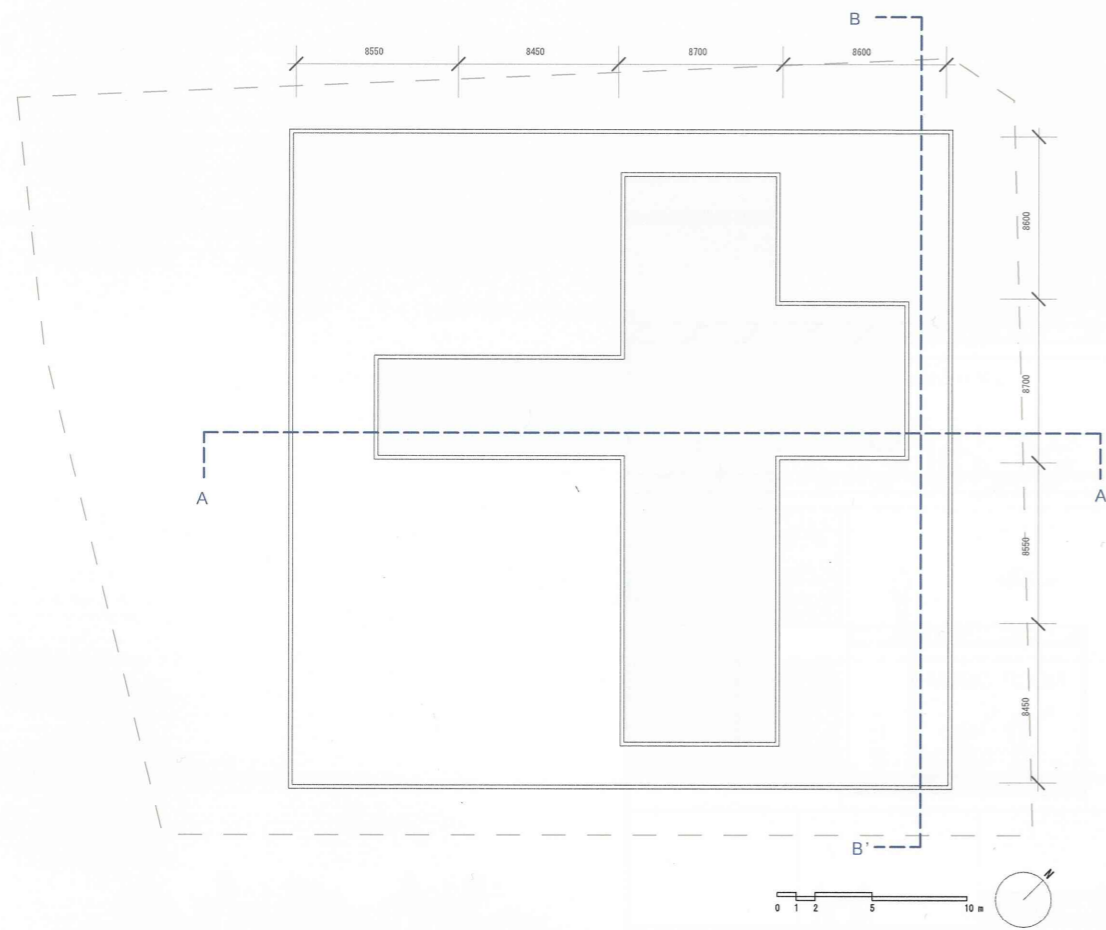


吹き抜け空間

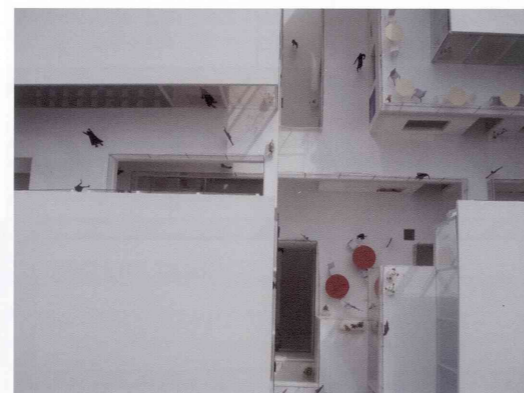
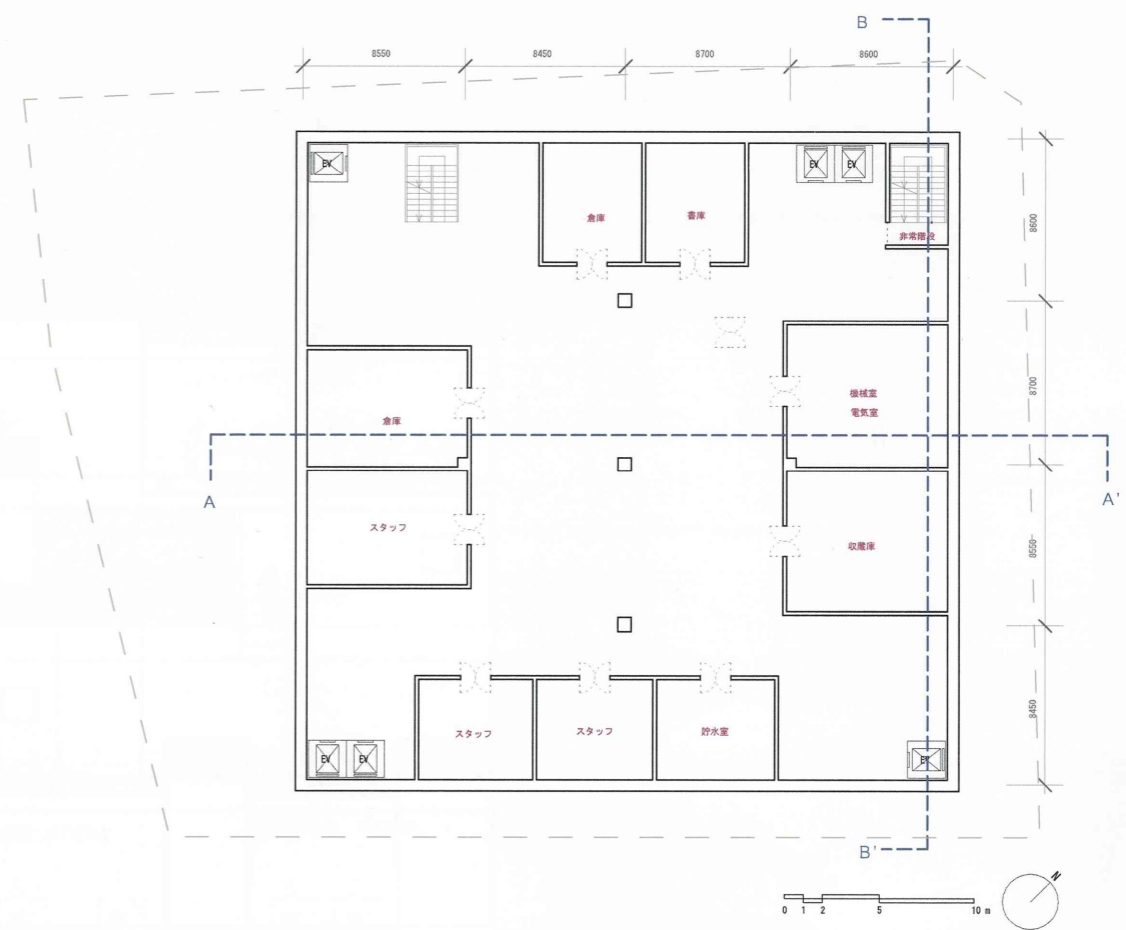


大きなスケールの食堂

ROOF 1:400



B1 1:400

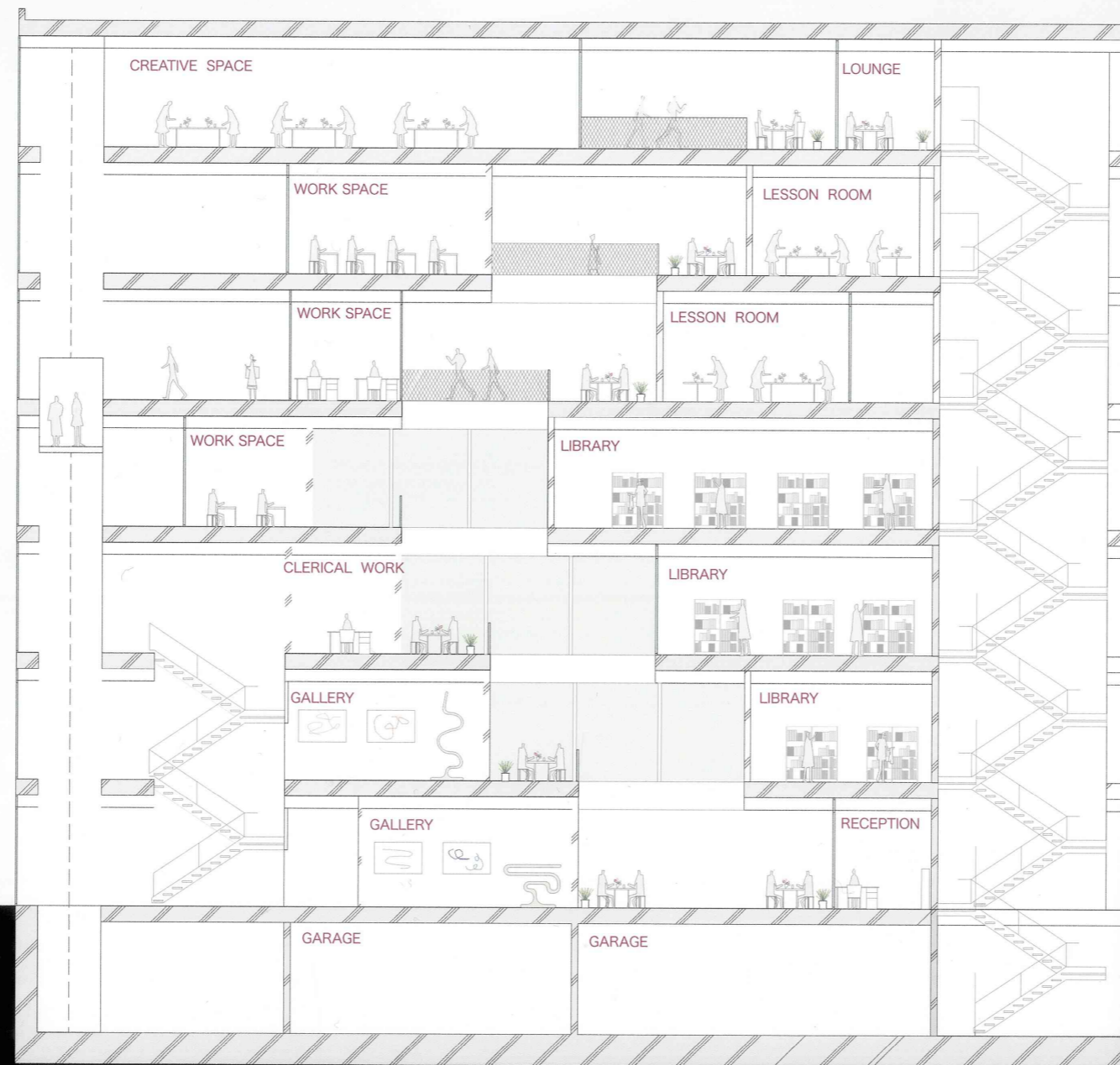


吹き抜けを生かすことのできる屋根。7Fのスラブから垂直に持ち上げることによって7Fの大きな空間が独立する。

A-A' SECTION 1:200



B-B' SECTION 1:200

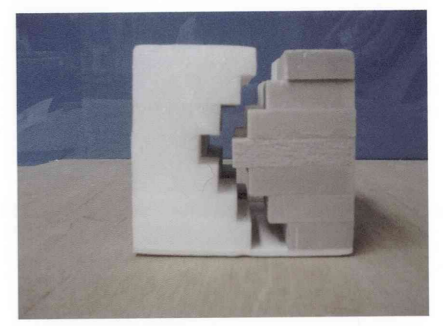


SOUTH ELEVATION 1:200

南側立面図ではショップ・ギャラリー・アトリエが見えてくる。街の賑わいそのままファサードに表現したことで開口が多くなっている。



各立面のポイント



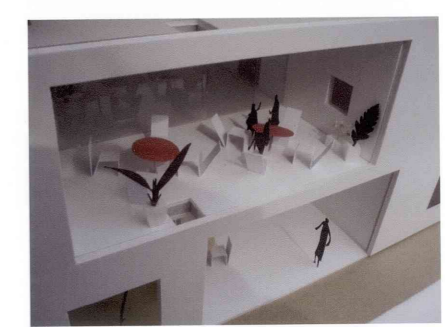
STUDY MODEL 南側立面写真



本模型 南側立面写真



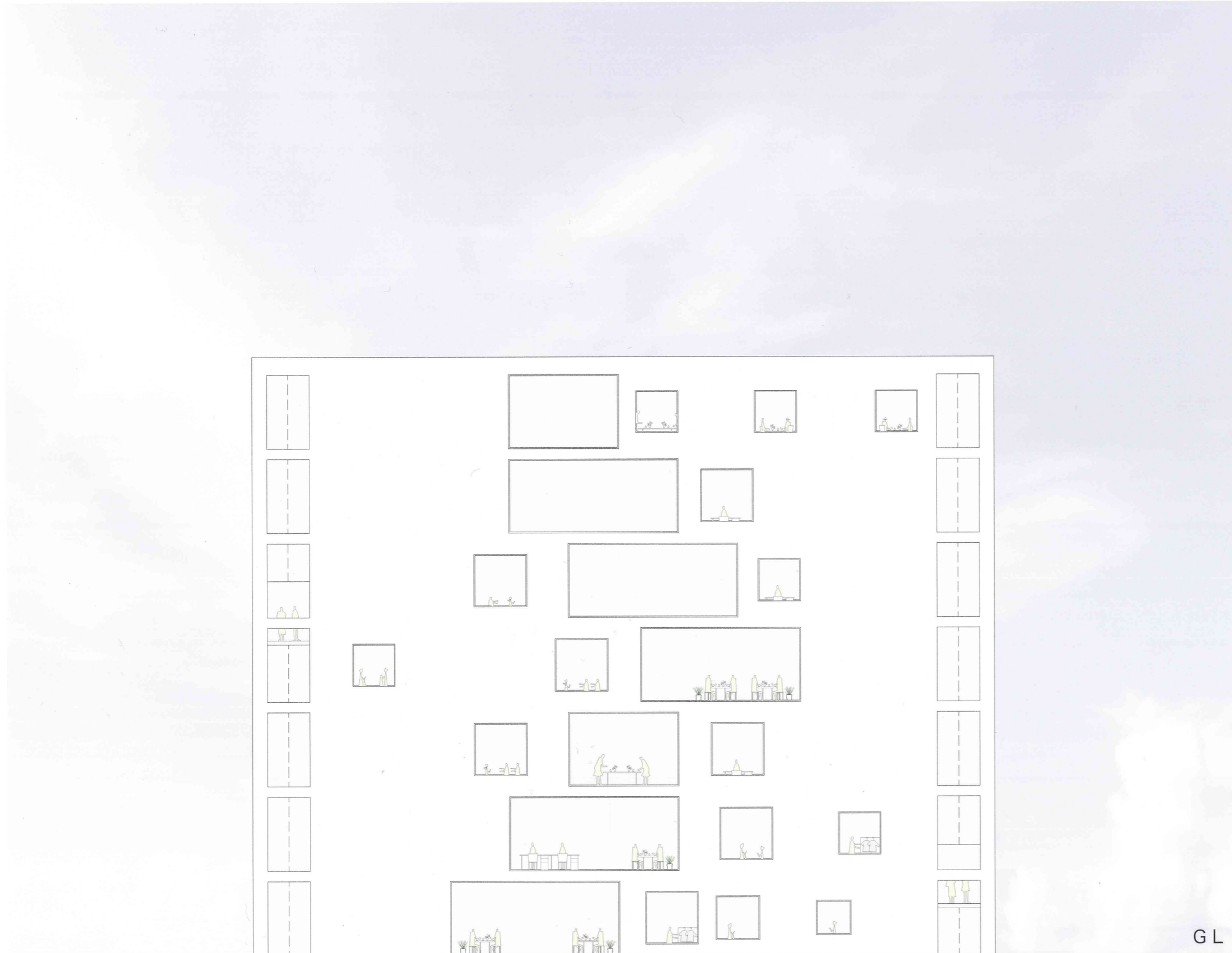
内部空間がファサードを決定していく



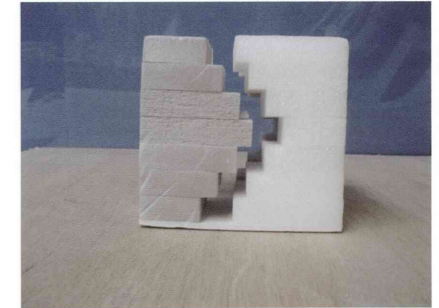
段々状の吹き抜けが立面に表れる

EAST ELEVATION 1:200

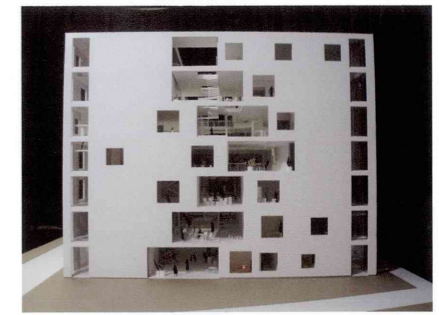
東側立面には、保育室があり大きな開口を開けすぎると子供が怖がるかもしれないので注意した。開口は小さいが保育室・ショップ・アトリエなどが切り取られた風景は賑やかである。



各立面のポイント



CONCEPT MODEL 東側立面



本模型 東側立面写真



開口は小さいが、東側なので光は良く入る



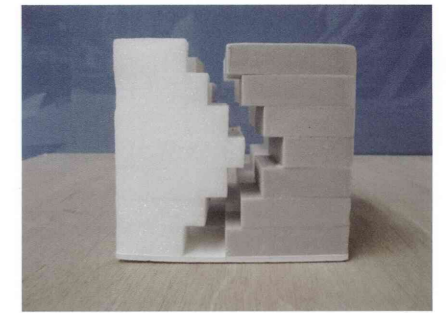
保育室は、お遊戯の場所だけ大きな開口を開ける

NORTH ELEVATION 1:200

南側立面図は、住宅の方を向いているので2階まではあまり開口を開けないようにした。エレベーターが3台あるので住宅の向こうに良い景色が見える。



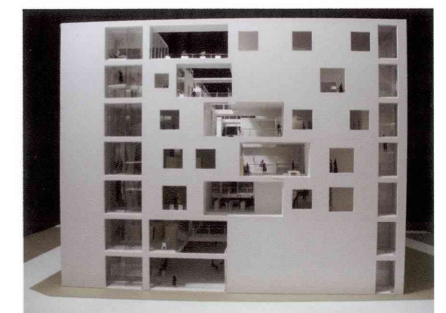
各立面のポイント



CONCEPT MODEL 南側率面



本模型 東側立面写真



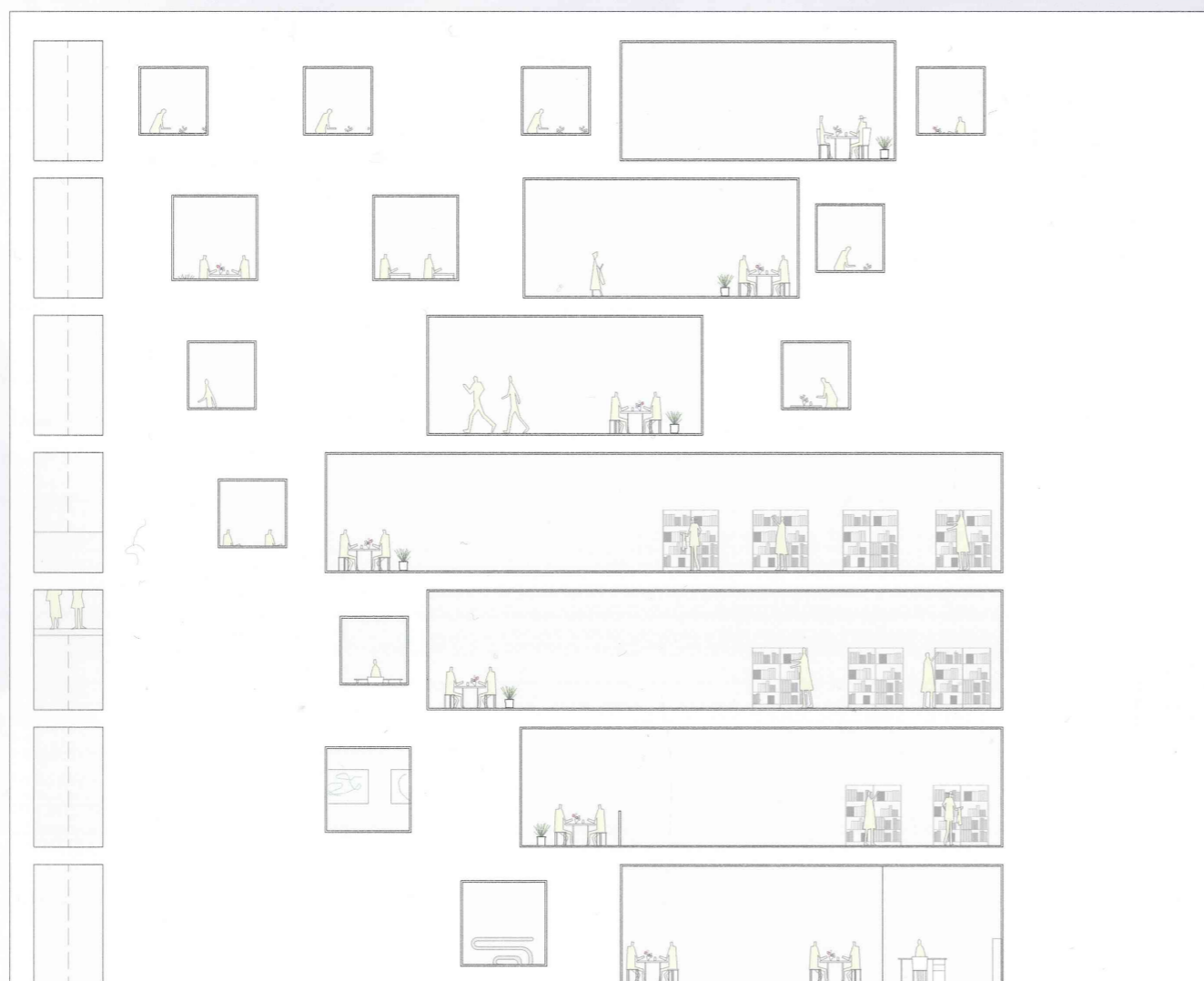
本模型 東側立面写真



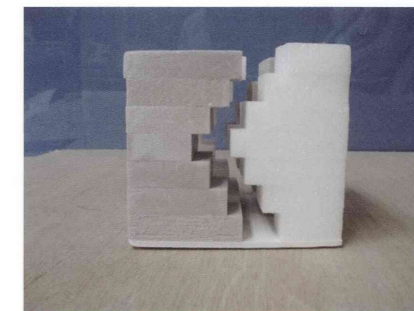
3階より上は段々状のテラスが続いている

WEST ELEVATION 1:200

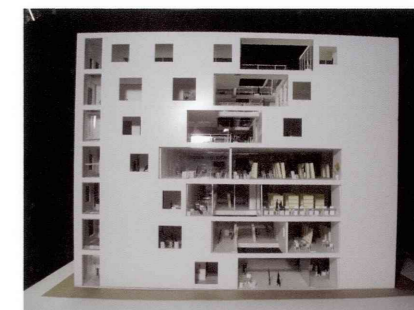
西側立面図では、図書館の開口を最大限にとつたため 断面図の様なファサードが見えている。図書で大きな開口を開けたので他は抑え気味になっている。



各立面のポイント



CONCEPT MODEL 西側立面写真



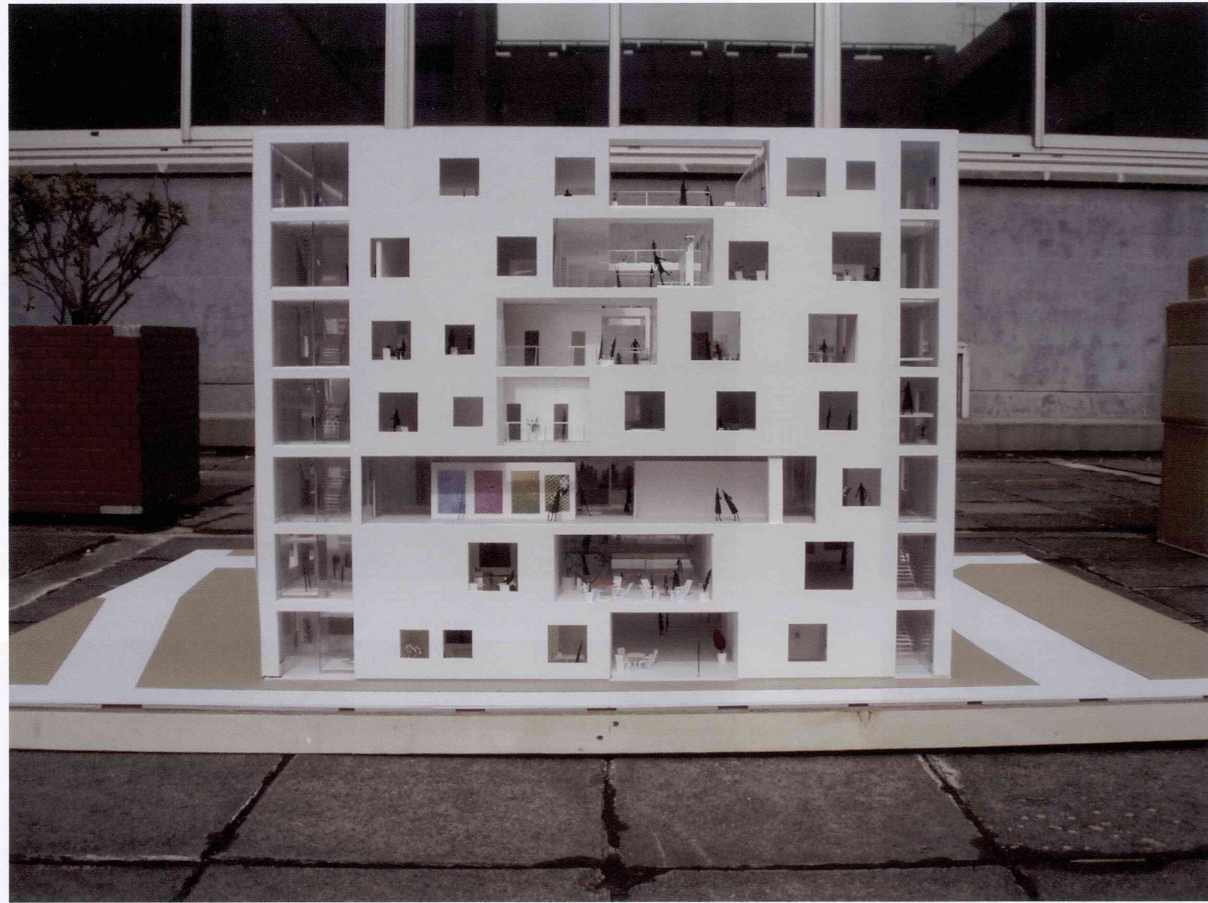
本模型 西側立面写真



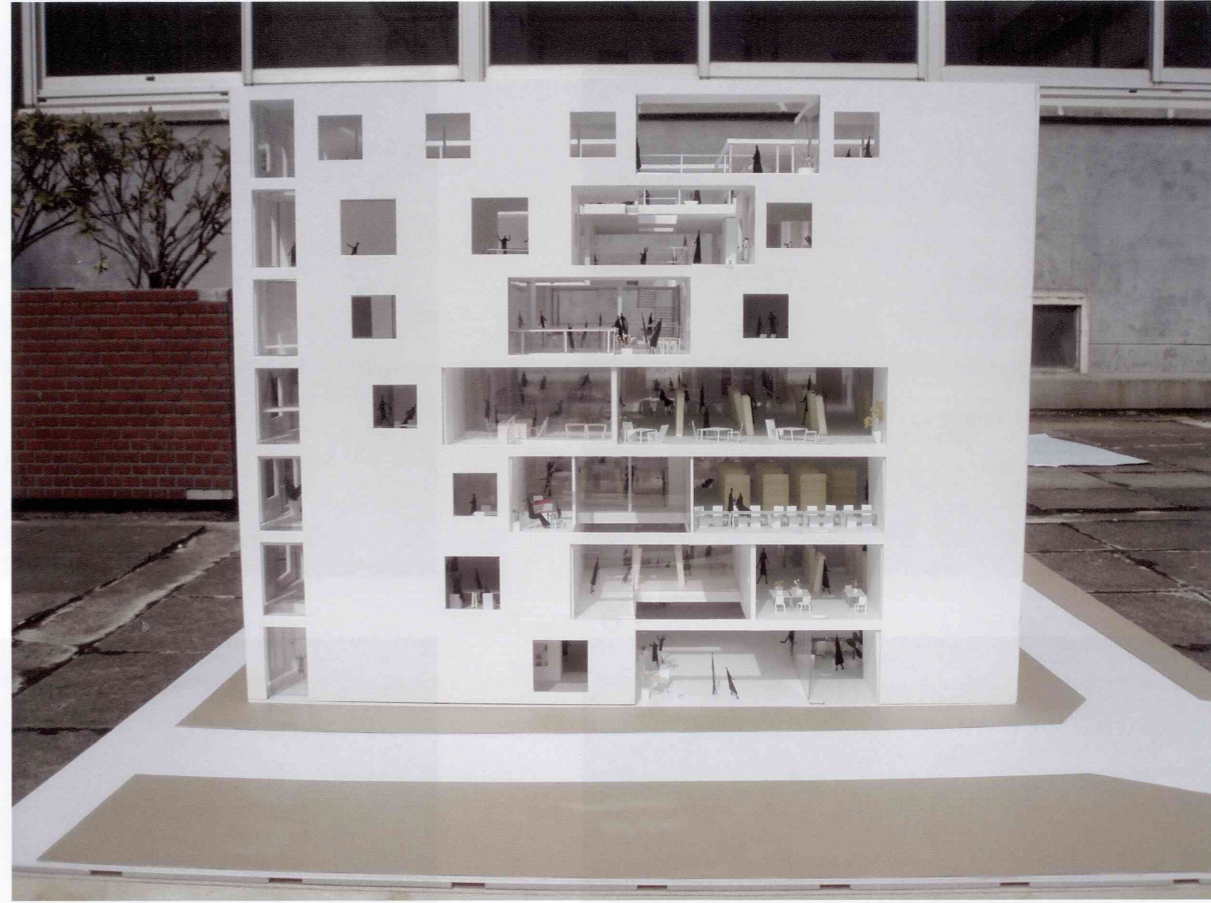
図書館の開口を最大限開けた断面の様な立面



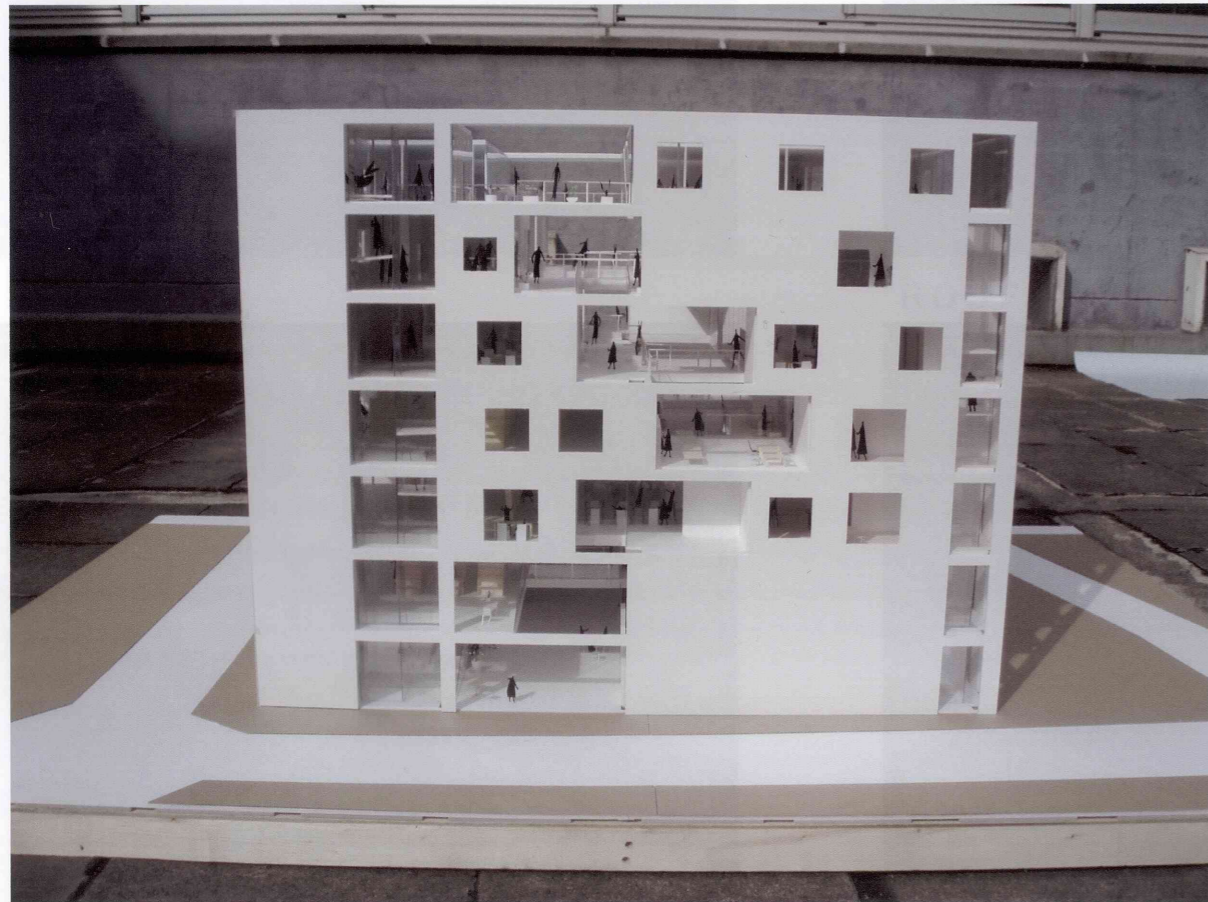
南側立面



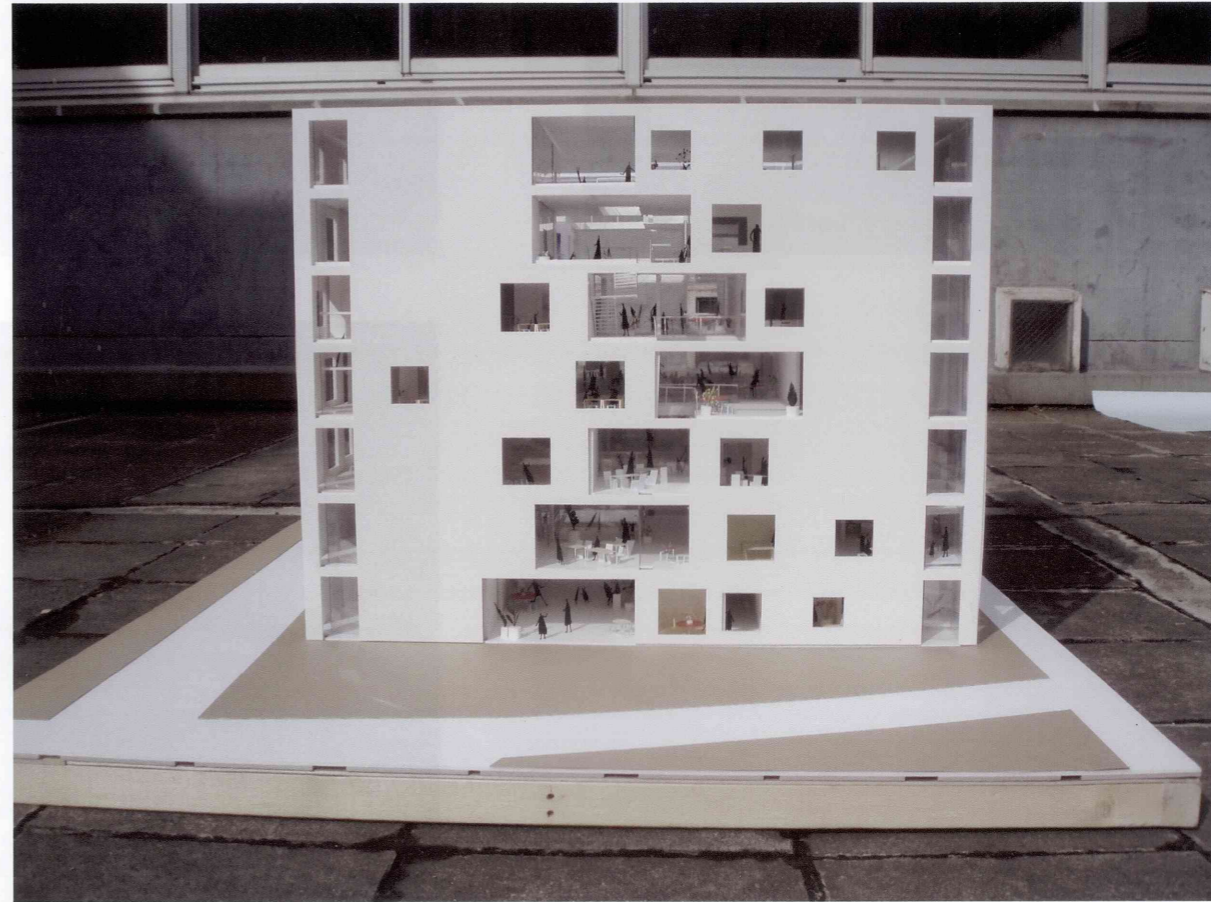
西側立面



北側立面



東側立面



1 F



2 F



3 F



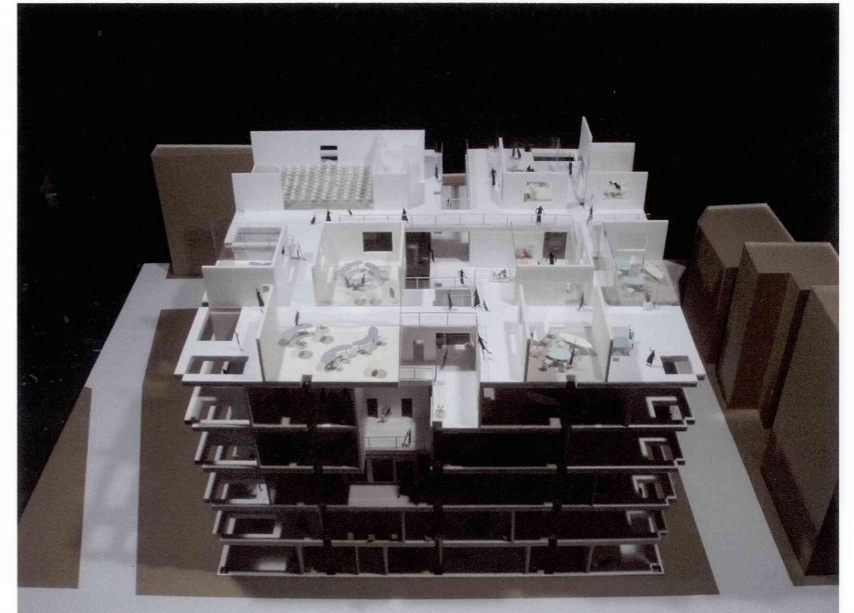
4 F



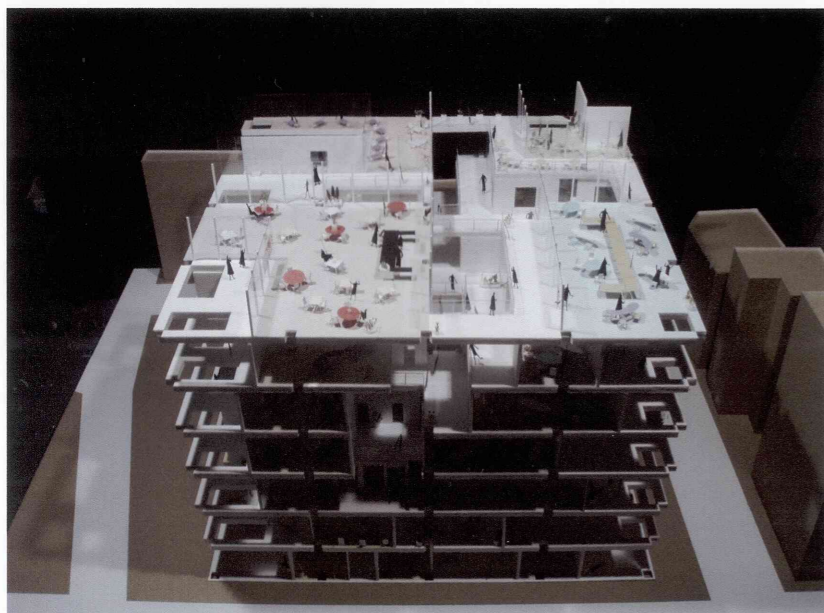
5 F



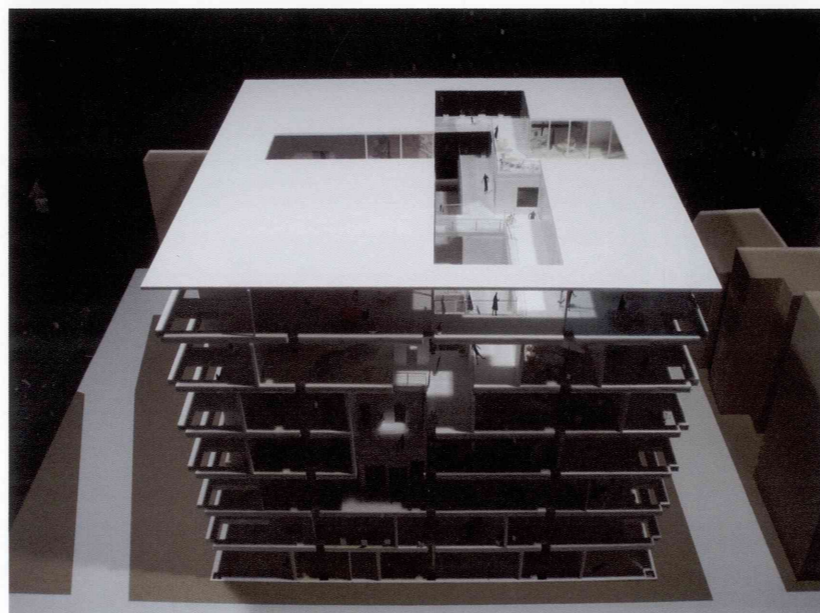
6 F



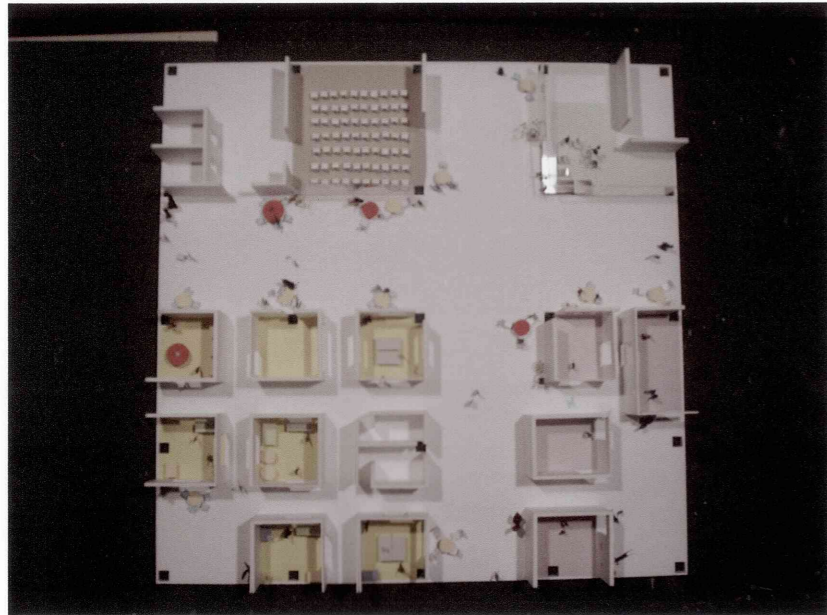
7 F



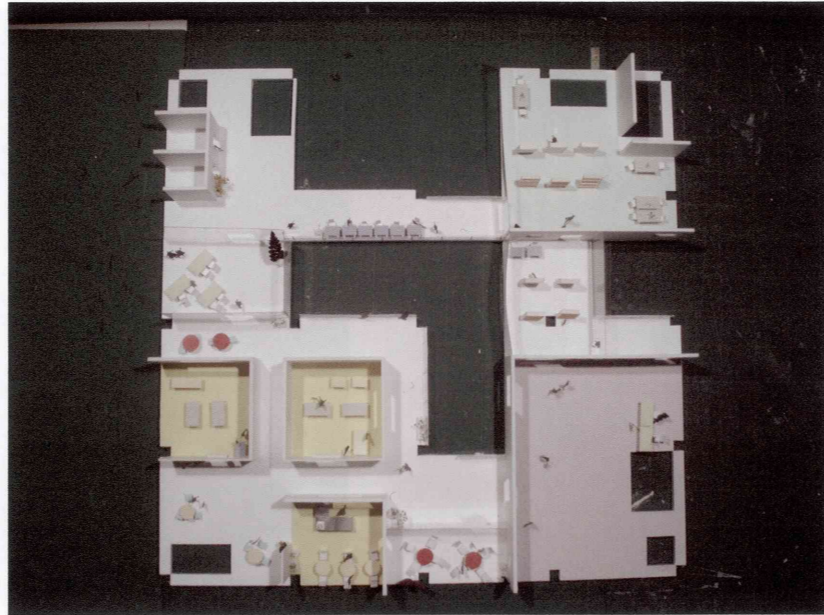
ROOF



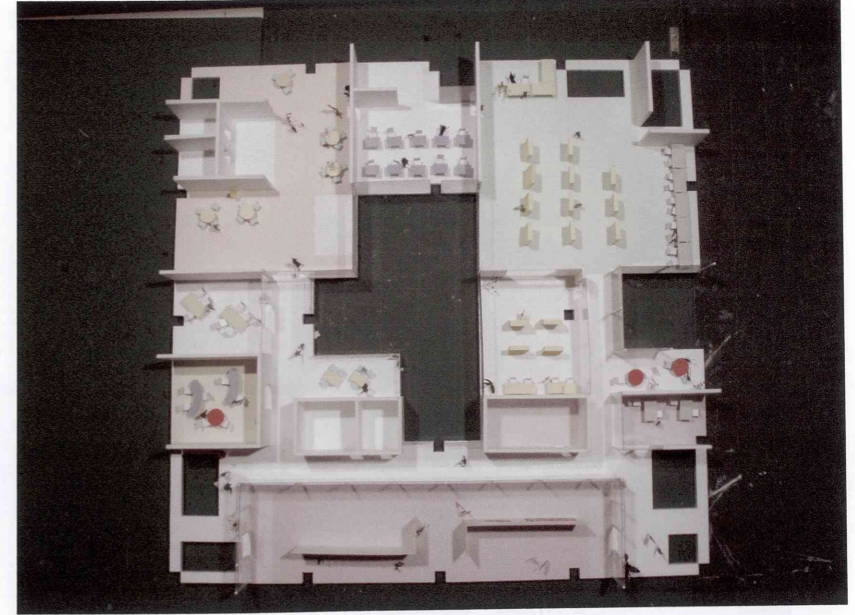
1 F



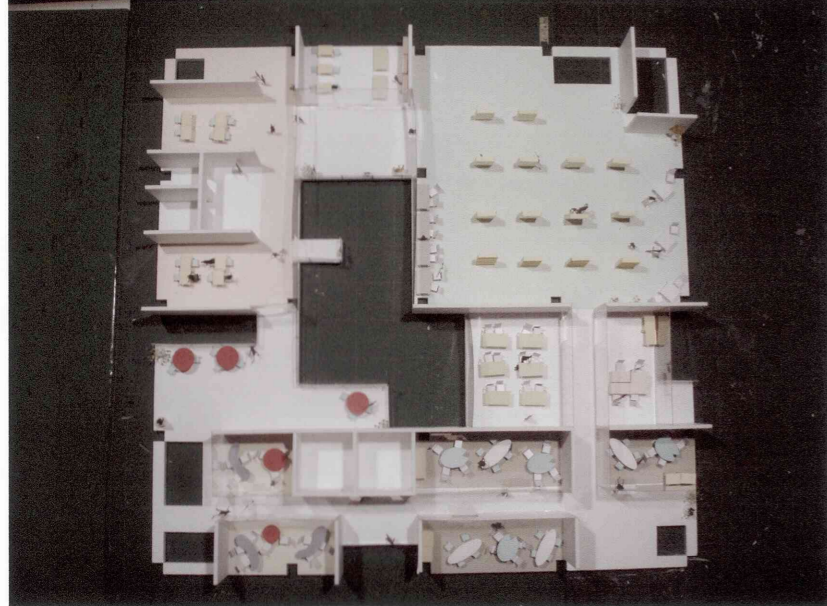
2 F



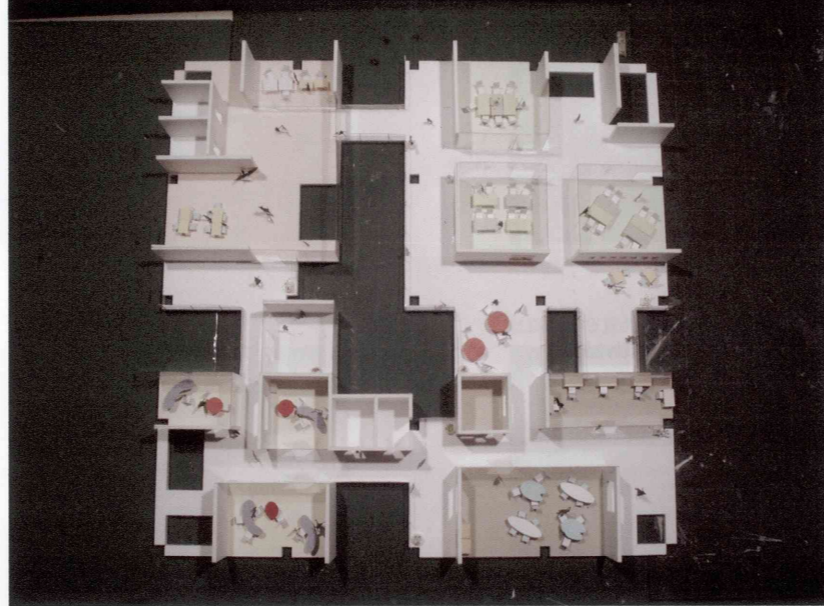
3 F



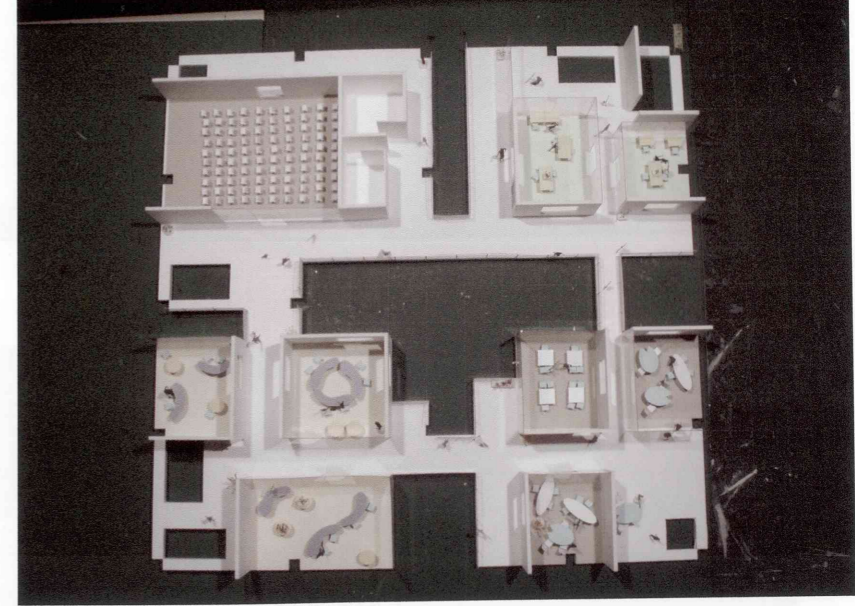
4 F



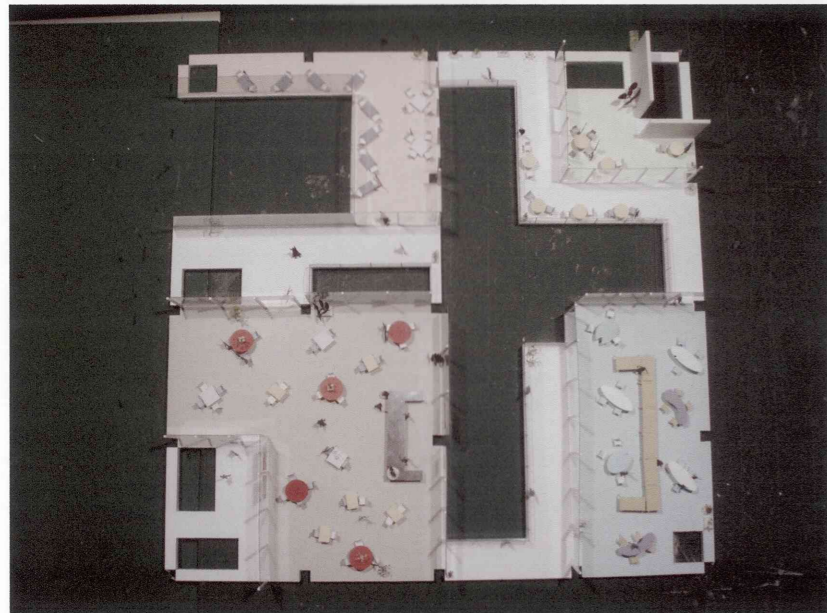
5 F



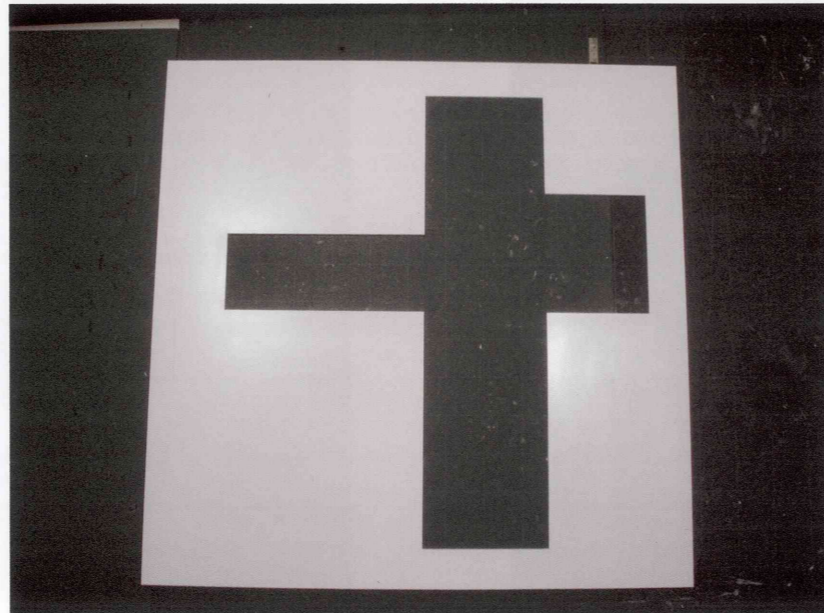
6 F



7 F



ROOF



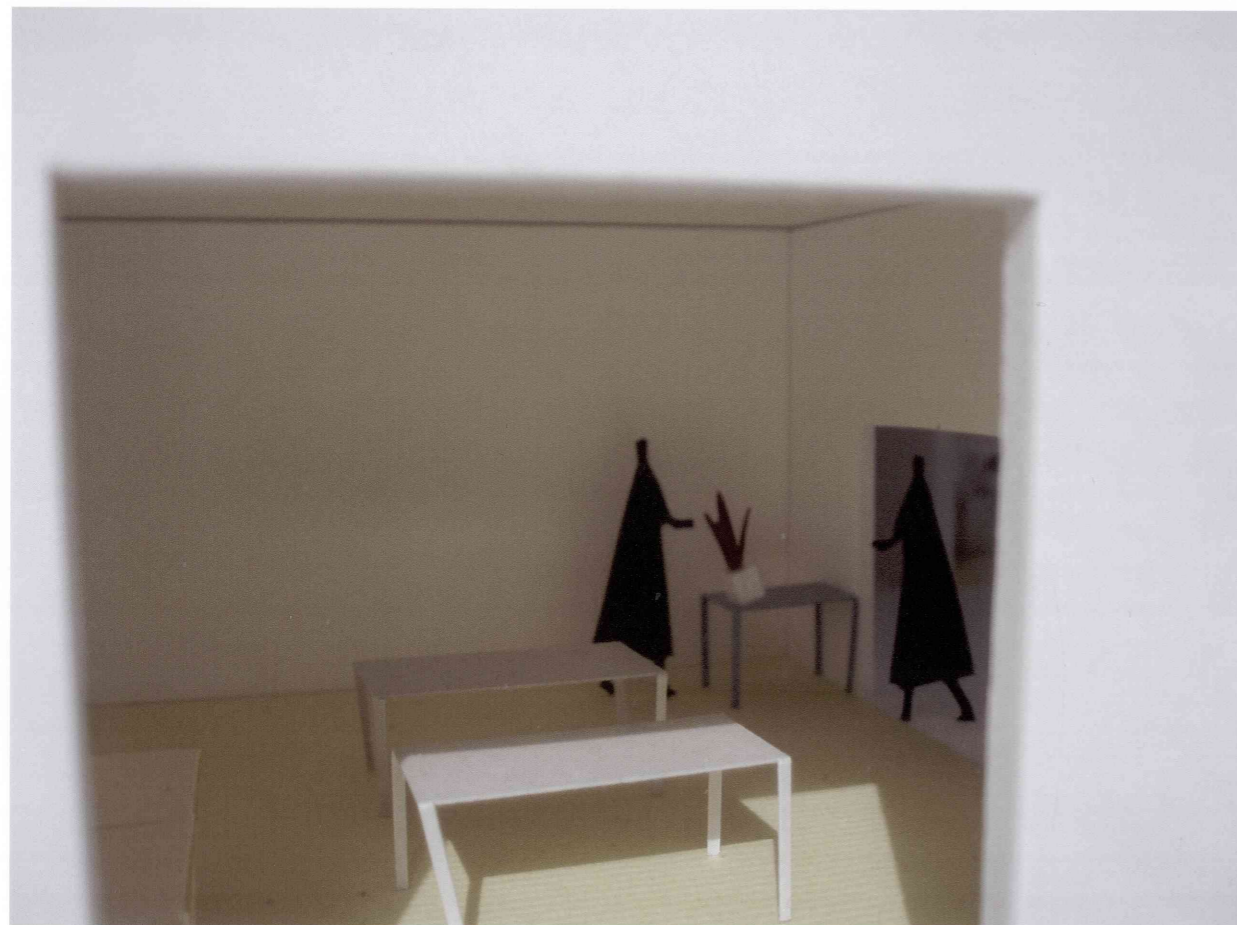
箱型の企画展示



1Fの中心はヒロバになっている



街の賑やかさを引き込むショップ



ヒロバから見える内に開いたステージ



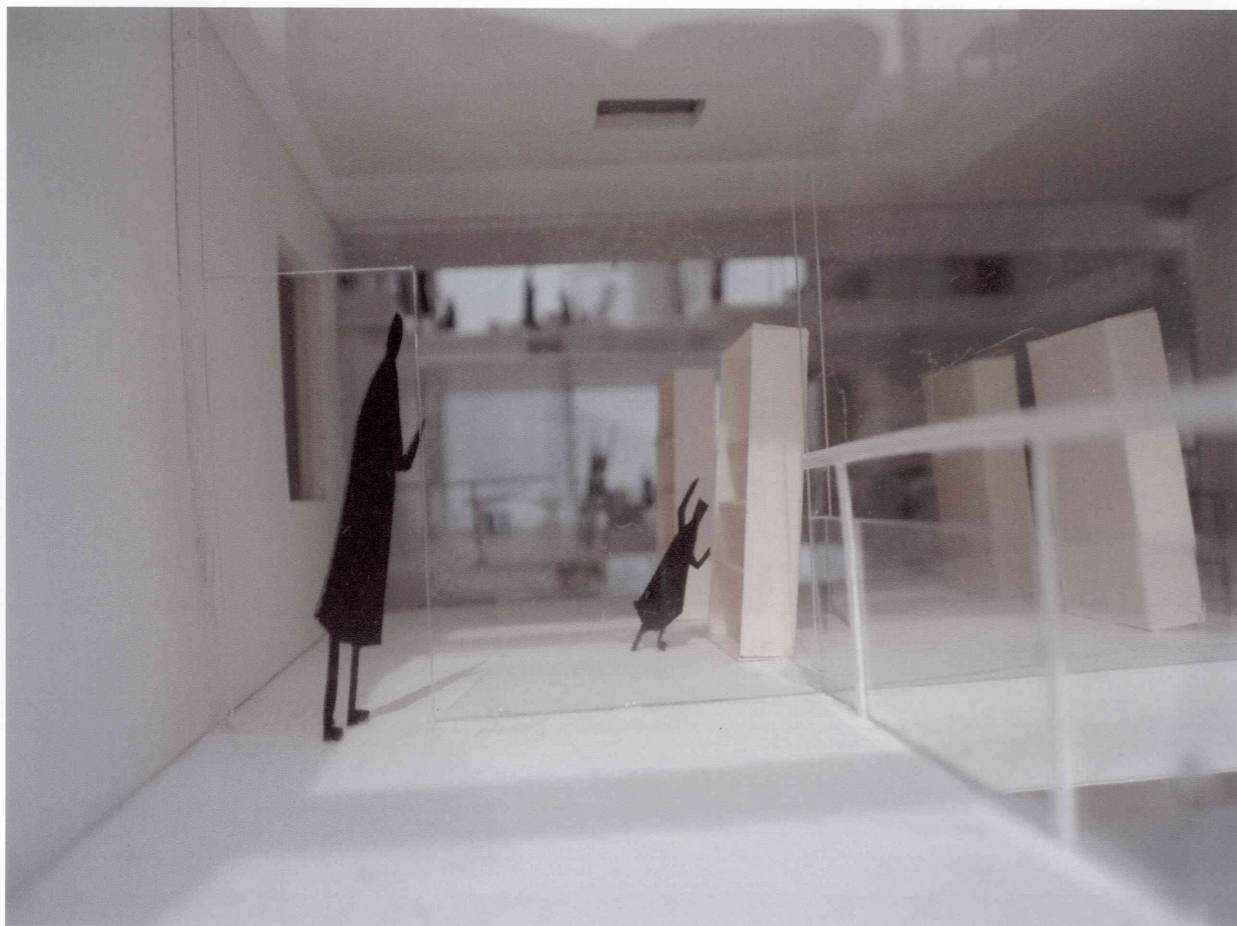
ギャラリーから美術書画が見える



ショップとギャラリーの間にカフェテラス



ギャラリーと図書のための美術図書



ブリッジのような勉強通り



横断するギャラリー



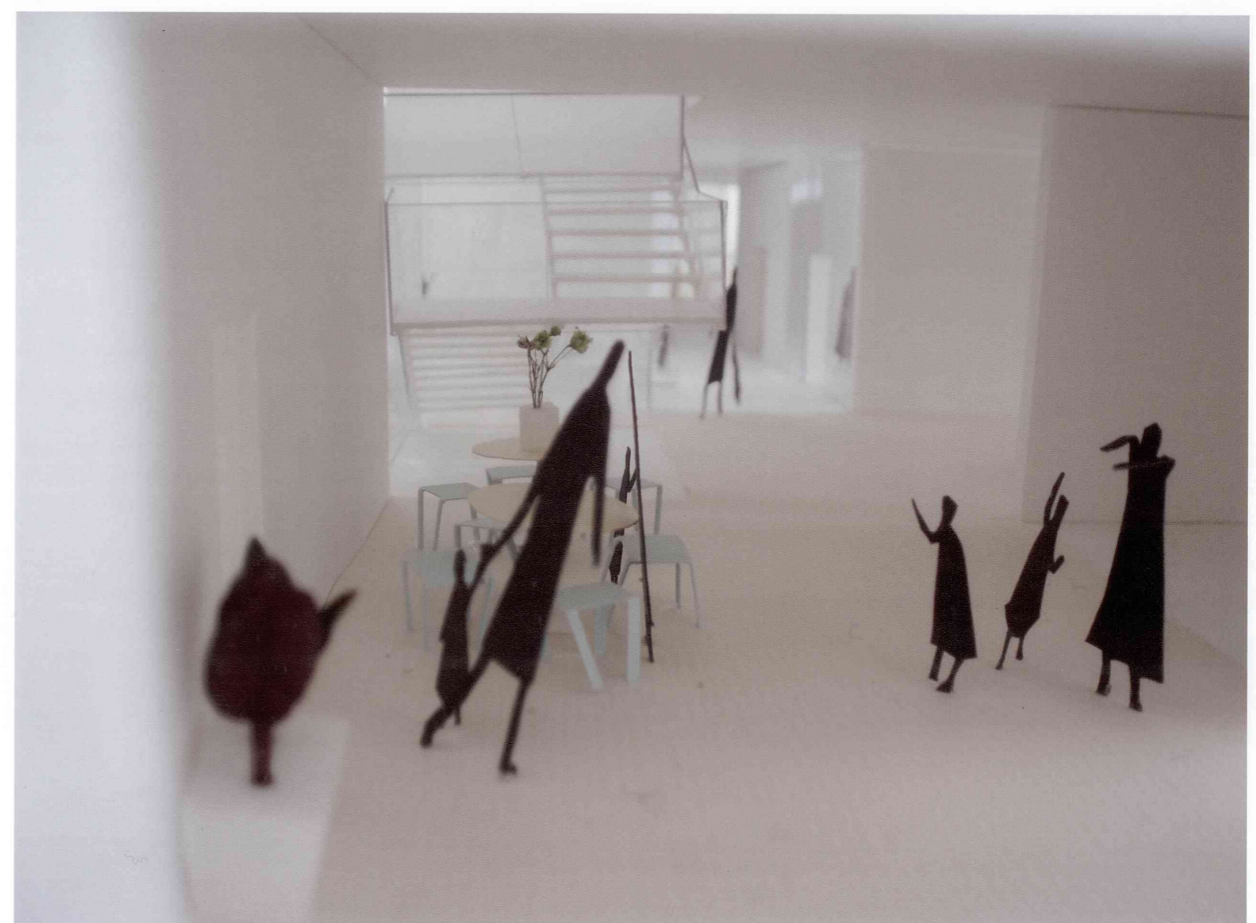
3階からは開架図書がはじまる



AVコーナーから奥行きのある風景



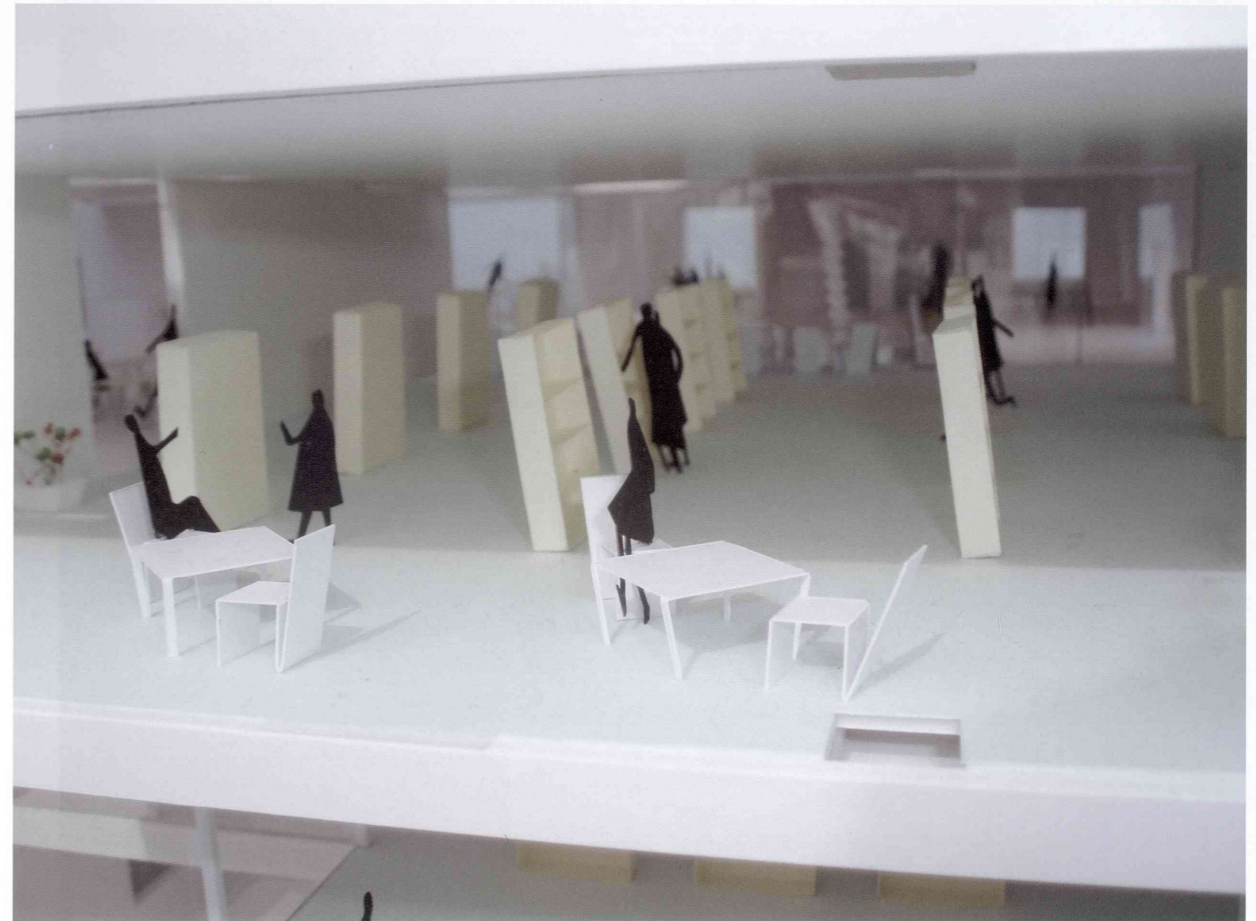
保育室がはじまる



ラウンジの奥に見える講義室



一番広い開架図書



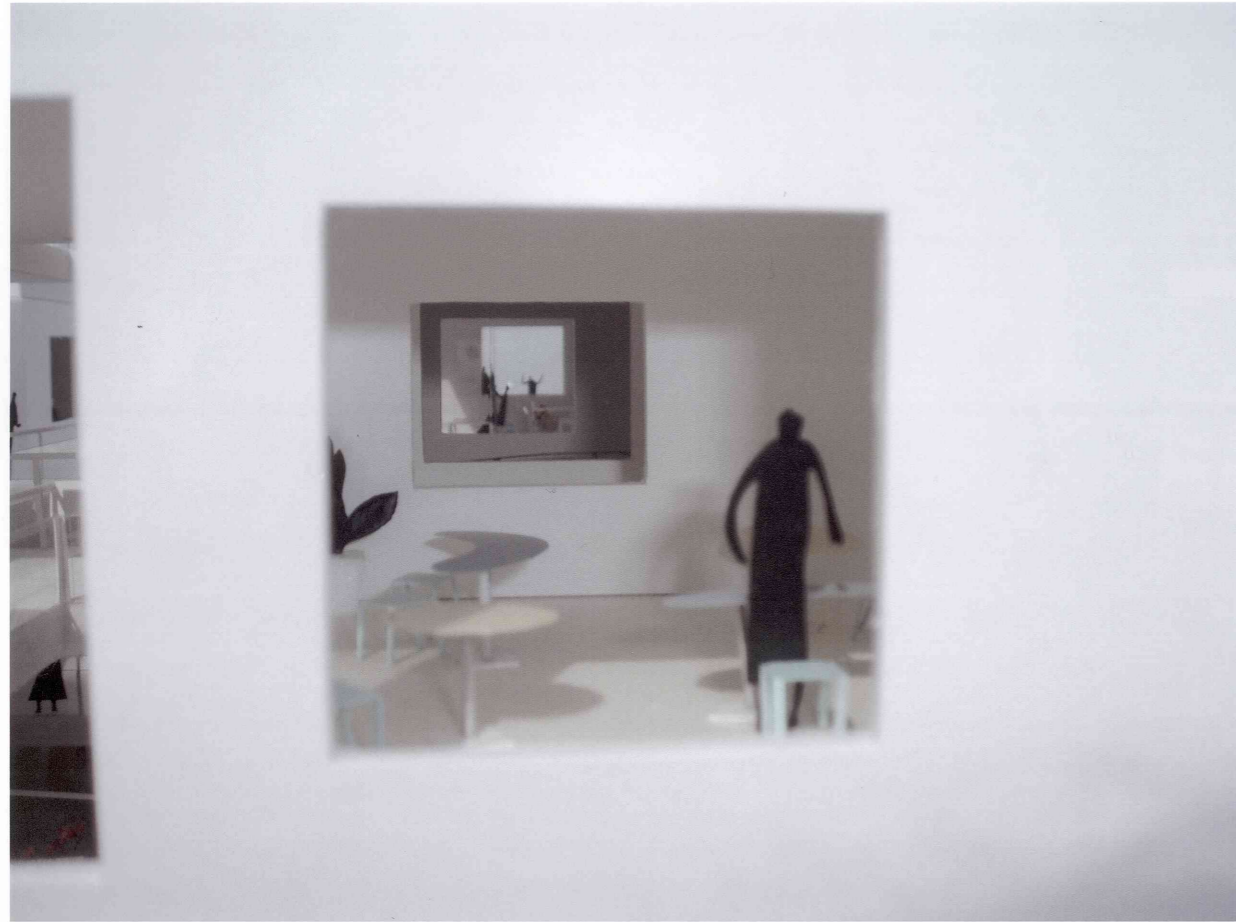
図書と保育室の間の児童図書



広い保育室



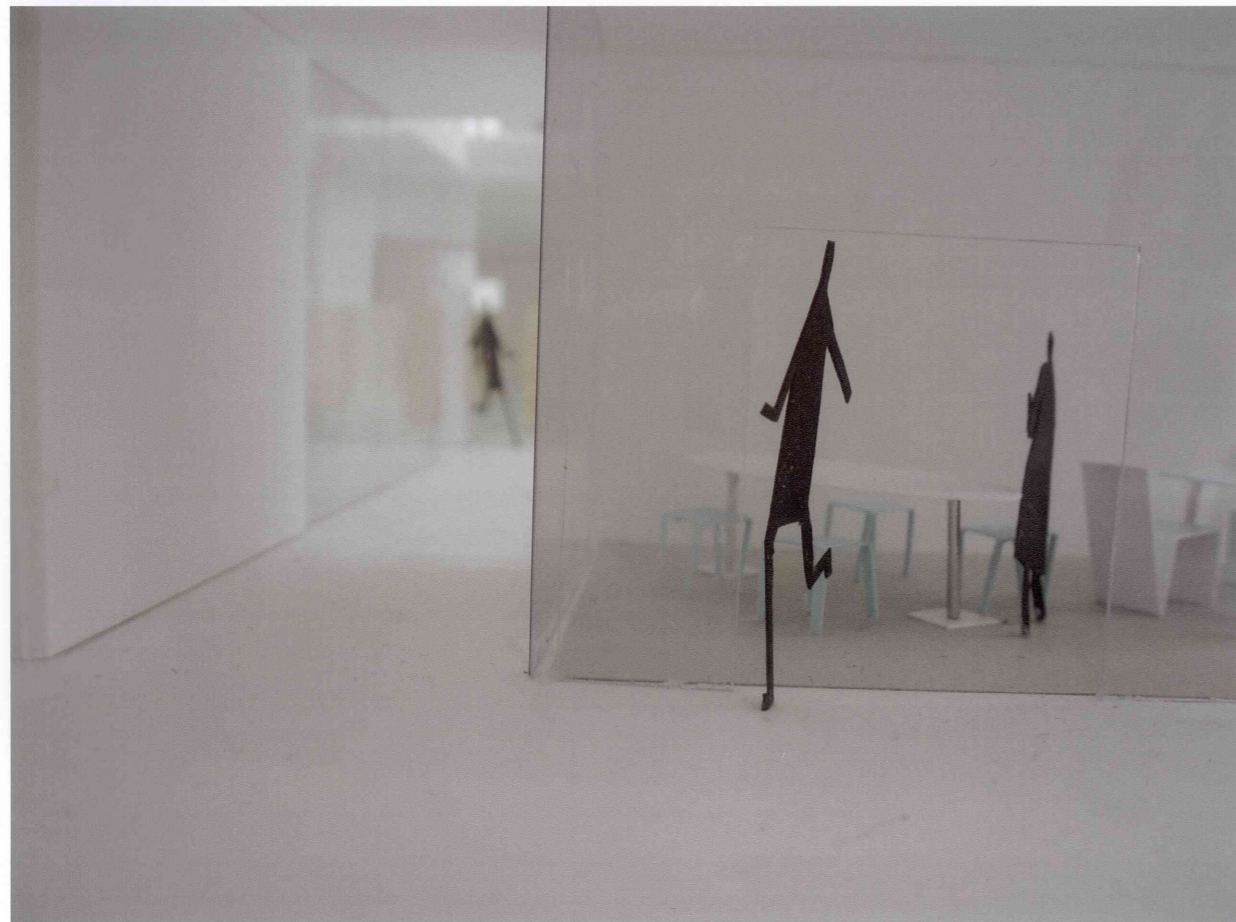
開港によってアトリエとワークスペースを繋ぐ



行き止まりを転じ空間とする



路地による繋がり



アトリエ同士の関係



吹き抜けが広がってくる

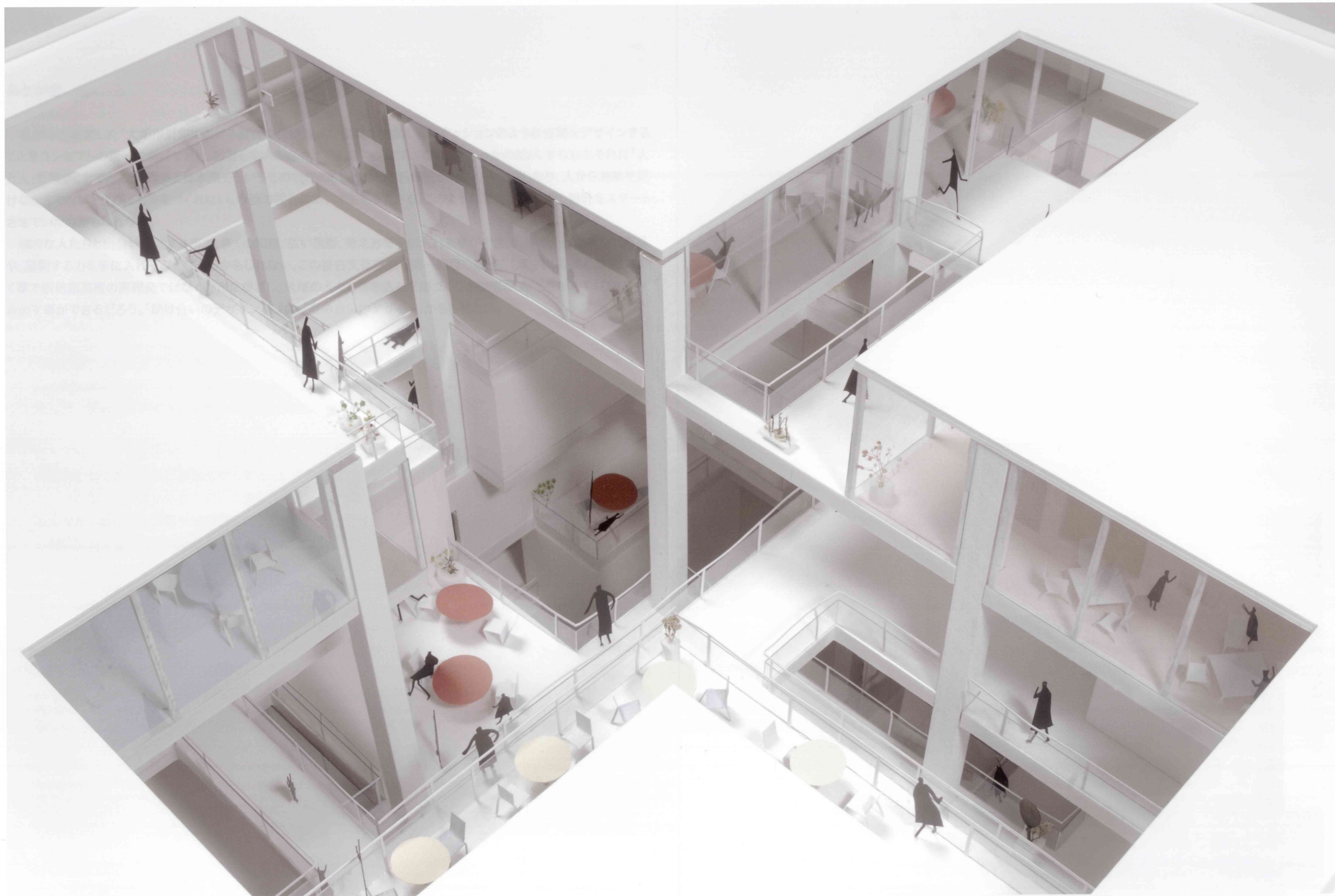


ワークスペース同士の関係



内に開いた小ホール

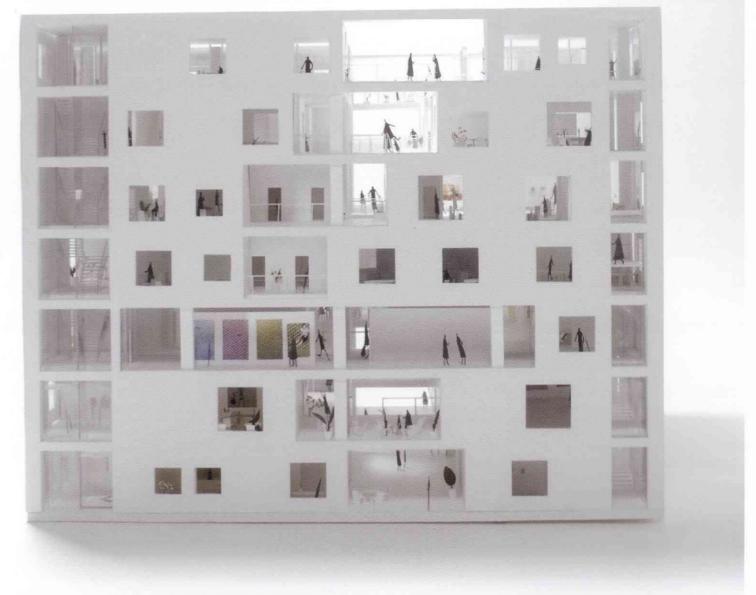




あとがき

私が今回提案した「大都市近郊における複合文化施設」は、機能と機能の間にクッションのような空間をデザインすることをコンセプトの第一に挙げてきた。設計している途中まで私自身も気づいてはいなかったのだが、すなわちそれは「人と人」を繋ぐことであろう。建築とは本来そういうものなのかもしれないと私は思う。私は、人と話したり、人から刺激を受けながらでないと上手くものをつくれぬ。今回の設計においてもそうである。このような考えから本修士設計をスタートさせていたのかもしれない。

様々な人たちと出会い交流する事で、多くの知識、広い視野、考え方を手に入れる事ができ、自分の分野で新しい発見や、展開する力を手に入れる事ができるかもしれない。この複合文化施設を第一期目の建物とし町田に段々と増やして行く事で駅前超高層の再開発ではなく都市に根ざし、地域の人々も巻き込んだ街づくりが出来き、新たなMATIDAを生み出す事ができるだろう。「助け合いのデザイン」これは「高め合いのデザイン」かもしれない。



謝辞

6年間。私にとってはとても幸せな時間でした。
こんな時間を過ごせたのは高山建築学校のおかげです。
吉江さん、岡さん、溝口さん、講師の方々、仲間たち、本当に感謝しています。
ありがとう。

何もできない自分を受け入れて下さり、ご指導していただいた大江新先生
私は、大江研究室で良かったです。ありがとうございました。

大江研究室の仲間として3年間一緒に過ごした
ヤス、シモジュー、趙くん、みかちゃん、こずえちゃん、ひとしくん、
本当に明るい研究室で、毎日楽しかったのはみんながいたから。
素晴らしい仲間に出会えたことを嬉しく思っています。

今回、修士設計を見てくださった主査の大江新先生、副査の富永譲先生、永瀬克己先生、
多くの的確なアドバイスをくださりありがとうございます。
そして、毎週アドバイスをくださった早川先生には特に感謝しています。

根本正弥くん、鵜川佳丈くん、白井進也くん、3人と共に研究室で過ごせた時間がすごく貴重でした。
自分ひとりで設計したとは思っていません。ありがとう。
忙しい中模型を手伝いにきてくれた伊沢実希子さん、横山春香さん、川野由香子さん、素敵な模型ができました。
みんながいなかったら何も出来なかったと思います。
最後まで付き合ってくれて心から感謝しています。

そして自分のしたいことをして6年間を過ごせたのはすべて両親と大前喜世のおかげです。
心から感謝しています。



参考文献

新建築 1986年1月号 新建築社

新建築 1992年7月号 新建築社

新建築 1999年5月号 新建築社

新建築 2001年3月号 新建築社

新建築 2002年11月号 新建築社

新建築 2005年5月号 新建築社

a+u 建築と都市 2006年8月臨時増刊 Herzog&de Meuron エー・アンド・ユー

JA61 小嶋一浩+赤松佳珠子/Cat 新建築社

アクティビティを設計せよ! 学校空間を軸にしたスタディ 小嶋一浩 彰国社

町田の歴史をたどる 町田の歴史をたどる編集委員 町田市

町田市役所公式ホームページ <<http://www.city.machida.tokyo.jp/index.html>>